今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第10集

今宿高田遺跡

福岡市西区今宿所遺跡の調査

1984

福岡県教育委員会

今宿 高田遺跡

福岡市今 福岡市西区今宿所遺跡の調査

序

今後，「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第10集を刊行することとなりました。

本報告書は，福岡県教育委員会が建設省から委託を受け，一般国道202号線今宿バイパス建設に伴い，昭和57年度に実施した埋蔵文化財の調査記録であります。

遺跡から出土した鉄滓の分析については，新日鉄八幡製鉄所技術部研究室の大澤正己先生にお願いし，原稿を収録させていただいたことは喜びにたえません。

本書が文化財の保護及び普及活用の一助となれば幸甚に存じます。

発刊に際し，調査に協力いただいた地元諸氏，建設省九州地方建設局の方々に心からお礼申し上げます。

昭和59年３月31日

福岡県教育委員会

教育長　友野　隆

例　言

1．本報告書は，昭和57年度に福岡県教育委員会が建設省九州地方建設局の委託を受けて実施した一般国道202号線今宿バイパス建設予定地に係る埋蔵文化財の第10冊目の調査記録である。

2．本書に収録した遺跡は，福岡市西区大字今宿字高田所在の高田遺跡である。

3．遺跡での実測図及び写真撮影は，橋口達也・佐々木隆彦が作成し，遺構等の製図は豊福弥生・手柴淳子，遺物の実測及び製図並びに遺物写真は佐々木が分担した。

4．本書の執筆はⅠを橋口，以下は佐々木が分担した。

5．鉄滓の分析及び執筆は新日鉄八幡製鉄所技術部技術研究室の大澤正己氏にお願いした。

6．遺物の整理は，岩瀬正信氏の指導のもとで九州歴史資料館で行った。

7．報文中の遺物番号は通し番号とし，実測番号と写真番号は同一である。

8．竪穴住居跡の床面積はプラニメーターを使用した数値である。

9．航空写真は福岡市文化課提供のものである。

10．本書の編集は佐々木が担当した。

本 文 目 次

I　序　章

1　はじめに …… 1

2　調査の経過 …… 1

3　位置と環境 …… 6

II　発掘調査の記録

1　調査の概要 …… 6

2　遺構と遺物 …… 9

(1)　竪穴住居跡 …… 9

(2)　土　壙 …… 49

(3)　柱穴群 …… 52

(4)　溝状遺構 …… 53

(5)　井戸状遺構 …… 58

(6)　谷部の調査 …… 60

III　高田遺跡出土の鉄滓 …… 66

IV　結　語 …… 75

図 版 目 次

図 版 1　高田遺跡航空写真
図 版 2　(1) 溝１と北西側竪穴住居跡群（東から）
(2) 溝１と西側竪穴住居跡群（東から）
図 版 3　(1) 溝２と南側竪穴住居跡群（東から）
(2) 溝２と井戸状跡，竪穴住居跡群（東から）
図 版 4　(1) ２号竪穴住居跡（南から）
(2) ２号竪穴住居跡竈出土状態
図 版 5　(1) ６号竪穴住居跡（南から）
(2) ８号竪穴住居跡（南から）
図 版 6　(1) ９号竪穴住居跡（西から）
(2) 21号竪穴住居跡と遺物出土状態（南から）
図 版 7　(1) 21号竪穴住居跡遺物出土状態
(2) ３号土壙（南から）
図 版 8　３号・５号・６号・８号・12号竪穴住居跡出土遺物
図 版 9　13号・17号・21号竪穴住居跡出土遺物
図 版 10　21号竪穴住居跡出土遺物
図 版 11　21号・22号・23号・26号竪穴住居跡出土遺物
図 版 12　26号・27号・28号竪穴住居跡出土遺物
図 版 13　29号竪穴住居跡，３号土壙，溝１・溝２，谷部包含層出土遺物
図 版 14　谷部包含層出土遺物
図 版 15　谷部包含層，５号・23号竪穴住居跡，５号土壙出土遺物
図 版 16　溝１・溝２，谷部包含層出土遺物

挿 図 目 次

頁
第 1 図　高田遺跡と周辺の主要遺跡分布図（縮尺1/50,000）…… 5
第 2 図　高田遺跡位置図（縮尺1/10,000）…… 7
第 3 図　高田遺跡付近地形図（縮尺1/2,000）…… 8

第 4 図　高田遺跡遺構配置図（縮尺1/200）……折り込み
第 5 図　1号・24号・25号竪穴住居跡実測図（縮尺1/60）…… 10
第 6 図　1号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……11
第 7 図　2号竪穴住居跡・竈実測図（縮尺1/60・1/30）…… 12
第 8 図　2号竪穴住居跡出土土器実測図（縮尺1/3）…… 13
第 9 図　3号・4号竪穴住居跡実測図（縮尺1/60）…… 14
第 10 図　3号竪穴住居跡出土土器実測図（縮尺1/3）…… 15
第 11 図　3号竪穴住居跡出土石器実測図（縮尺1/2）…… 16
第 12 図　3号竪穴住居跡出土石器実測図（縮尺1/3）…… 16
第 13 図　4号竪穴住居跡出土土器実測図（縮尺1/3）…… 16
第 14 図　5号竪穴住居跡実測図（縮尺1/60）…… 17
第 15 図　5号竪穴住居跡出土土器実測図（縮尺1/3）…… 18
第 16 図　5号竪穴住居跡出土石器実測図（縮尺1/3）…… 18
第 17 図　6号竪穴住居跡実測図（縮尺1/60）…… 19
第 18 図　6号竪穴住居跡出土土器実測図（縮尺1/3）…… 20
第 19 図　7号竪穴住居跡実測図（縮尺1/60）…… 20
第 20 図　7号竪穴住居跡出土土器実測図（縮尺1/3）…… 21
第 21 図　8号竪穴住居跡実測図（縮尺1/60）…… 21
第 22 図　8号竪穴住居跡出土土器実測図（縮尺1/3）…… 22
第 23 図　9号竪穴住居跡実測図（縮尺1/60）…… 23
第 24 図　10号竪穴住居跡実測図（縮尺1/60）…… 24
第 25 図　10号竪穴住居跡出土土器実測図（縮尺1/3）…… 24
第 26 図　11号・12号・13号竪穴住居跡実測図（縮尺1/60）…… 25
第 27 図　11号竪穴住居跡出土土器実測図（縮尺1/3）…… 26
第 28 図　12号竪穴住居跡出土土器実測図（縮尺1/3）…… 27
第 29 図　13号竪穴住居跡出土土器実測図（縮尺1/3）…… 28
第 30 図　14号・15号・16号竪穴住居跡実測図（縮尺1/60）…… 29
第 31 図　17号・18号・19号竪穴住居跡実測図（縮尺1/60）…… 30
第 32 図　17号竪穴住居跡出土土器実測図（縮尺1/3）……31
第 33 図　18号竪穴住居跡出土土器実測図（縮尺1/3）……32
第 34 図　19号竪穴住居跡出土土器実測図（縮尺1/3）……32
第 35 図　20号・26号・29号・30号竪穴住居跡実測図（縮尺1/60）……33
第 36 図　21号・22号・27号竪穴住居跡実測図（縮尺1/60）……34

第 37 図　21号竪穴住居跡出土土器実測図（縮尺1/3）…… 36
第 38 図　21号竪穴住居跡出土土器実測図（縮尺1/3）…… 37
第 39 図　21号竪穴住居跡出土土器実測図（縮尺1/3）…… 38
第 40 図　22号竪穴住居跡出土土器実測図（縮尺1/3）…… 39
第 41 図　23号・28号竪穴住居跡実測図（縮尺1/60）…… 40
第 42 図　23号竪穴住居跡出土土器実測図（縮尺1/3）…… 41
第 43 図　23号竪穴住居跡出土鉄器実測図（縮尺1/2）…… 42
第 44 図　23号竪穴住居跡出土石器実測図（縮尺1/3）…… 42
第 45 図　26号竪穴住居跡出土土器実測図（縮尺1/3）…… 43
第 46 図　26号竪穴住居跡出土土器実測図（縮尺1/3）…… 45
第 47 図　27号竪穴住居跡出土土器実測図（縮尺1/3）…… 46
第 48 図　28号竪穴住居跡出土土器実測図（縮尺1/3）…… 48
第 49 図　29号竪穴住居跡出土土器実測図（縮尺1/3）…… 48
第 50 図　30号竪穴住居跡出土土器実測図（縮尺1/3）…… 49
第 51 図　1号・3号～6号土壙実測図（縮尺1/60）…… 50
第 52 図　2号土壙出土土器実測図（縮尺1/3）…… 51
第 53 図　3号土壙出土土器実測図（縮尺1/3）…… 51
第 54 図　5号土壙出土石器実測図（縮尺1/3）…… 52
第 55 図　柱穴No.1出土土器実測図（縮尺1/3）…… 52
第 56 図　柱穴No.2出土石器実測図（縮尺1/3）…… 53
第 57 図　溝1土層断面図（縮尺1/30）…… 53
第 58 図　溝1出土土器実測図（縮尺1/3）…… 54
第 59 図　溝1出土土器実測図（縮尺1/3）…… 55
第 60 図　溝1出土土製品実測図（縮尺1/2）…… 56
第 61 図　溝1出土石器実測図（縮尺1/3）…… 56
第 62 図　溝2出土土器・瓦実測図（縮尺1/3）…… 57
第 63 図　溝2出土石器実測図（縮尺1/3）…… 58
第 64 図　1号・2号・3号井戸状遺構（縮尺1/60）…… 59
第 65 図　谷部包含層出土土器実測図（縮尺1/3）…… 61
第 66 図　谷部包含層出土土器実測図（縮尺1/3）…… 62
第 67 図　谷部包含層出土土器実測図（縮尺1/3）…… 63
第 68 図　谷部包含層出土土器実測図（縮尺1/3）…… 64
第 69 図　谷部包含層出土石器実測図（縮尺1/3）…… 65

表 目 次

第 1 表　今宿バイパス埋蔵文化財発掘調査の実績及び予定一覧
第 2 表　今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書一覧

I 序　章

1　はじめに

建設省九州地方建設局から福岡県教育委員会が委託を受けた一般国道202号線今宿バイパス関係の埋蔵文化財の発掘調査の進行状況は第1表に示すとおりである。これらの発掘調査の成果は現在まで「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書」として第1集～第8集が刊行されている（第2表）。

本年度は第9集・第10集を刊行するが，本書（第10集）で報告を行うのは第19地点，福岡市西区大字今宿所在「高田遺跡」の調査記録である。

2　調査の経過

高田遺跡は第5集で即に報告してあるように1973年度に路線確定のための試掘調査が行われ溝等の遺構が確認され，調査予定地として追加された地点である。

当初この遺跡の発掘調査は，1981年度の事業として，建設省九州地方建設局から福岡県教育委員会が委託を受けていた。ところが，発掘調査予定地の大部分には苗木が植栽され，その撤去の期限が1982年3月31日までとなっており，調査の期限と完全に重複し，1981年度の調査は不可能であった。このため建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所と協議を重ね，発掘調査は1982年度に持ち送ることとなった。

発掘調査は1982年4月26日～6月17日の間に行った。調査は予定していた高田地区の他に，福岡市教育委員会文化課からの要請もあって，第2図に示したとおり，青木地区にもトレンチを設けて試掘を行った。一見して好条件の低台地ではあったが，既に削平を受けたものと思われ，遺構は検出されなかった。

調査関係者は下記のとおりである。

総　括	福岡県教育委員会	教育長	友野　隆
	管理部文化課	課　長	藤井　功
庶務会計	〃	主任主事	三瓶　寧夫

第 1 表　今宿バイパス埋蔵文化財発掘調査の実績及び予定一覧

地点番号	遺跡名	所在地	調査所要区間							
			長さ	幅	面積	44年度	45年度	46年度	47年度	
1	遺物散布地	福岡市西区大字拾六町	34m	28m	520m²	45				
2	〃	〃	52	50	2,600	63				
3	湯納遺跡	〃	280	40	11,200	168		1,200	4,612	
3	〃	〃	30	20	600					
4	宮の前遺跡	〃	110	40	4,400	400				
5	高崎1・2号墳	〃	36	15	540	160				
6	大又遺跡	〃	57	20	1,140	300		900		
6	高崎3・4・5号墳	〃	40	15	600	200		249		
7	須恵器散布地	〃	55	20	1,100	27				
8	弥生散布地	〃	33	39	1,287					
9	若八幡古墳	福岡市西区徳永	50	40	2,000		1,100			
10	馬場遺跡	福岡市西区飯氏	70	70	4,900		290			
11	鏡原遺跡	〃	70	50	3,500		550			
12	条里遺跡	福岡市西区大字飯氏～糸島郡前原町篠原	3,000	40	120,000			136		
13	古野遺跡	糸島郡前原町大字有田・篠原	150	40	6,000			482		
14	上鑵子遺跡	糸島郡前原町大字有田	70	30	2,100			304	630	
15	遺物散布地	〃	300	30	9,000					
16	古墳2基	糸島郡前原町	30	30	900					
17	遺物散布地	〃	100	30	3,000					
18	〃	〃	40	30	1,200					
19	今宿高田遺跡	福岡市西区大字今宿字高田	50	40	2,000					
19′	今宿大塚南遺跡	福岡市西区大字今宿	100	40	4,000					
20	今宿小塚遺跡	福岡市西区大字今宿女原	30	40	1,200					
21	遺物散布地	糸島郡前原町	250	20	5,000					
22	〃	〃	50	40	2,000					
23	〃	〃	100	20	2,000					
24	〃	〃	230	20	4,600					
25	〃	〃	150	20	3,000					
26	〃	〃	200	20	4,000					
27	太田遺跡	糸島郡前原町東	300	30	9,000					
28	石崎曲り田遺跡	糸島郡二丈町大字石崎字曲り田	200	30	6,000					
29	遺物散布地	糸島郡二丈町大字上深江	100	40	4,000					
30	〃	糸島郡二丈町大字深江	100	40	4,000					
31	〃	〃	100	30	3,000					
(32)	鎮懐石八幡宮裏古墳	〃								
(33)		糸島郡二丈町大入								
(34)	赤岸遺跡	〃								

既調査面積								残調査予定面積	備考
	48年度	53年度	54年度	55年度	56年度	57年度	58年度	計		
								45㎡	0㎡	調査不要
								63	0	〃
								5,980	0	発掘調査終了・報告書既刊
	450							450	0	〃
								400	0	報告書既刊
								160	0	発掘調査終了・報告書既刊
								1,200	0	〃
								449	0	〃
								27	0	調査不要
								0	0	消　滅
								1,100	0	保存確定・報告書既刊
								290	2,000	一部調査終了・報告書既刊
								550	2,000	〃
		3,360						3,496	0	調査終了・報告書既刊
								482	0	〃
								934	0	〃
									4,500	
									0	路線変更のため調査不要
									0	〃
									1,000	旧追１
						2,000		2,000	0	旧追２・今回報告
	650							650	0	旧追２・調査終了・報告書既刊
	500							500	0	旧追３　〃
									1,000	
									400	
									400	
									900	
									600	
									800	
							2,700	2,700	0	58年度調査・59年度報告予定
				2,000				2,000	0	調査終了・57年度一部報告 今回一部報告
				100				100	0	遺構なし
			3,000					3,000	0	調査終了・56年度報告
									0	調査不要
			100					100	0	調査終了・56年度報告 （二丈浜玉道路）
			30					30	0	調査終了・遺構なし （二丈浜玉道路）
			224					350	0	56年度報告（二丈浜玉道路）

調査担当　　文化課主任技師　橋口　達也

〃　　佐々木隆彦

なお，地元谷地区の皆さまには多大の御協力をたまわり，調査が順調に進行した。深い感謝の念を表したい。

第 2 表　　今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書一覧

番　号	副　　題	収録した遺跡	報　告　者	備　　考
第１集	福岡市大字拾六町所在の遺跡群	湯　納　遺　跡 宮の前遺跡・E地点 高　崎　古　墳　群 大　又　遺　跡	浜　田　信　也 酒　井　仁　夫 浜　田 副　島　邦　弘	1969年調査 1970年報告
第２集	福岡市大字徳永・飯氏所在の遺跡	若　八　幡　古　墳 飯氏馬場遺跡 飯氏鏡原遺跡	柳　田　康　雄 ・浜田・副島 永　井　昌　文 柳田・副島・浜田	1970・71年調査 1971年報告
第３集	福岡市西区大字拾六町所在の遺跡	高　崎　古　墳　群 大　又　遺　跡	栗　原　和　彦 上　野　精　志	1971年調査 1973年報告
第４集	福岡市西区大字拾六町所在 湯納遺跡の調査	湯　納　遺　跡	青　峰　重　範 松　本　　昇 林　　弘　也 山　本　輝　雄 栗　原・上　野 馬　田　弘　稔	1971・72年調査 1976年報告
第５集	福岡市西区・糸島郡前原町所在 遺跡の調査	湯　納　遺　跡 今宿大塚南遺跡 今宿高田遺跡 今宿小塚遺跡 糸島平野条里及び 古　野　遺　跡 上　鑼　子　遺　跡	沢　村　　仁 松　本　・　林 細　川　隆　英 粉　川　昭　平 弓　場　紀　知 栗　原・柳　田 上　野・馬　田	1971・72・73年調査 1977年報告
第６集	糸島郡前原町大字波多江所在 「波多江遺跡」の調査	波　多　江　遺　跡	松　本　・　林 大　澤　正　己 丸　山　雍　成 橋　口　達　也 高　橋　　章 馬　田	1978年調査 1982年報告
第７集	糸島部二丈町深江・大入地区所在 遺跡の調査	塚　田　遺　跡 鎮懐石八幡宮裏古墳 赤　岸　遺　跡	大澤・橋口・中間 橋　口　達　也 中　間　研　志	1979年調査 1982年報告
第８集	石崎・曲り田遺跡Ⅰ	曲　り　田　遺　跡	橋　口　達　也 中　間　研　志 上原周三・長哲二	1980・81年調査 1983年報告
第９集	石崎・曲り田遺跡Ⅱ	曲　り　田　遺　跡	船　越　公　威 佐々木稔・大澤正己 東村武信・葉科哲男 橋口達也・中間研志	1980・81年調査 1984年報告
第10集	今宿高田遺跡	今宿高田遺跡	大　澤　正　己 橋　口　達　也 佐々木　隆　彦	1982年調査 1984年報告

1.高田遺跡　2.今山遺跡　3.今宿遺跡　4.下山門遺跡　5.宮の前遺跡
6.湯納遺跡　7.野方遺跡　8.鋤崎古墳　9.木村５号墳　10．谷上古墳
11．今宿大塚古墳　12．小松原１号墳　13．山ノ鼻１号墳
14．若八幡宮古墳　15．山ノ鼻２号墳　16．下谷古墳　17．丸隈山古墳　18．高祖古墳

第１図　高田遺跡と周辺の主要遺跡分布図（1/50,000）

3　位置と環境

高田遺跡は国指定史跡今宿古墳の南南東約150ｍの台地の縁辺に位置する。第１図に示すように，この地域は前方後円墳が集中し，伊都の東の玄関口にふさわしい。弥生時代には石斧の大量生産の地として著名な今山遺跡が北方約２㎞の地点に存在し，青木地区からこの付近にかけて，石斧生産の専業集団の後背地として想定する考え方もあるが，現在までの状況では弥生時代後期以後の遺構・遺物が主に知られており，今後検討を要する課題であろう。

古墳時代になると，若八幡宮古墳，丸隈山古墳，鋤崎古墳，今宿大塚古墳等著名な前方後円墳が前期～後期にいたる全期間にわたって営まれている。これらの古墳が，青木から周船寺の間の小地域に立脚したものとは考えられない。これらの古墳は，糸島の東側の交通の要衝に位置し，三雲周辺の中心地の古墳群，深江周辺の西側の古墳群と対比し，糸島地方全域での問題として把握されるべきものである。

歴史時代になると，この地域の山麓部には製鉄遺跡も数多く知られ，当「高田遺跡」の周辺にも通称「カナクソ田」と呼ばれる地点がありこの部分からは奈良時代の鍛治関連の溝が検出され多くのカナクソが出土した。今宿横浜から生の松原にかけての良質の砂鉄の入手が容易であったことが大きい原因であることは疑い得ない。

II　発掘調査の記録

1　調査の概要

当該地は昭和48年度の１月末から２月中旬にかけて予備調査を実施し，柱穴数個と断面逆台形状の弥生時代終末から古墳時代初頭頃にかけての溝状遺構を確認した所である。

遺跡は南側に位置する高祖山から派生する舌状丘陵の東側裾部に営まれており，丘陵上面は無論のこと斜面においても後世の田畑の耕作で段状に削平されており，遺構の遺存状況は不良であることが推測された。しかし，溝状遺構の検出から，同時期に比定される竪穴住居跡群の存在が想定できた。

本調査は先ず重機による表土剝ぎから実施したが，廻りの田畑を考慮し道路の幅員よりも狭

第2図　高田遺跡位置図（1/10,000）

第3図　高田遺跡付近地形図（1/2,000）

第 4 図　高田遺跡遺構配置図（1/200）

い調査範囲となった。調査対象地区の北側は大きく抉れて谷が入り込み，弥生時代～奈良時代の厚い包含層を形成していた。このため谷の一部を調査対象に入れ，他の谷部は対象外として調査を遂行した。調査途中で遺跡の400～500m東側の路線内に低台地が在り，対象外となっていた所に試掘溝を設定して確認調査も並行して実施したが，遺構が遺存しないことが明らかとなった。

発掘区内では緩斜をなす丘陵面に数十軒の竪穴住居跡，予備調査時のトレンチで確認されていた溝状遺構を検出したが，調査区北側での竪穴住居跡と溝状遺構との重複関係は著しく，しかもマンガン粒を含む包含層が覆っていたため，遺構の検出には困難を極め，調査時に新旧関係を誤認したことは否めない。このため，図示した共伴資料内に時期差のある土器も含まれていることを了承して頂きたい。また調査区の南西隅での重複関係も著しく，不明瞭な点も多々あることも合せて承知置き願いたい。

確認した遺構の内訳は竪穴住居跡30軒，土壙6基，溝状遺構2条，井戸状遺構3基，その他ピット群である。竪穴住居跡の時期は弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけてと，古墳時代後期及び奈良時代後半頃の所産であり，かなり間欠的に生活の場となっていたことが判る。土壙は2号・3号の他からは土器の出土が皆無で明確な時期設定は難しく，2号は古墳時代前期，3号は奈良時代に比定される。2条の溝状遺構は弥生時代終末から古墳時代初頭頃のものと奈良時代後半に掘削されたもので，両者とも谷方向に延びており，谷部への排水溝の機能を果していた。

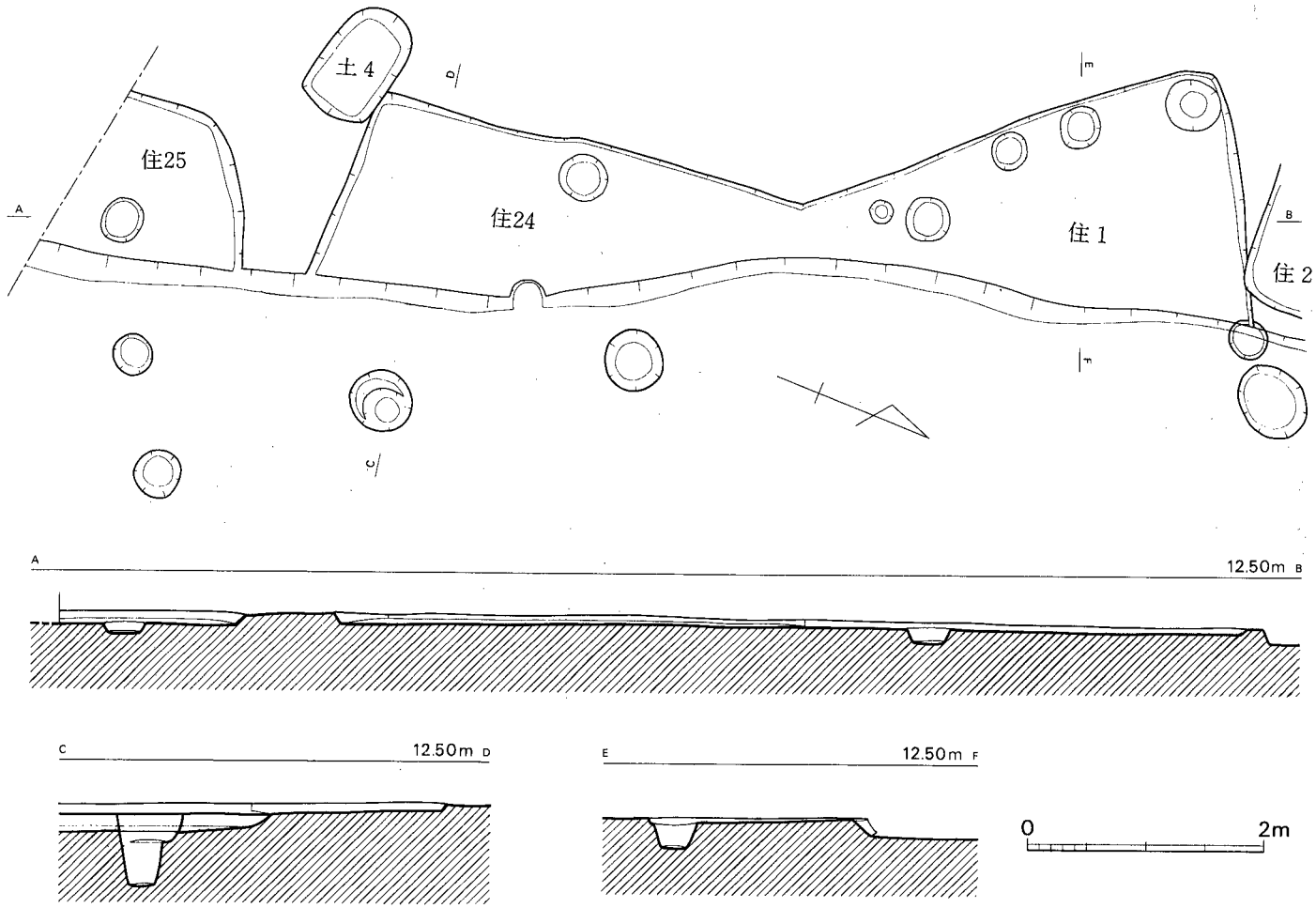
2　遺構と遺物

(1)　竪穴住居跡

1号竪穴住居跡　(第5図)

発掘区の西南側で検出した住居跡で，2号・24号竪穴住居跡と重複関係にある。2号住居からは僅かに切られているが，24号との新旧関係は検出時点では明らかにできず，出土遺物も皆無に近く土器からも判断できない。住居の½強が後世の削平で破壊され，平面形態，規模等の全容は不明である。現存での壁高は5cm未満で遺存状態は良くない。

出土遺物は手捏ね土器が1点ある。出土土器では住居の時期は判断し兼るが，弥生時代終末から古墳時代初頭頃であろう。

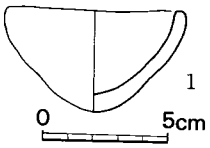


第5図　1号・24号・25号竪穴住居跡実測図（1/60）

出土遺物

土　　器（第６図）

１の手捏ね土器が１点出土している。復原実測でやや厚手の器壁を持ち，尖り気味の底部をなす。焼成は頗る堅固で赤褐色を呈す。



第６図　１号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

２号竪穴住居跡（図版４－(1)・(2)，第７図）

１号竪穴住居跡に隣接して検出した住居跡で一部分１号住居を切っている。平面形態は方形を呈し，北壁の一部が電柱の掘削で撹乱され東壁は削平されている。規模は南壁5.0m，北壁の現存は4.4m，西壁4.5mを測り，壁高は10cm未満で浅い。床面積は23m²である。床面上では14個の柱穴を検出したが，主柱は4本柱で45～50cmと深く掘られている。柱間は南北間2.10・2.15m，東西間2.30・2.50mを測り壁長に比例する。南東隅には楕円形の浅い掘り込みがあり，長軸1.60m，短軸50cm，深さ６cmを測る。

北壁の中央部には「U」字状の竈を付設している。竈は灰黄掲色の粘土を使用し，竈内には甑の破片が散在していた。主軸方位は柱間軸でN３°Eを示す。

出土遺物は土師質の甕・甑，須恵質の碗片がある。出土土器から住居の時期は６世紀中頃であろう。

なお，予備調査時に須恵器の坏蓋と坏身が出土しており，当該住居跡に伴う可能性が高い。

出土遺物

土　　器（第８図）

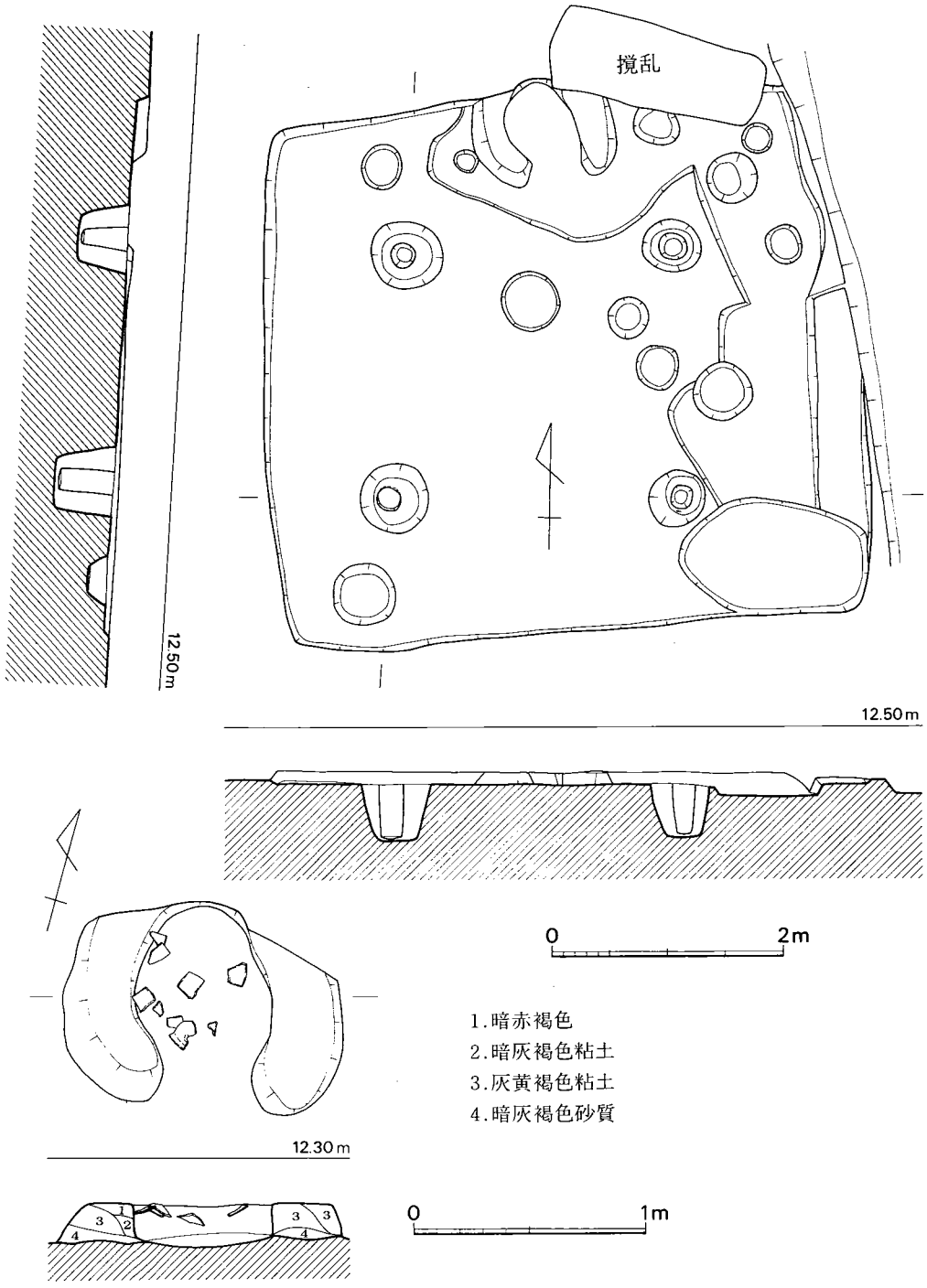
２は厚手の甕で，口縁部は僅かに外反する。調整は横ナデと荒いヘラ削りで仕上げる。胎土には砂粒が少なく，焼成は堅固で強い二次加熱を受けている。

３は器壁の厚い甑で竈内から出土した。口縁部は鈍く外反し，底部に従って細まる。外面には細い縦ハケを施し，内側はヘラ削り仕上げでつくりは良質である。胎土には金雲母を含み，焼成は頗る堅固である。茶褐色を呈する。

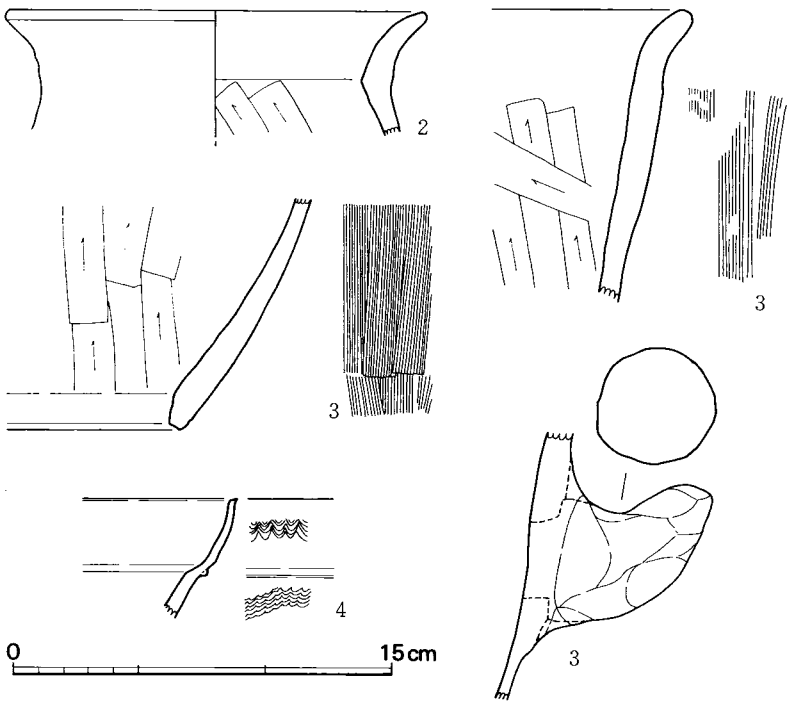
４は甕の小破片で口縁部と頸部に粗い波状文を施す。胎土は精選され，頗る焼成は良い。暗灰褐色を呈す。

３号竪穴住居跡（図版２－(2)，第９図）

４号・５号住居跡，溝１と重複関係にある竪穴住居跡で４号住居と溝１に切られ，５号住居



第7図　2号竪穴住居跡，竈実測図（1/60・1/30）



第8図　2号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

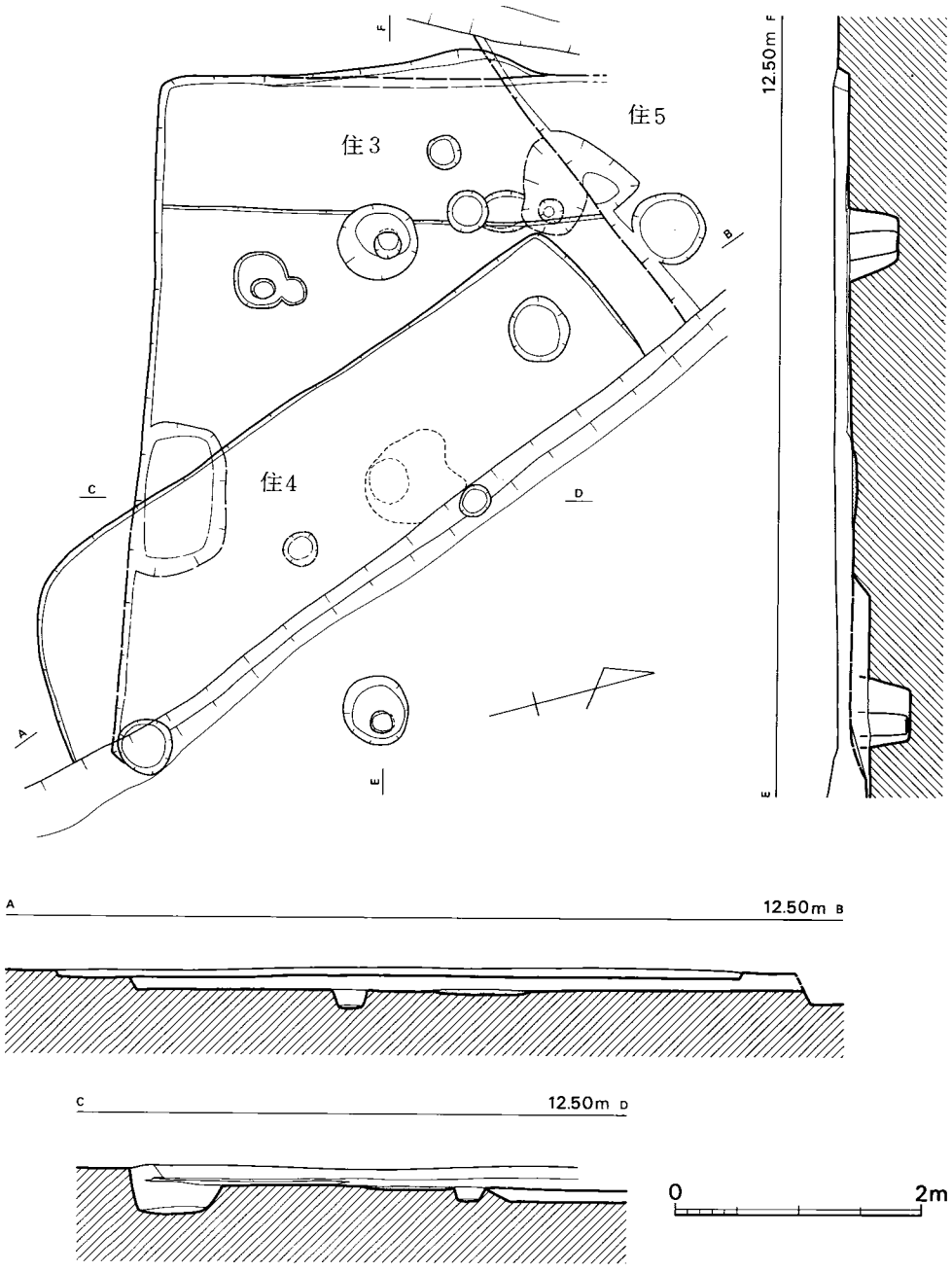
を切っている。平面形態は長方形と思われるが，東壁は後世の田畑の耕作で削平され柱穴のみ遺存する。規模は明らかでないが，現存の壁高は10cm強である。主柱は2本で柱間は3.90mを測る。南壁中央部には長軸1.25m，短軸73cm，深さ19cmの楕円形の屋内土壙を掘っている。主柱間の中央部には浅い掘り込みがあり，炭化粒子が薄く堆積しており，炉の役割を果していた。西壁側には壁高3cmのベット状遺構を削り出している。主軸方位はN75°Wを示す。

出土遺物は甕・高坏の他，滑石製紡錘車，玄武岩製の砥石が各1点あるが，紡錘車は表土剝ぎの時点で出土しており，4号住に伴う可能性を秘めている。出土土器から住居の時期は弥生時代終末から古墳時代初頭頃比定できよう。

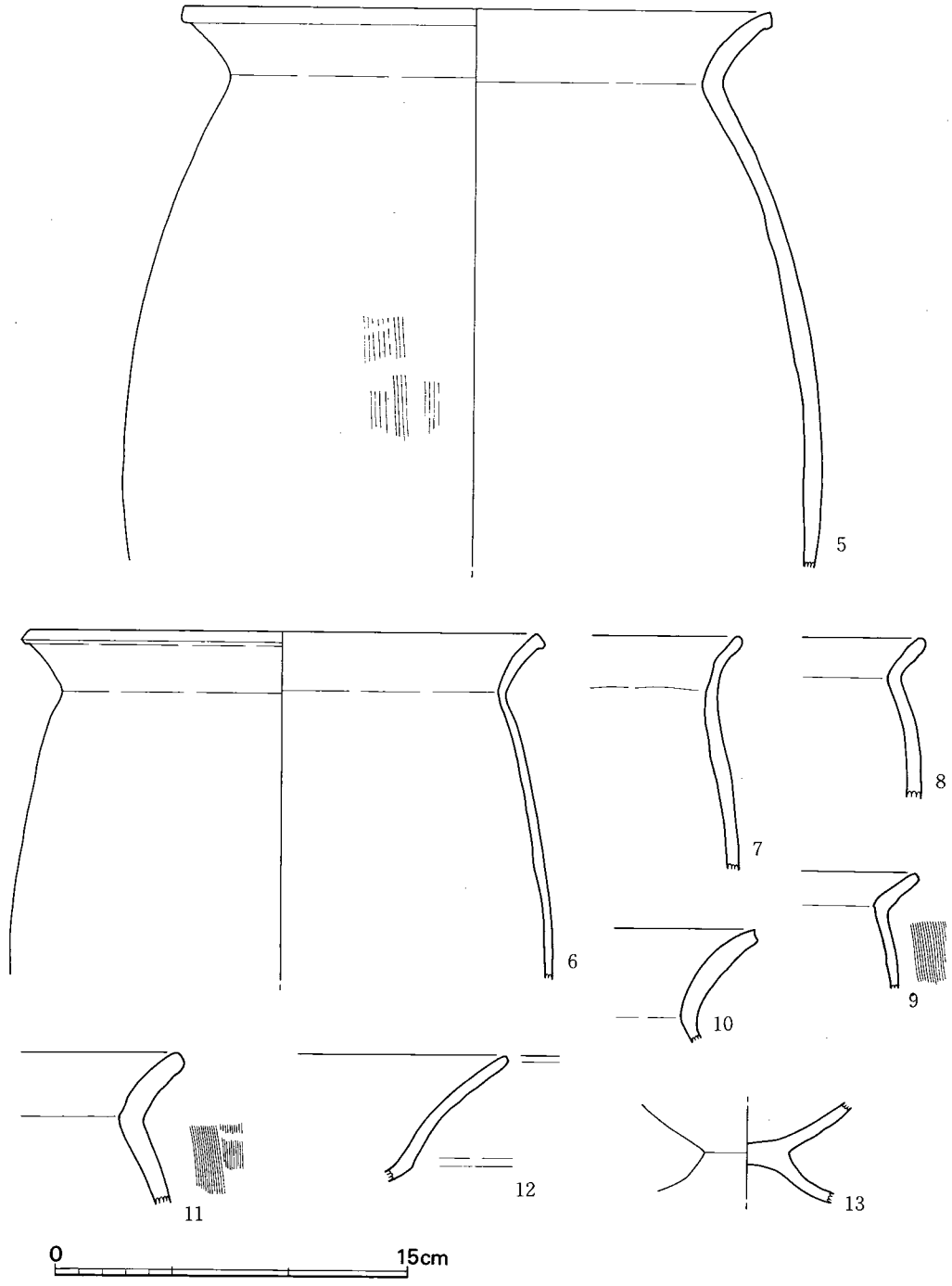
出土遺物

土　器（図版8，10図）

甕形土器には5～11がある。口縁部は「く」字状に外反する5・6・8・9・11と鈍く外反する7・10がある。5と6は口唇部を外に肥厚させる。器壁は総体的に薄く仕上げ，11のみ



第9図　3号・4号竪穴住居跡実測図（1/60）



第10図　3号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

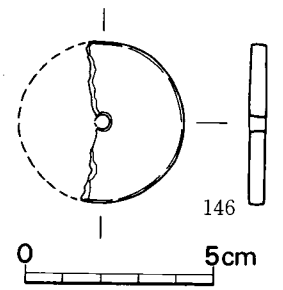
厚手づくりである。調整は全て外面がハケ，内面はナデで仕上げる。

12・13は高坏の小片で深みの坏部を有す。口縁部は緩く外反し，屈折部は明瞭である。胎土は非常に緻密で焼成も堅固である。13は脚部が大きく開きしかも低い高坏でつくりの良好なものである。

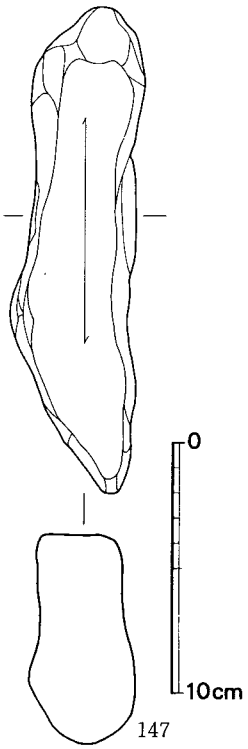
石　器（第11図）

146は滑石製の平板状の紡錘車で約1/2を欠失する。つくりは良好で，径4.3cm，穿孔径3.5mm，厚さ4.5mmを測る。片面には煤の付着が著しい。

147は今山産の玄武岩製の砥石で，全長19.3cmを測る。砥ぎ面は一面のみである。



第11図　3号竪穴住居跡出土石器実測図（1/2）



第12図　3号竪穴住居跡出土石器実測図（1/3）

4号竪穴住居跡（図版2－(2)，第9図）

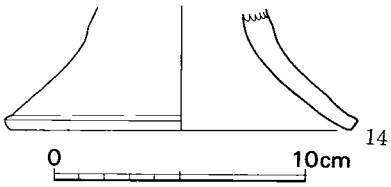
3号竪穴住居跡と大きく重複し，2/3が田畑の耕作で削平されている。平面形態，規模とも不明であるが，西壁辺は5.0m，壁高7cmを測る。その他の施設は不明である。

出土遺物は皆無に近く，高坏か器台の脚部と考えられる土器片が1点あるが，形状から3号竪穴住居跡に伴う可能性があることを付言しておく。住居の時期は3号住居を切っており，古墳時代に比定され2号住と同一時期も考えられる。

出土遺物

土　器（第13図）

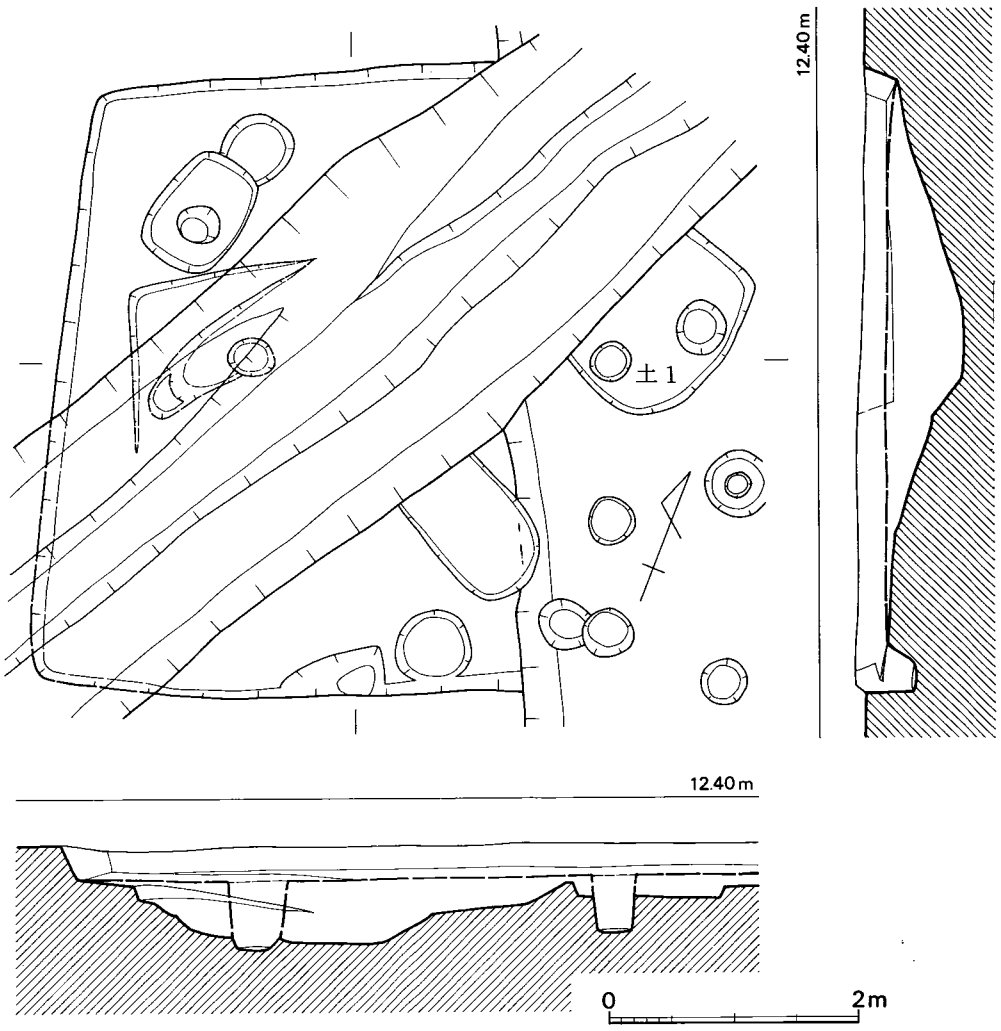
高坏か器台の14がある。裾部の開きは鈍く，脚端部を肥厚させる。調整は風化著しく不明。胎土は緻密で焼成は頗る堅固である。色調は淡赤褐色を呈す。



第13図　4号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

5号竪穴住居跡（図版2－(1)，第14図）

3号竪穴住居跡と溝1に切られた状態で検出した。溝1に切られ住居の全容は殆んど不明であるが，平面形態は方形であろう。規模も明らかでないが，西壁は4.7m前後であろう。壁高



第14図　5号竪穴住居跡実測図（1/60）

は16cmを測る。

住居内の覆土からの出土遺物は壺・高坏の他，砥石3点がある。出土遺物から住居の時期は弥生時代後期後半であろう。

出土遺物

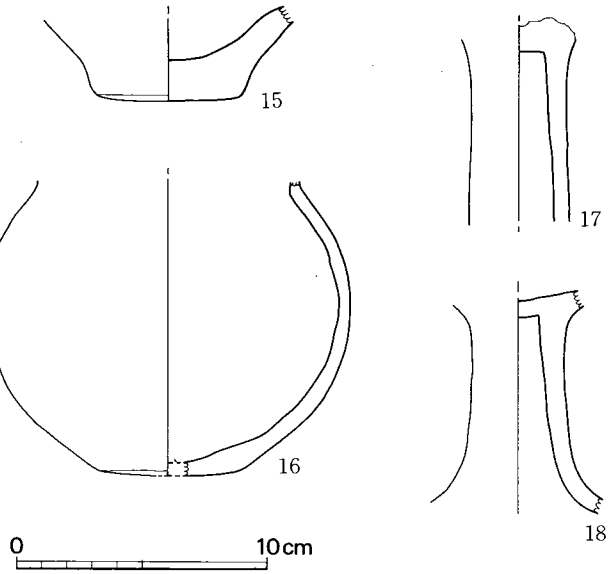
土　器（図版8，第15図）

壺には15・16がある。15は細みで器壁の厚い底部である。焼成は頗る堅固で赤褐色の色調をなす。16は頸部以上を欠く。張りのある胴部に僅かにレンズ状をなす底部を有す。調整は風化著しく不明。胎土は砂粒多く不良で焼成は堅固。淡茶褐色を呈す。

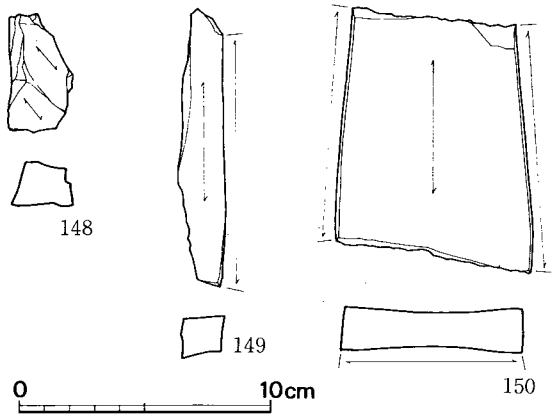
17・18は高坏の脚部で17が長い。調整は両者とも不明。18は二次加熱を受けている。

石　器（図版8，第16図）

砥石3点が出土している。いずれも硬質砂岩で全て破片乃至一部を欠損している。149の現存長11cm，150は9.8cmを測る。現存での砥ぎ面は148・149が2面，150は4面である。148・149は仕上げ砥石，150は中砥石である。いずれも覆土中からの出土である。



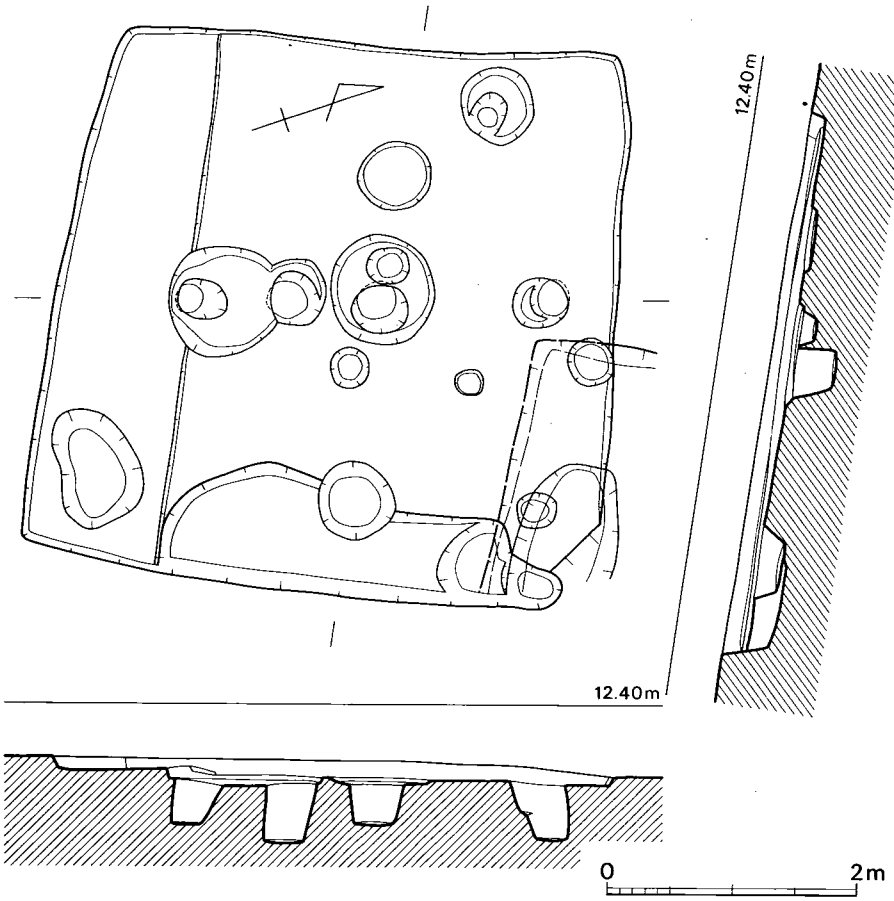
第15図　5号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



第16図　5号竪穴住居跡出土石器実測図（1/3）

6号竪穴住居跡（図版5－(1)，第17図）

5号竪穴住居跡に隣接して掘られた住居跡で14号竪穴住居跡を切った状態で検出した。平面形態は方形を呈し，規模は南北壁4.15・4.40m，東西壁4.55・4.00m，壁高10cm強を測る。床面積は18.2m²である。主柱は2本であるが，南側の主柱は建て直しを計っている。柱間は2.10・2.90mである。南壁沿いには高さ4cmの削り出しベットを設け，その南東隅には不整楕円形の長軸1.00m，短軸60cm，深さ24cm前後を測る土壙が掘られ，屋内貯蔵穴は一般的にベットの隅



第17図　6号竪穴住居跡実測図（1/60）

に掘られる例が多く，当該土壙も同様の機能が与えられよう。柱間の中央部には径90cmの掘り込みがあり，その中に深さ30cmと10cmのピットがあり，浅い掘り込みの時点で炉跡として使用されたことも考慮されるが，灰及び炭化物等の検出は認められない。主軸方位は2本柱の中軸を採用するとN19°Eを示す。

出土遺物は壺・鉢がある。出土土器から住居跡の時期は弥生時代後期後半頃である。

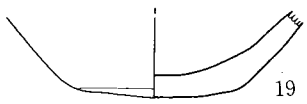
出土遺物

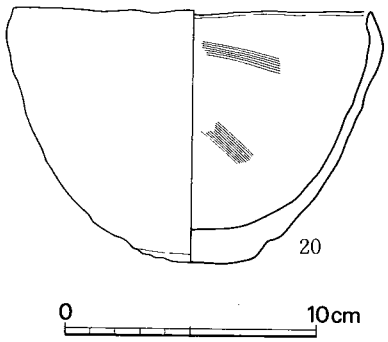
土　器（図版8，第18図）

壺は19がある。底部はレンズ状の平底をなし，内外面とも二次加熱を受ける。胎土には砂粒が多いが，焼成は頗る堅固である。

鉢は20がある。つくりの粗い鉢で口縁部が内弯し，底部は19と同様な形状を持つ。調整は荒

いナデで仕上げる。焼成は頗る堅固で赤褐色を呈す。非常に強い二次加熱を受け，煮炊きに使用された器であろう。



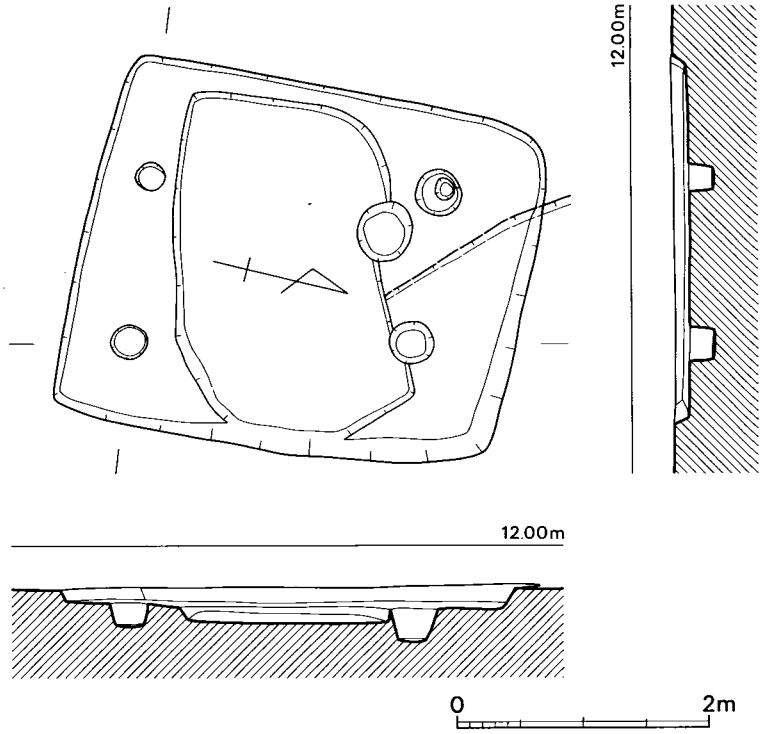


第18図　6号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

7号竪穴住居跡（図版2－(1)，第19図）

13号竪穴住居跡を切った状態で検出した小形の住居跡で，平面形態が方形をなす。規模は南北壁2.85・2.50m，東西壁3.50・3.30m，壁高10cm前後を測る。床面積は9.0m²である。主柱は4本である。柱間は南北間2.35・2.25m，東西間1.25・1.30mを測る。床面下には不整形の掘り込みがあるが，住居の掘削時に掘られ，その部分に貼床を施していたことが考慮される。出土土器から竈の付設が考えられるが，調査時には確認できなかった。

出土遺物は甕片が2点ある。出土土器から住居の時期は古墳時代終末から奈良時代に比定できる。



第19図　7号竪穴住居跡実測図（1/60）

出土遺物

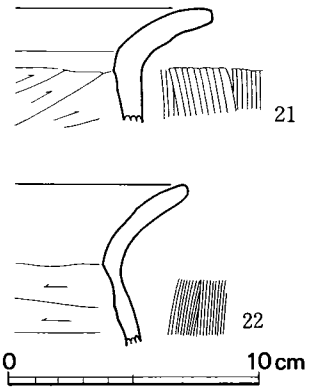
土　　器（第20図）

甕は大きく外反する口縁部を有し，厚手づくりの21と薄手づくりで「く」字状に外反する口縁部を持つ22とがある。調整はいずれも荒いハケとヘラ削りで仕上げる。21は口縁内

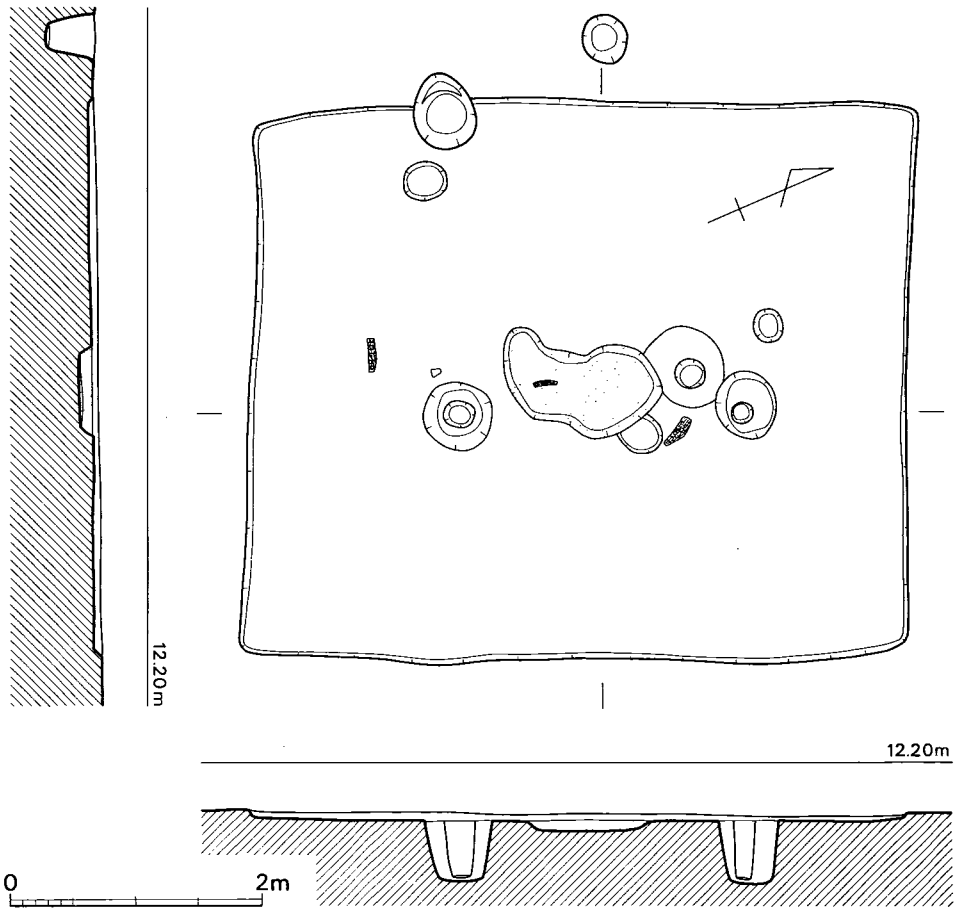
外面に赤色の化粧土を塗布する。

8号竪穴住居跡（図版5－(2)，第21図）

同形プランを有す9号竪穴住居跡に隣接して掘られた住居跡で，長方形に近い形態をなす。住居の規模は南北壁4.20・4.30m，東西壁5.35・5.30m，壁高10cm未満で遺存状態は良くない。床面積は22.5m²である。主柱は2本で45cmと深い。柱間は2.30mを測る。屋内土壙，周溝等の施設はない。主柱間の中央には不整形の浅い掘り込みがあり，炭化材と灰が充満していたが，焼痕は認められない。焼痕



第20図　7号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



第21図　8号竪穴住居跡実測図（1/60）

が残らないことは地山が砂質と関係があるとも考えられる。床面上には少量の炭化材が出土したが，焼失住居の確証はない。主軸方位は柱軸でN23°Eを示す。

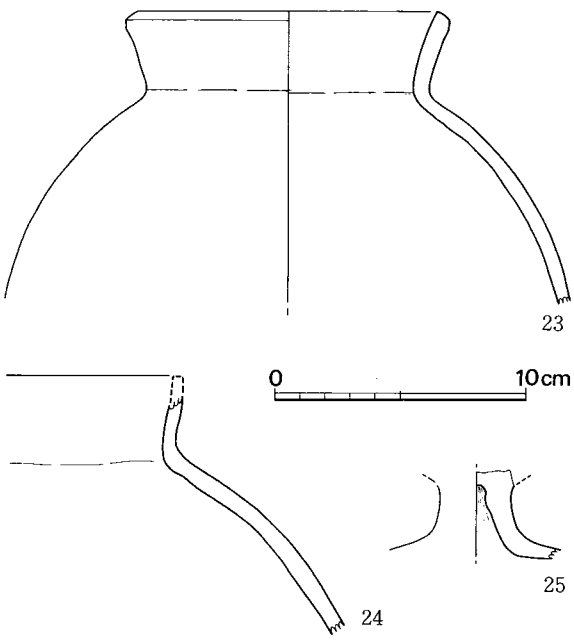
出土遺物は壺と高坏がある。出土土器から住居の時期は弥生後期後半から終末頃と考えられる。

出土遺物

土　　器（図版8，第22図）

壺は口縁部が僅かに外反する23，直に近い24があり，両者とも肩から胴部にかけての張りは鋭い。調整は不明で23が赤黄褐色，24が淡黄白色を呈しやや白っぽい。

25の高坏は短い脚部に鋭く開く裾部をなす。器壁は厚く，ナデで仕上げる。胎土は非常に密で焼成も頗る堅固である。淡赤褐色を呈す。

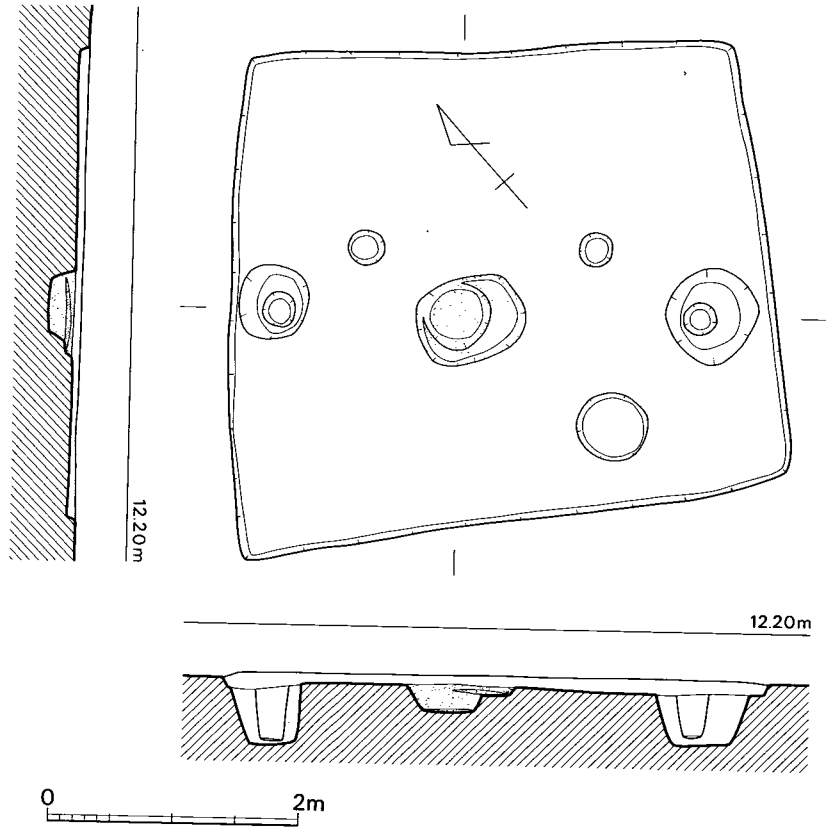


第22図　8号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

9号竪穴住居跡（図版6－(1)　第23図）

8号の東側にあり，10号と22号住居に隣接して検出した長方形に近いプランを有す竪穴住居跡で他との重複はない。住居の規模は南北壁で4.45・3.85m，東西壁3.45・4.00mを測りやや歪である。壁高は10cm未満で残りは良くない。床面積は15.3㎡である。主柱は2本であるが，他の2本柱と比較して壁沿いに掘られている。さらに，主柱の北寄りに棟の副次柱と考えられる柱穴を2個検出した。主柱間には円形の二段掘りの炉跡があり，焼痕は認められないが灰と炭化物で埋まっていた。主軸方位はN48°Wを示す。

出土遺物は小片の土器が僅かにあるが，図示不可能である。出土土器片は弥生時代後期後半以降であろう。

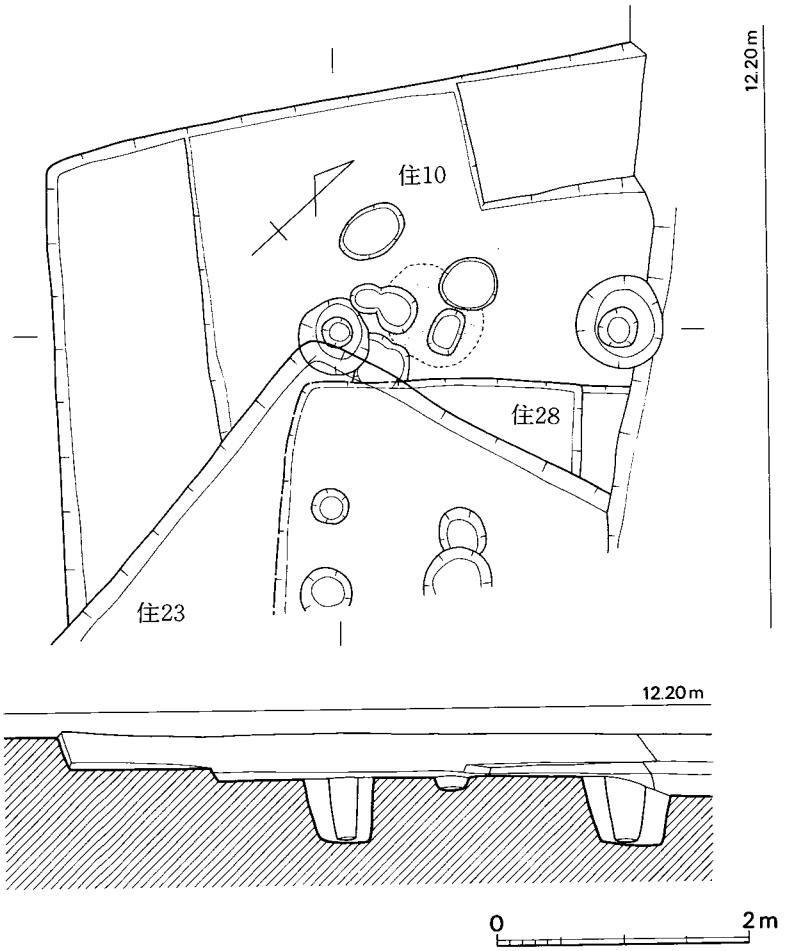


第23図　9号竪穴住居跡実測図（1/60）

10号竪穴住居跡（図版3－(1)，第24図）

23号・28号竪穴住居跡に切られ，北壁を田畑の耕作により著しく削平されている。平面形態は主柱穴の位置から推測して長方形であろう。規模，床面積は不明である。壁高は30cmを測り，残りは良好である。主柱は2本で堅固な柱穴を持つ。深さは50cmを測る。主柱間は2.25mである。南側の主柱寄りには径80cmの範囲内に炭化物が散在しており，火の使用痕が窺われる。南・西壁側には幅1.10m・90cm，高さ10cm強の削り出しベットが設けられており，北壁にも遺存した可能性があり，「コ」字状のベット状施設をなしていたのであろう。主軸方位はN42°Eを示す。

出土遺物は図示した坏の他，甕の小破片がある。27は重複関係にある23号乃至28号住居跡に伴うことも考えられる。26の出土土器から住居の時期は8号と同時期の弥生時代後期後半頃であろう。

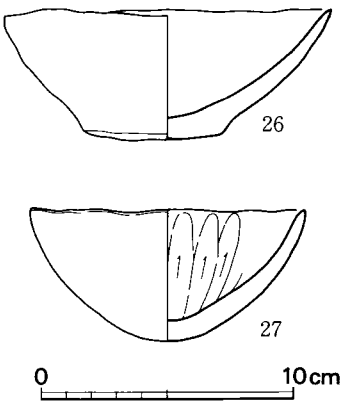


第24図　10号竪穴住居跡実測図（1/60）

出土遺物

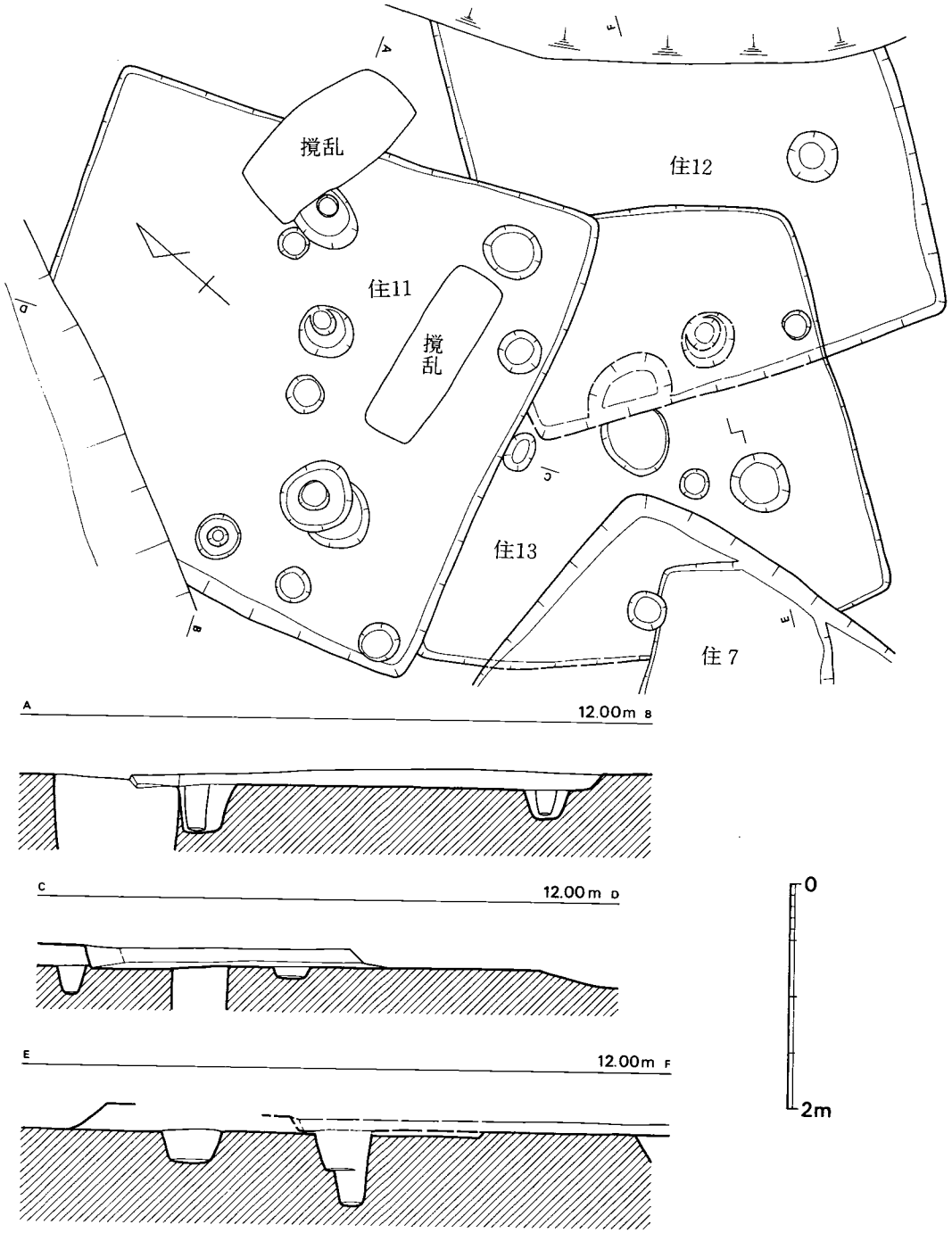
土　　器（第25図）

坏が2点あるが27は上記のように古式土師器の範疇に入ると思われる。26は尖り気味の口唇部にやや丸みの胴部を持ち，僅かにレンズ状の平底をなす。胎土は精製され頗る堅固な焼成である。27は尖り気味の底部をなし，内面は指頭ナデで仕上げる。



第25図　10号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

11号竪穴住居跡（図版２－(1)，第26図）



第26図　11号・12号・13号竪穴住居跡実測図（1/60）

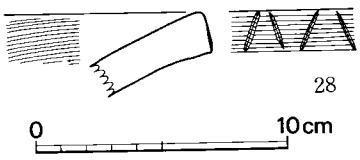
12号・13号竪穴住居跡並びに溝１と重複関係にあり，12・13号を切り溝１に切られている。さらに，２個所で電柱により撹乱を受け，北壁側はマンガン粒を含む黒褐色の包含層から掘り込み，プランの検出に困難を極め明らかにできなかった。平面形態は方形であろう。規模は南壁のみ計測可能で4.45m，壁高10cm前後を測る。主柱は２本で東西の壁際に寄っている。深さは40・20cmである。主軸方位はN67°Eを示す。

出土遺物は少なく，小片の土器を若干検出したが，図示可能な土器は大型の甕形土器が１点ある。甕の小破片のみで住居の時期を判断するには資料不足であるが，13号住居跡から出土した土器と遺構の新旧関係とを考慮すれば，当該住居跡は13号の古式土師よりも新しい時期に比定される。溝１との関係は溝１と13号住居跡出土の土器を比較すると明らかに13号住が新しいことから，11号住居が溝より新しくなる。

出土遺物

土　　器（第27図）

28は大型甕の口縁部で口唇部には板の小口による刺突文が「ハ」字状に配され，調整はハケとナデで仕上げている。



第27図　11号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

12号竪穴住居跡（図版２－(1)，第26図）

11号・13号に切られた竪穴住居跡で北東壁側は田畑の耕作で削平を受けている。平面形態，規模，床面積は不明である。柱穴は２本の主柱が考えられ，南壁側にその１本が掘られている。深さは60cmを測る。詳細の点については全く明らかでない。

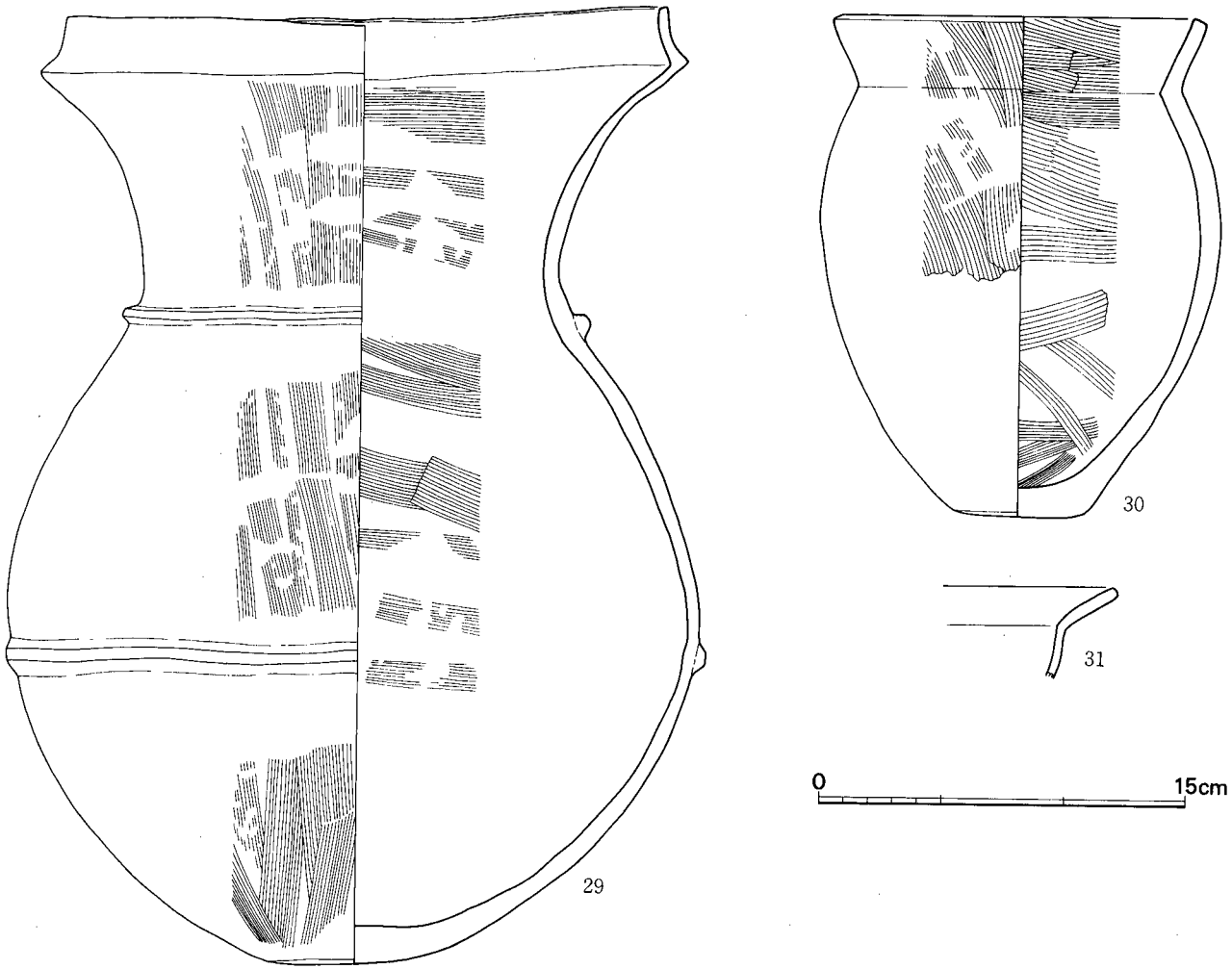
出土遺物は壺・甕・鉢がある。出土土器から住居は弥生時代終末に近い時期である。

出土遺物

土　器（図版８，第28図）

壺には29がある。反り気味に内弯する口縁部に頸部から擬口縁にかけて大きく外反する。頸部には，断面台形状の凸帯を付す。胴部は球形をなし，下半には退化した低い台形の凸帯を廻らす。底部は丸底に近い平底を呈す。内外面とも荒いハケで仕上げ，口縁部は横ナデを施す。胴下半部には弱い二次加熱を受ける。

甕は30の完形器が１点ある。「く」字状に外反する口縁部でやや張り気味の胴部上半に最大径



第28図　12号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

を有す。底部はレンズ状の平底を呈す。底部は壺の底部に比較して古い様相が窺われる。器内外面とも荒いハケで仕上げ，胴下半は荒いカキトリ状のナデを施す。

31は口縁部が大きく外反する鉢であるが小片のため詳細は明らかでない。

13号竪穴住居跡（図版２－(1)・(2)，第26図）

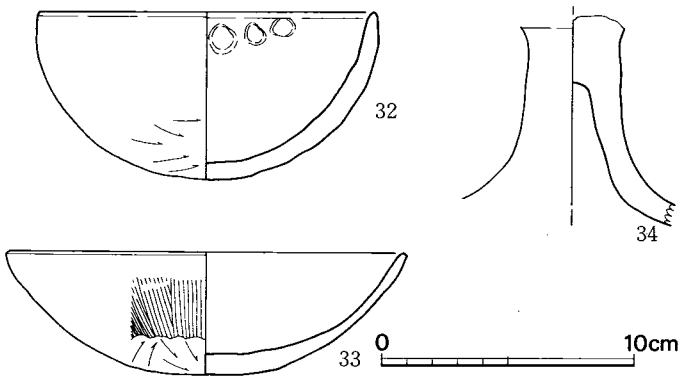
７号・11号竪穴住居跡に切られた住居で，11号住に接する個所で僅かに住居のコーナーが認められることから方形のプランを有すことが判る。規模は南壁と東壁で計測でき4.25・3.50m，壁高は15cm前後である。その他詳細は不明である。

出土遺物は坏と高坏がある。出土土器から住居跡は古墳時代の範疇の所産であろう。

出土遺物

土　器（図版９，第29図）

坏は32・33がある。両者とも丸底をなし，前者は厚手づくりで口径13.4cm器高6.6cm，後者は器壁が薄く口径15.8cm，器高4.9cmを測る。32の底部はヘラで削り，33は板の小口によるカキトリ状削りを施し，二次加熱を受ける。

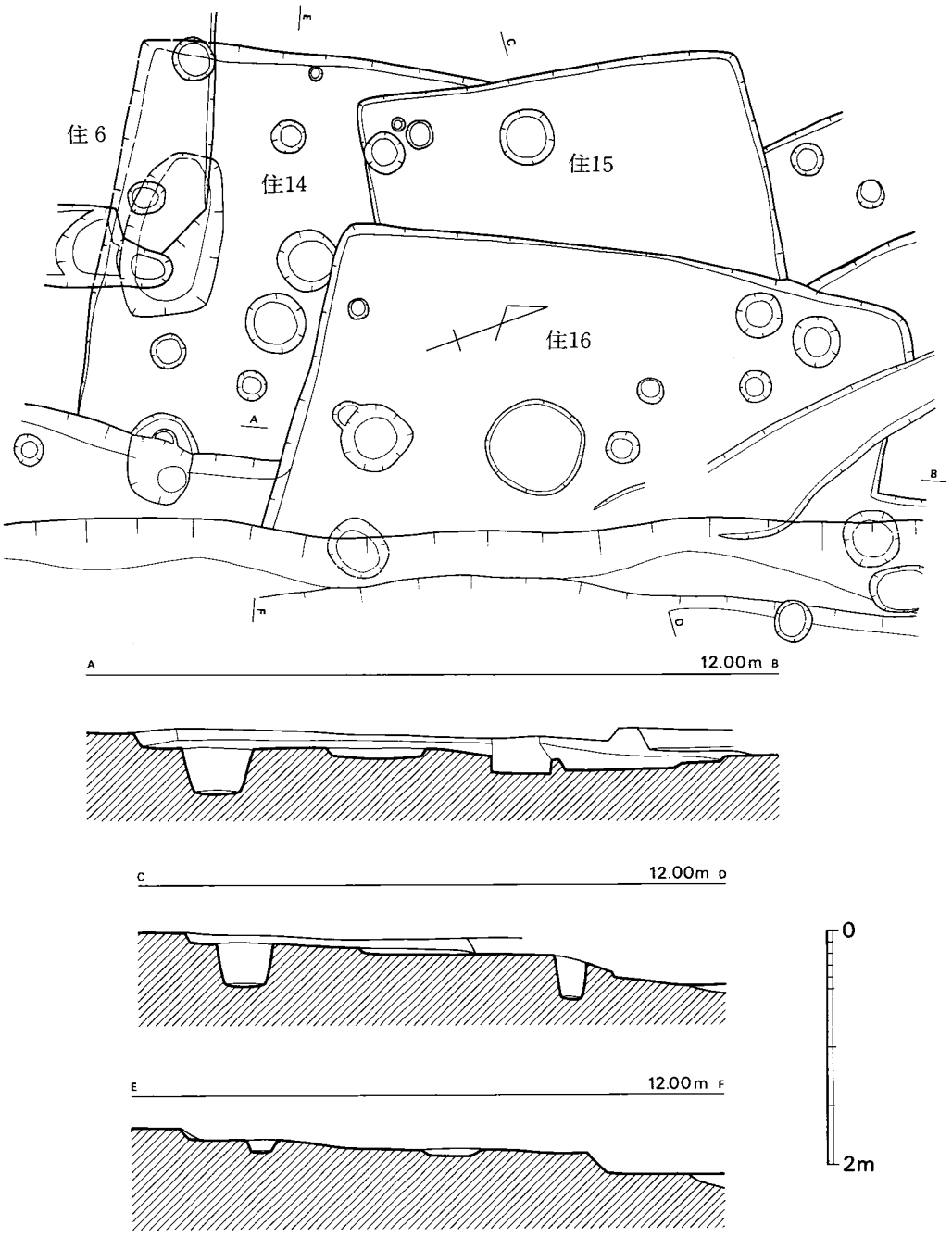


第29図　13号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

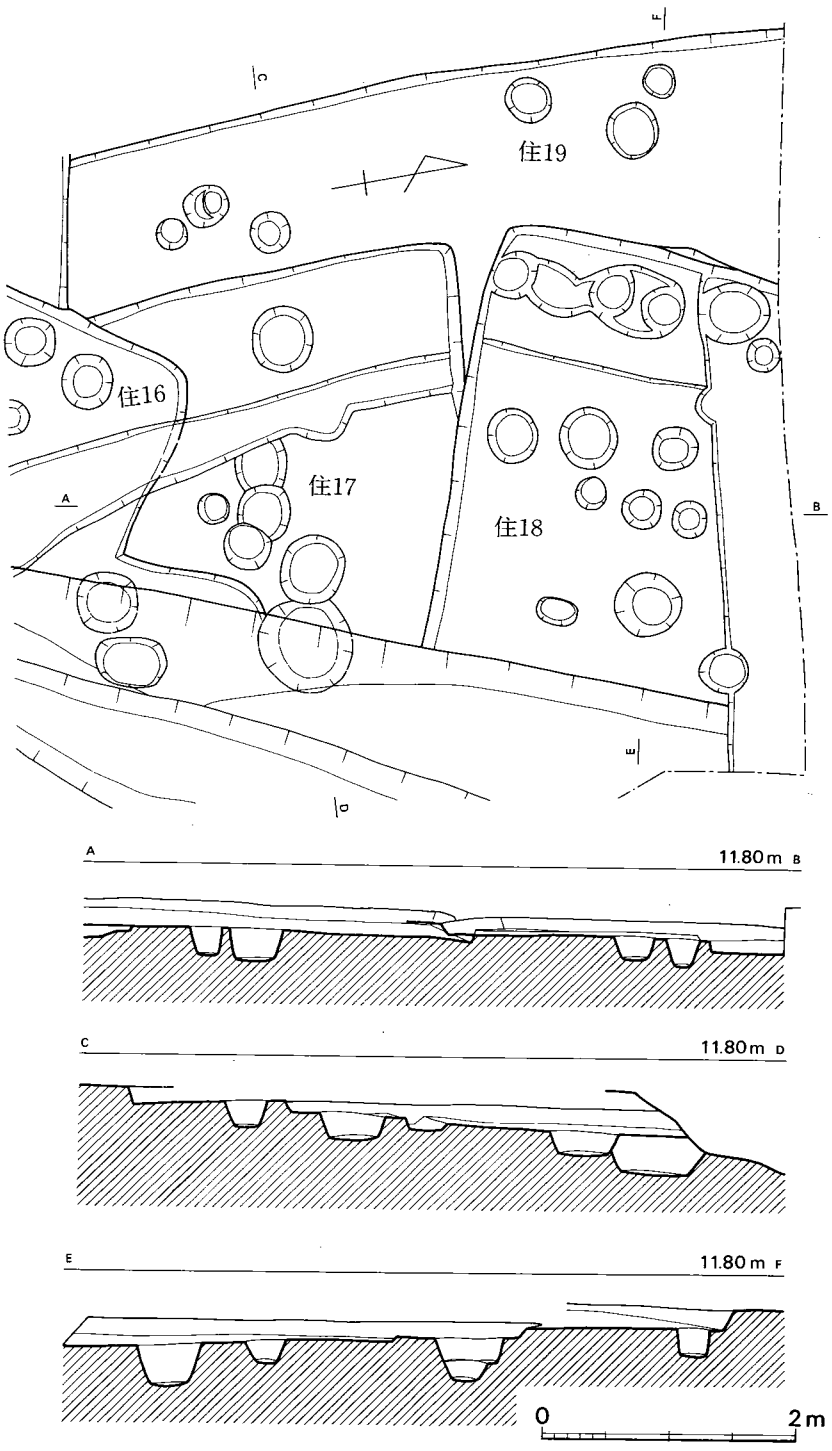
34の高坏は短い脚部に大きく開く裾部を持つ。調整は外面が縦ヘラ磨キ，内面は横ナデで仕上げ，胎土・焼成とも頗る良い。

14号・15号・16号竪穴住居跡（図版２－(1)，第30図）

３軒とも重複関係にあり，14号住居跡は15号住居に切られ，15号住居は16号住居に切られ，溝１→16号住→15号住→14号住の関係にある。平面形態が推測できる住居跡は16号の長方形のみで，他の２軒は不明瞭である。規模も明らかでなく，15号及び16号の西壁のみ計測でき3.30・4.90mを測る。壁高は３軒とも10cm未満で遺存状態は不良である。主柱穴も確定していないが大



第30図　14号・15号・16号竪穴住居跡実測図（1/60）



第31図　17号・18号・19号竪穴住居跡実測図（1/60）

凡２本柱であろう。14号の南壁沿いには楕円形の屋内土壙があり，その規模は長軸1.40ｍ，短軸80cm，深さ36cmを測る。土壙からの出土遺物はない。炉跡は14号と16号に残っており両者とも炭化物が充満している。

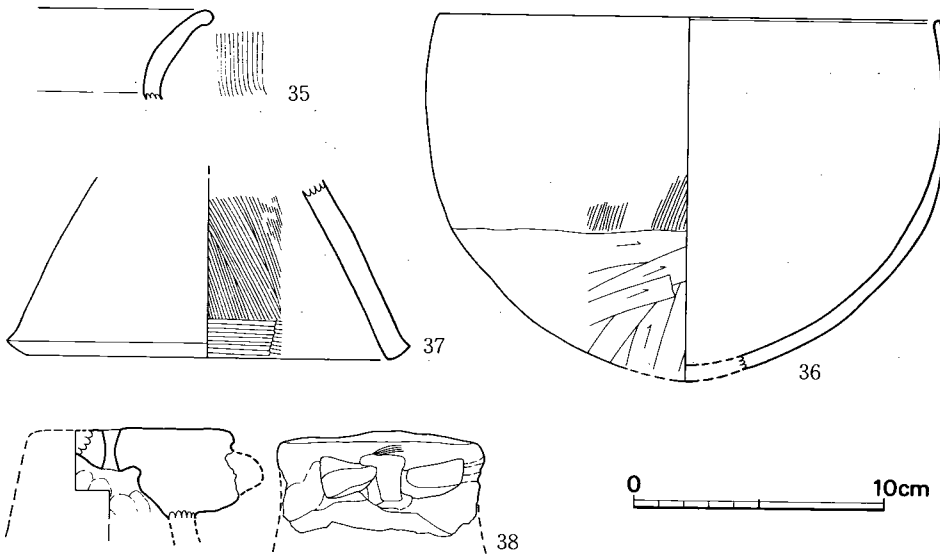
出土遺物は３軒とも小破片の土器が少量あるのみで図示不可能である。小片の土器のため住居の時期は明らかでないが，３軒とも溝１よりは古く弥生時代後期後半以前である。

17号・18号・19号竪穴住居跡（図版２－(1)，第31図）

発掘区の北西側で検出した住居跡で３軒とも重複関係にある。17号は16号と18号に切られ，溝１に17号・18号とも切られているが明確に把握できていない。19号の切り合い関係は明らかでなく，19号自体が竪穴住居か否かを判断する資料に乏しい。３軒とも平面形態，規模，床面積，主柱等の全容は不明であるが，壁高は17号が15cm，18号が14cm，19号が16cm前後を測る。18号では西壁沿いに幅90cm，高さ３cmのベット状遺構を削り出している。

出土遺物は17号住居から甕・大型鉢・器台が，18号は甕・坏・高坏が，19号住からは片口土器の破片がある。しかし，17号と18号から出土した土器の中には明らかに古式土師器の形状をなす個体もあり，溝１と17号・18号の新旧関係に誤りがあることも考えられる。

出土遺物



第32図　17号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

17号の土器（図版９，第32図）

甕は35の破片が１点ある。口唇部を外側に肥厚させ，口縁部は反り気味に外反する。

36は大型の鉢で僅かに内弯する口縁部に張りのある胴部をなす。底部は欠損しているが，尖り底か丸底であろう。

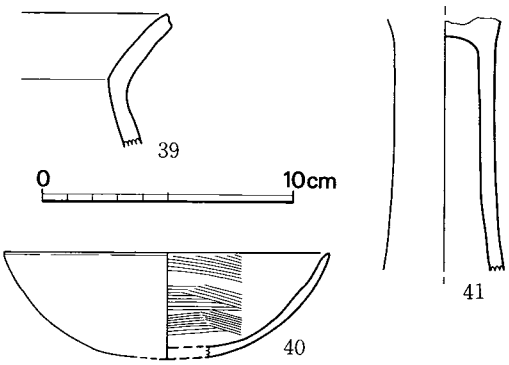
器台は37・38の２点がある。37はやや丸味を持ち乍ら大きく裾部が開くもので，ハケが調整の主体をなす。38は把手付の器台で明らかに人面を模したつくりである。

18号の土器（第33図）

39の甕は「く」字状に外反した口縁部を持ち，口唇部には浅い沈線を廻らす。

40の坏は丸底を有し，調整はナデ風の磨キとハケで仕上げる。

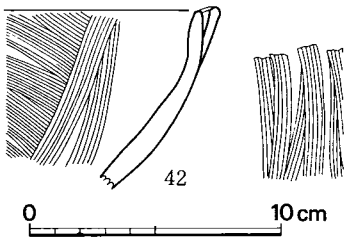
41の高坏はスマートな脚部を持ち，薄手づくりで内外面とも縦ヘラ磨キを施し，胎土・焼成とも頗る良好の高坏である。



第33図　18号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

19号の土器（第34図）

42は片口土器の小破片であるが，顕著な片口をつくり出していない。２種類のハケで仕上げている。

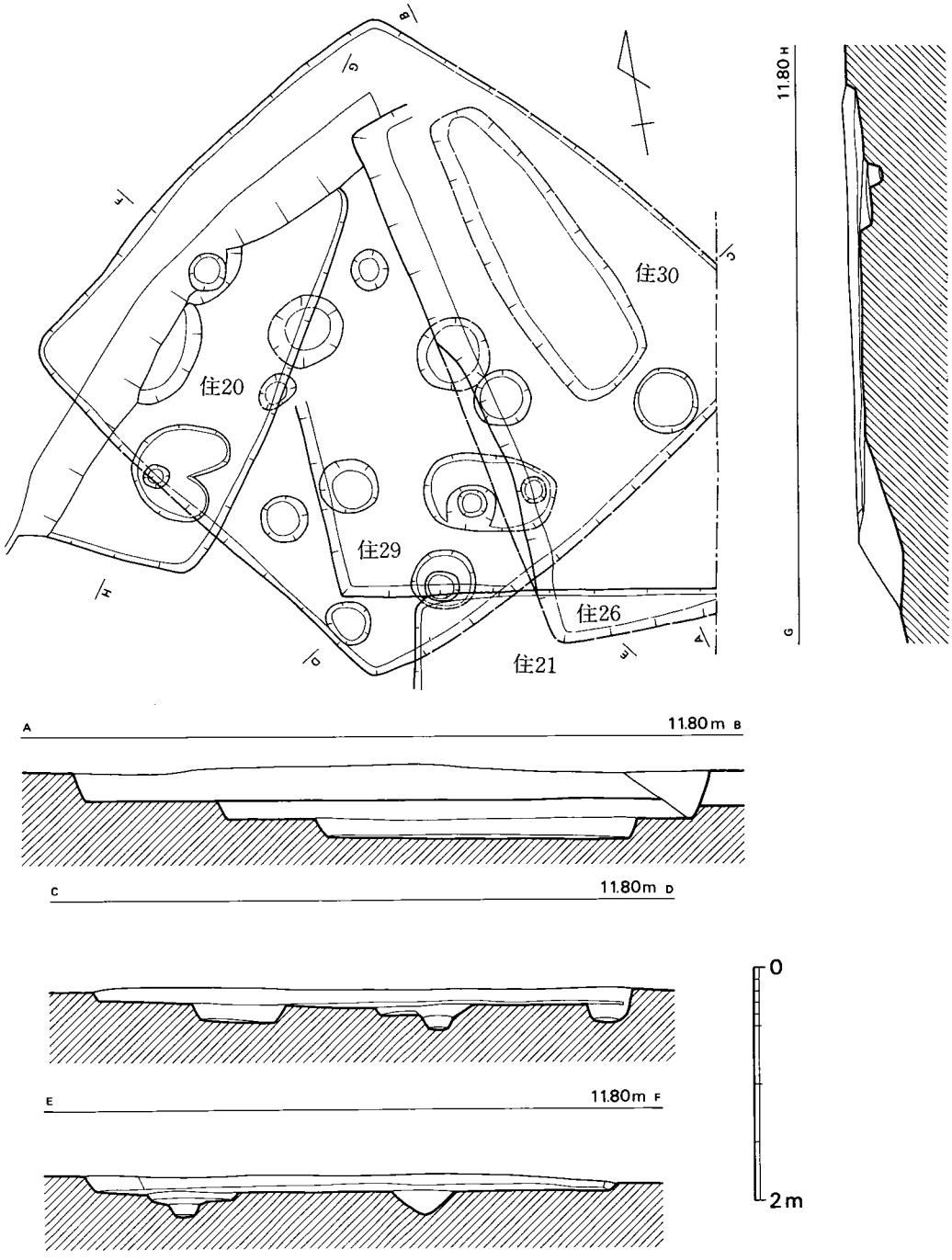


第34図　19号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

20号竪穴住居跡（図版３－(2)，第35図）

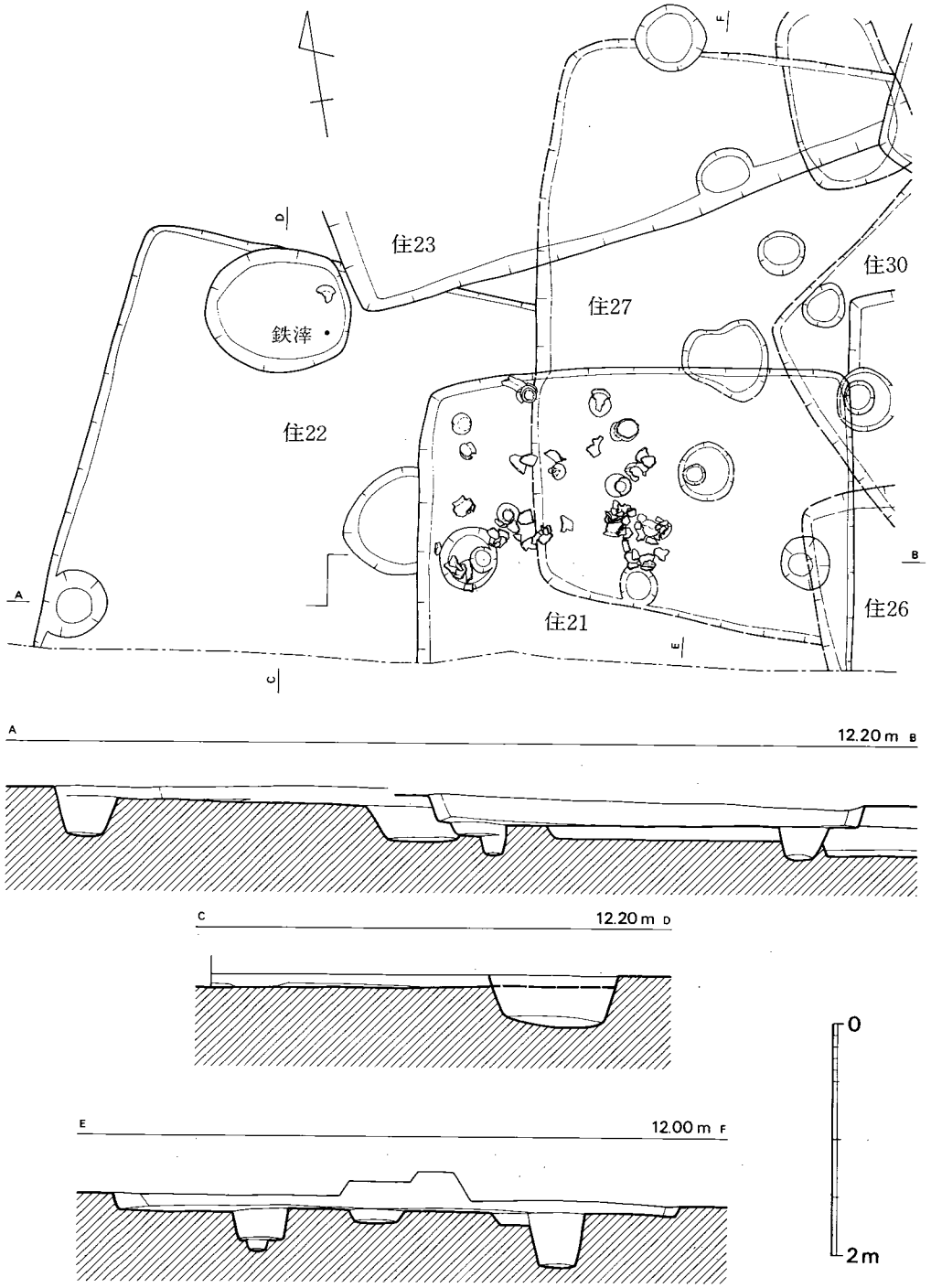
発掘区の南東隅で検出した住居跡で23号・27号・29号30号と重複関係にあり，切り合いが著しい。４軒の住居跡では20号が最も新しいが，住居の殆んどが後世の削平を受けており，内容に不明な点が多い。南壁のみ計測でき3.60ｍを測る。壁高は10cm未満で遺存状態は良くない。

出土遺物は土器が無く，覆土中から総重量17.74kgの鉄滓が出土しており，小鍛治関係の竪穴とも考えられる。



第35図　20号・26号・29号・30号竪穴住居跡実測図（1/60）

21号竪穴住居跡（図版６－(2)・７－(1)，第36図）



第36図　21号・22号・27号竪穴住居跡実測図（1/60）

22号・26号・27号・29号・30号住居と重複する平面形態が方形をなす竪穴住居跡と考えられるが，住居の一部が調査区域外まで掘削していることから完掘に至っていない。規模は北壁のみ計測可能で3.60ｍを測り，小型の竪穴住居跡である。壁高は18㎝前後で総体的に残りは良い。主柱は２本で，柱間は2.75ｍを測る。その他の施設は不明である。主軸方位はＮ80°Ｗを示す。

出土遺物は豊富で床面から若干上層で壺・小型壺・大型甕・小型甕・甕・高坏・埦等があるが，器種は欠落している。出土土器から住居の時期は古墳時代前期である。

出土遺物

土　器（図版９・10・11，第37・38・39図）

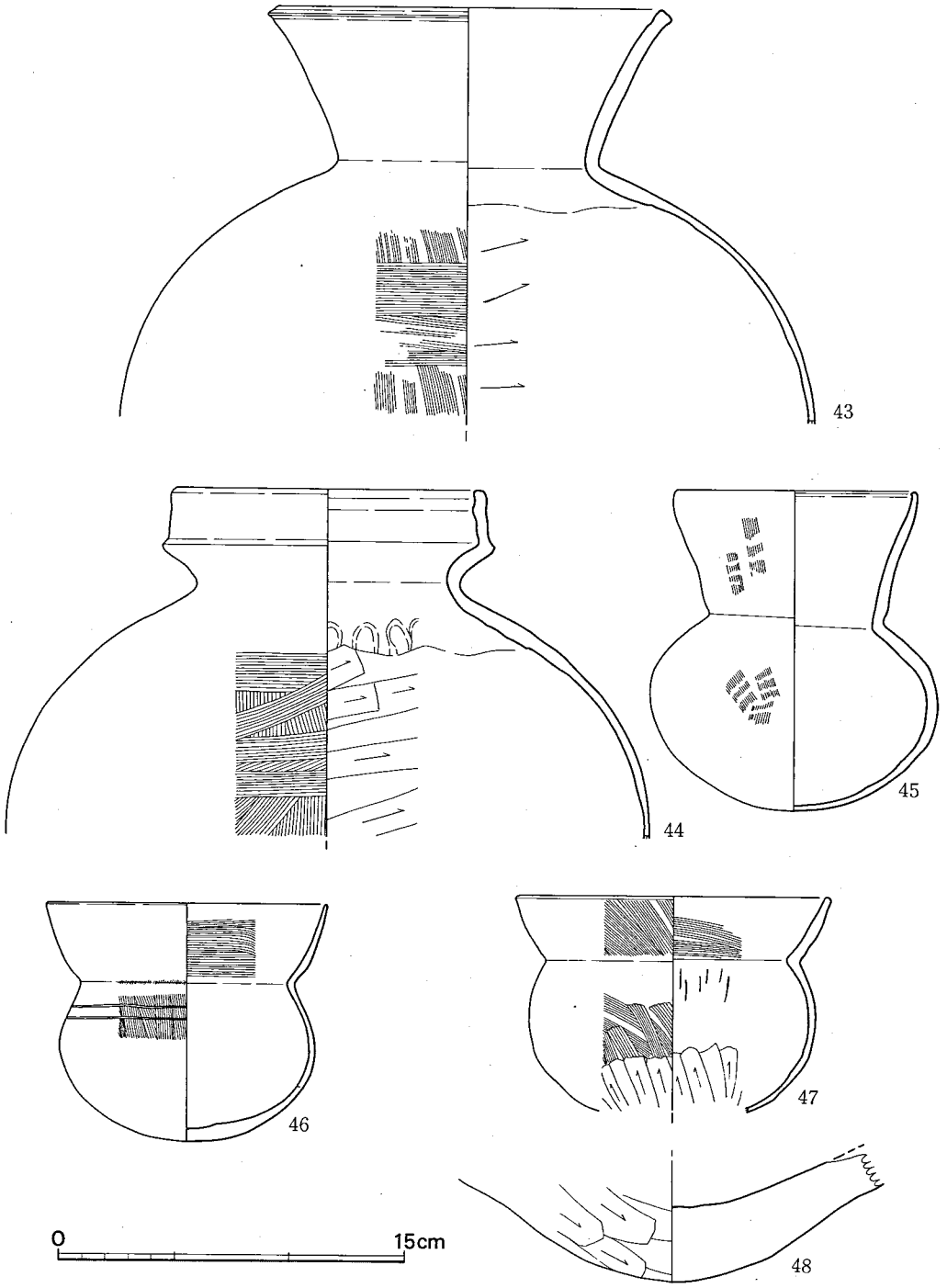
壺は２種類ある。43は細みの頸部から大きく反り気味に外反する口縁部に口唇部は肥厚させる。肩部から胴部の張りは鋭い。調整は外面が細いハケ，内面は丁寧な右廻りのヘラ削りで仕上げ器壁を薄くする。胎土には金雲母を多く含む。44は複合口縁壺で僅かに内傾する口縁部を有し，頸部から擬口縁にかけては鋭く外反する。肩から胴部の張りは著しく，調整は口縁から頸部内外面は丁寧な横ナデ，内面頸部下は指頭圧痕を施す。器体内面は右廻りの丁寧なヘラ削り，外面は横ハケと縦ハケを多用する。口縁部の特徴から山陰系の搬入品である。小型の壺は45がある。頸部から口縁部にかけては直に外反し，口唇部は僅かに内弯する。胴部は張り玉葱形を呈する。頸部内面と器外面はヘラ磨き，胴部内面はヘラ削りののちナデで仕上げる。焼成の良い土器である。

小型の甕は46・47がある。前者は長目の内弯する口縁部を持ち，下膨れの胴部を有す。口縁内面と外面肩部には細いハケを施し，２条の装飾的な沈線を廻らす。器体内面は横ナデ，外面はヘラ磨キで仕上げ，整美な均整のとれた土器である。47は厚手づくりで内面底部付近はヘラ削り，外面は板の小口によるハケ状のカキトリを施す。

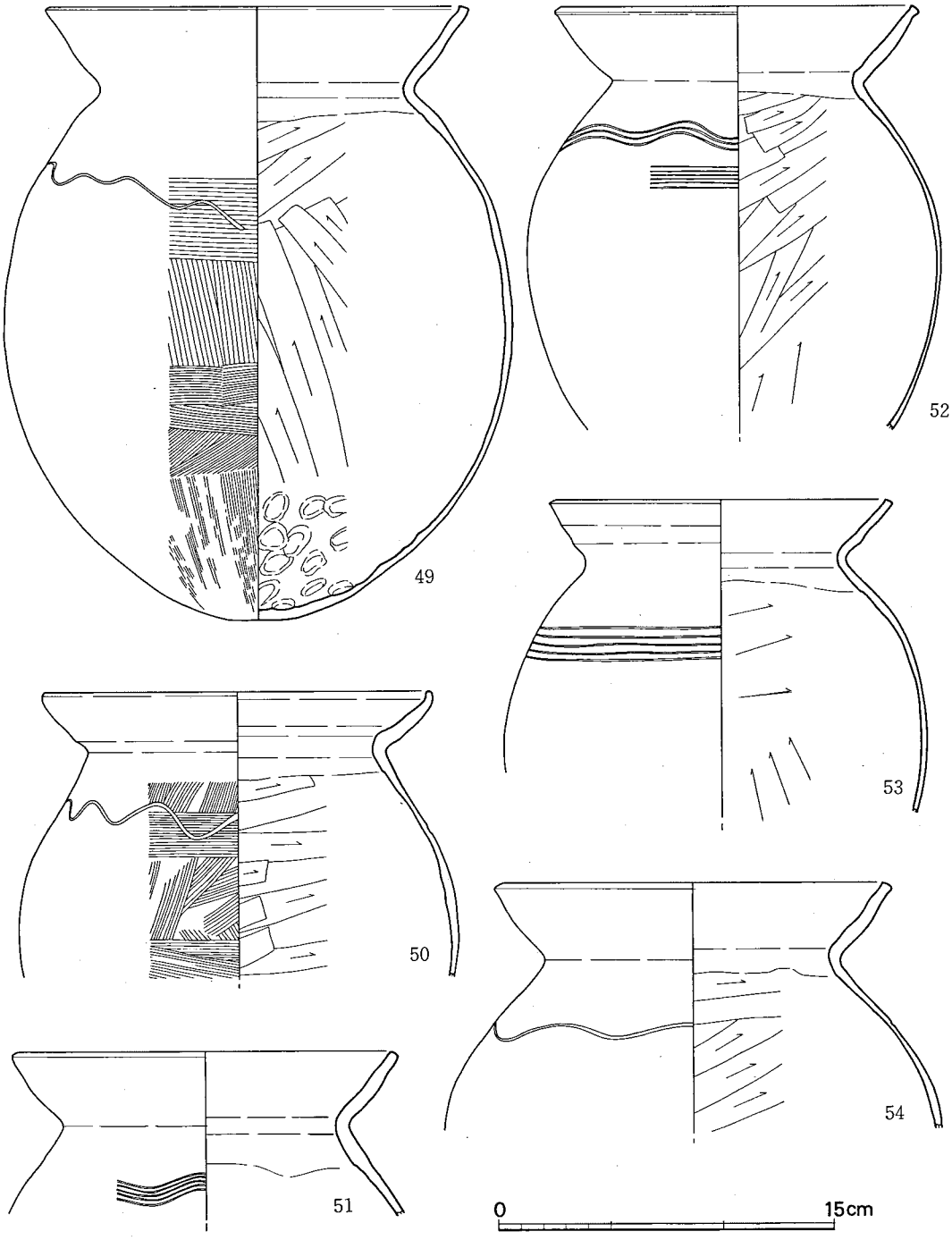
48は大型の甕で非常に器壁が厚い。底部は尖り気味で外面は荒いヘラ削りで仕上げる。

甕には49～59がある。総体的に口唇部に摘み上げがみられ，口縁部の内弯度は鈍い。肩部はやや張り，最大径は胴部上半から中央部にある。底部は尖り気味の丸底をなすと考えられるが，大半が底部を欠失しており明らかでない。49～54は肩部に１条から５条の装飾的な沈線を廻らす。器外面には布留古式から現われる特有の整美な横ハケと縦ハケを多用し，内面は頸部の一段下から右廻りの丁寧なヘラ削りで仕上げ，49・55の内面底部には「型作り技法」の際につくと言われる指頭圧痕が顕著である。49・50・55には二次加熱と煤の付着が認められる。55は他の甕に比べて器壁が薄くつくりの良質な土器で，他の甕は淡赤褐色の色調を持つが，この甕は暗灰褐色である。

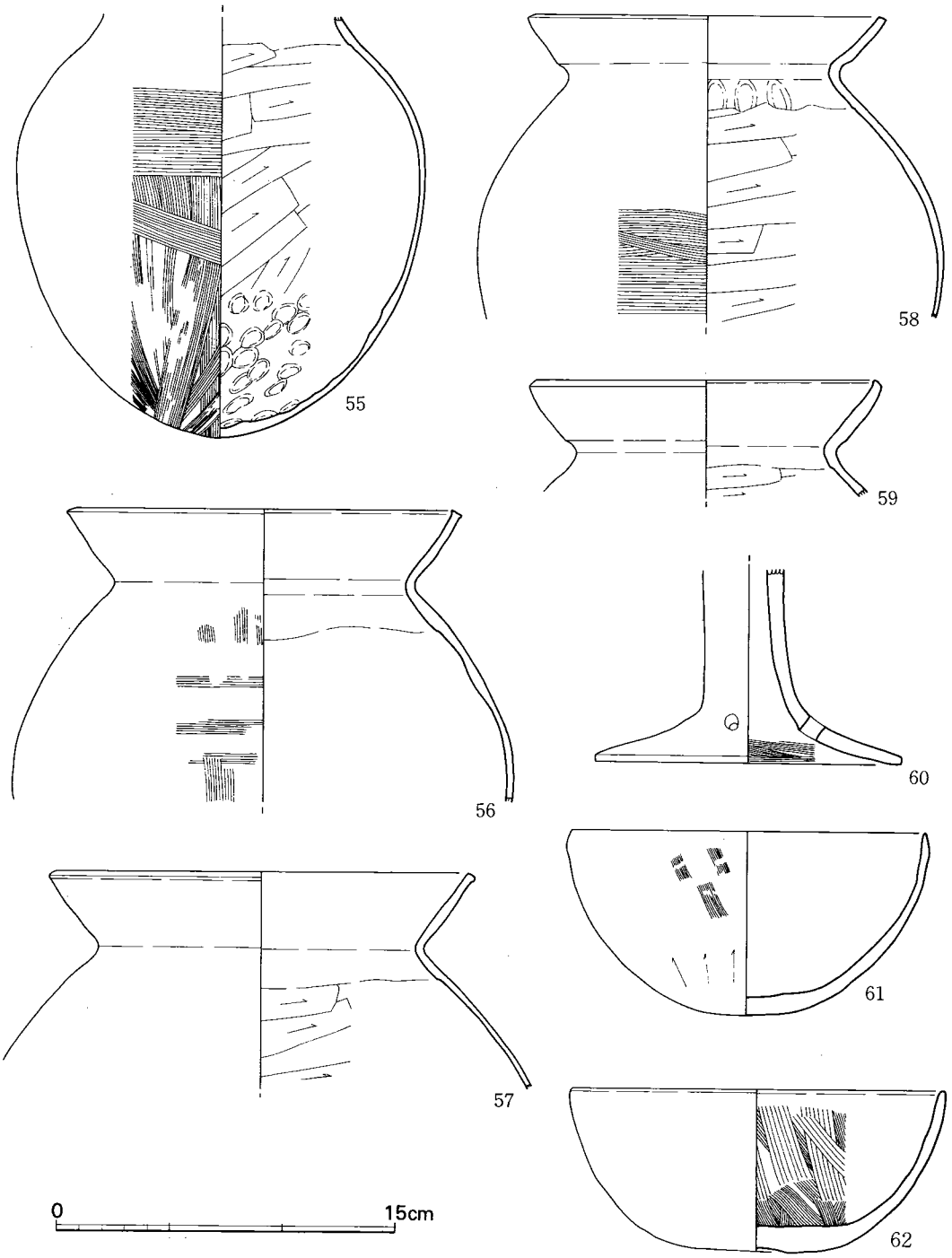
高坏は60が１点あるのみで，柱状部は空中で裾部は大きく開き３個所に径８㎜の孔を穿っている。調整は外面がヘラ磨キ，内面は横ナデと細い横ハケで仕上げる。胎土は砂粒がやや多く



第37図　21号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



第38図　21号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



第39図　21号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

焼成は頗る堅固で明茶褐色を呈す。

埦は61・62がある。前者の口唇部は内弯気味で底部は丸底をなす。調整は風化して不明瞭であるが，外面に細いハケと底部付近で下→上方向にヘラ削りを施す。後者は安定感のある埦で底部は一見平底状である。底部外面には巻き上げ痕を残す。調整は内面のみ観察でき，２種類のハケで仕上げる。

22号竪穴住居跡（図版３－(1)，第36図）

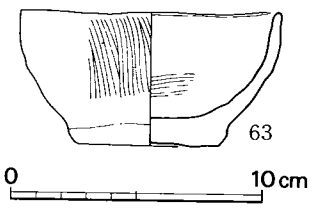
９号竪穴住居跡の東側に隣接して掘られた住居跡で，21号・23号・27号住居跡と３号土壙に切られている。住居の東側は路線外のため完掘に至っておらず，全容は明らかでない。壁高のみ計側でき10cm強を測る。

出土遺物は少なく小型の鉢が１点あるにすぎない。出土土器から住居の時期は弥生時代後期後半頃であろう。

出土遺物

土　器（図版11，第40図）

つくりの粗い鉢で上げ底気味の平底をなす。調整は荒いハケで仕上げ，胎土は砂粒が多く暗黄褐色の色調を持つ。

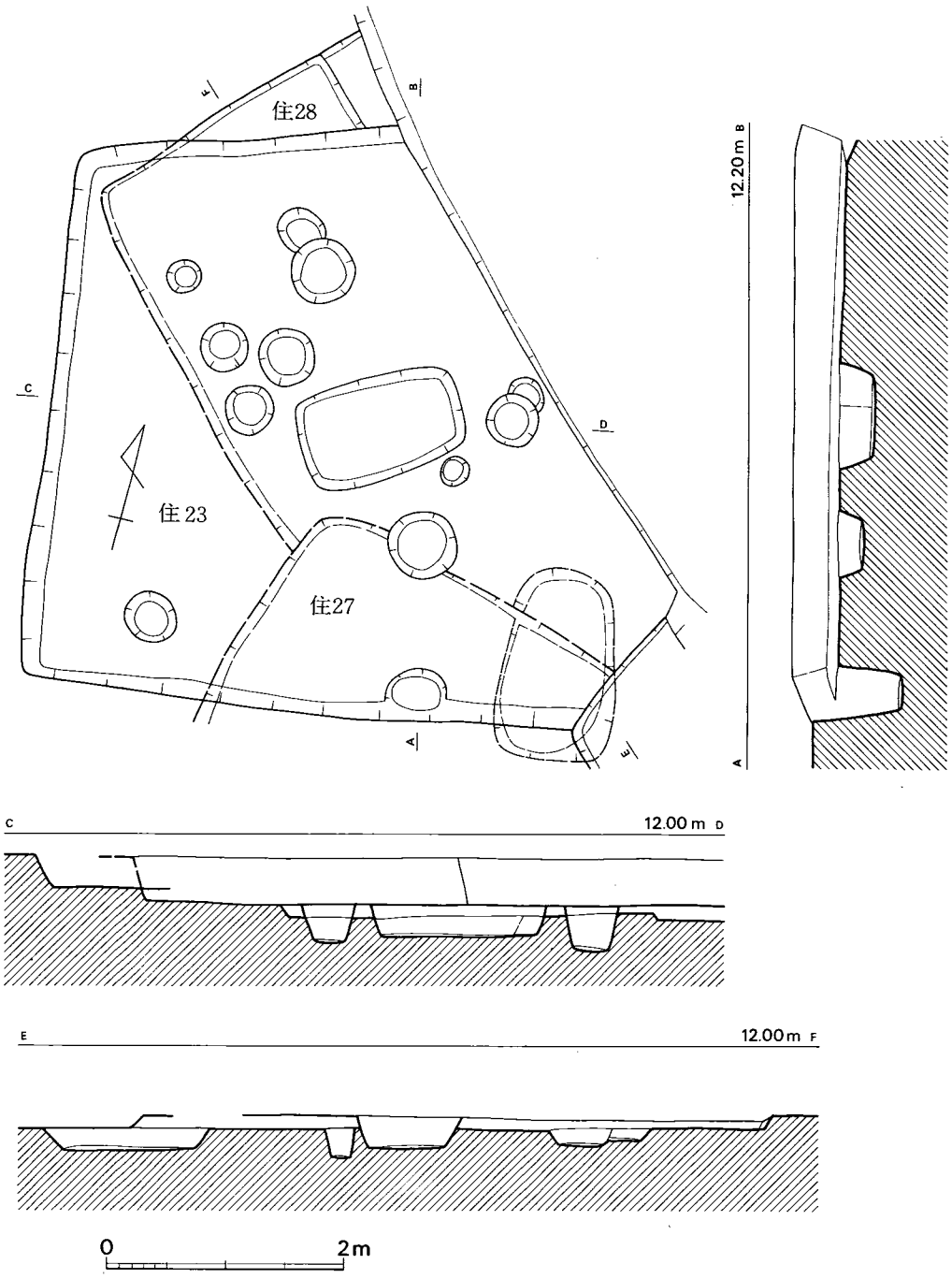


第40図　22号竪穴住居跡
出土土器実測図(1/3)

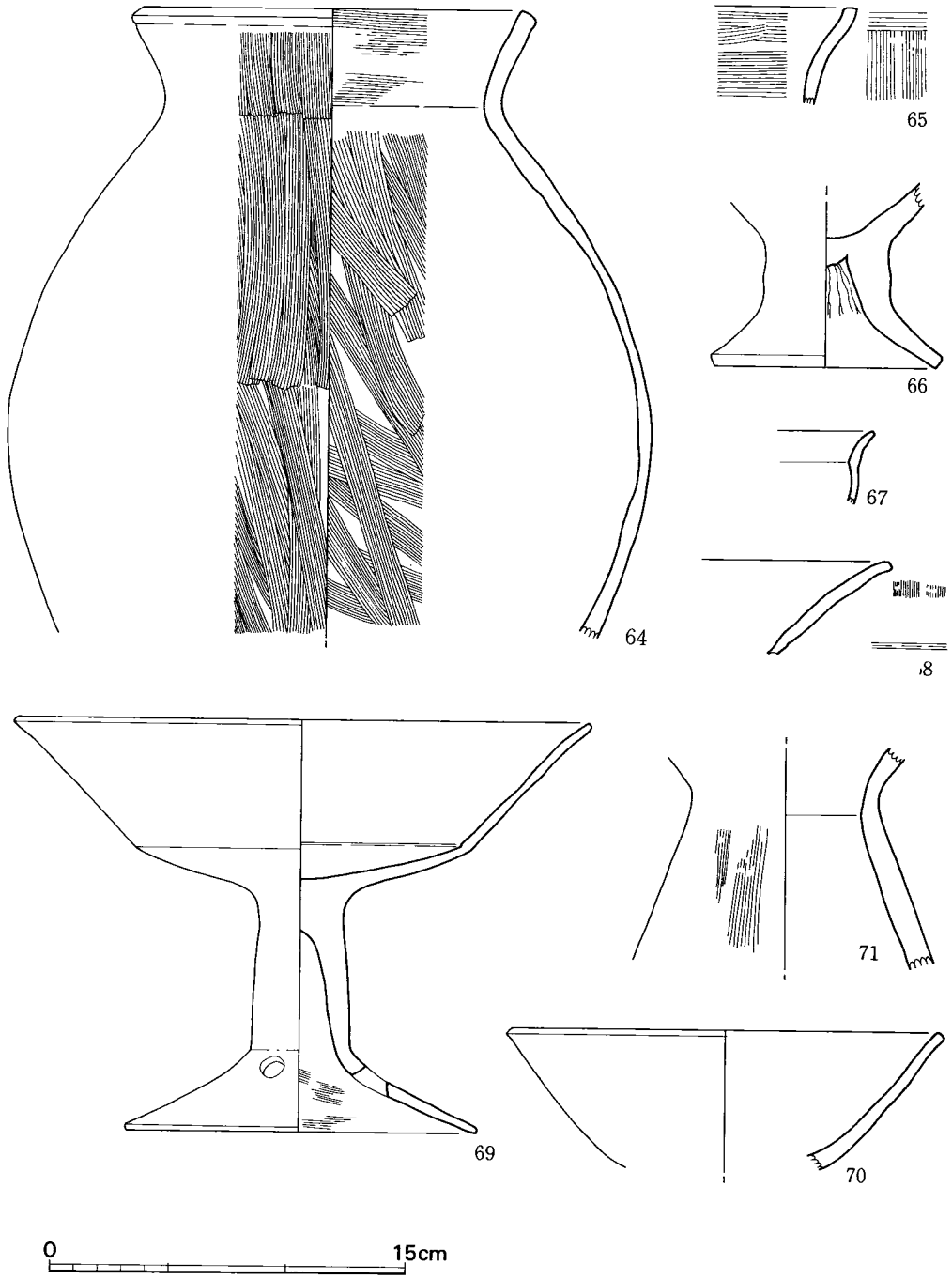
23号竪穴住居跡（図版３－(1)，第41図）

東側の壁を田畑の耕作で削平された住居跡で，10号・20号・22号・27号住居跡との重複関係にあり，20号→23号→27号→10号→22号の順であろう。平面形態は長方形である。規模は壁が遺存しておらず明らかではないが，西壁4.50m，南北壁は２本の主柱の位置から推測して5.60mの数値が得られよう。壁高は25cmである。主柱間は2.30mを測る。柱間の中央には長軸1.40m，短軸85cmの隅円長方形の土壙があるが，炭化物・灰等はみられない。主軸方位はN79°Eを示す。

出土遺物は壺・甕・脚台付甕・鉢・高坏・器台等がある。出土土器から住居の時期は古墳時代初頭から前半頃である。



第41図　23号・28号竪穴住居跡実測図（1/60）



第42図　23号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

出土遺物

土　　器（図版11，第42図）

壺は64がある。口縁部は鈍く外反し，口唇部は僅かに肥厚させる。頸部から胴部にかけては緩い曲線を描き，最大径が胴中央部にある。調整は内外面とも細い縦ハケを多用し，丁寧に仕上げている。胎土には砂粒が多いが，焼成は頗る堅固で明茶褐色をなす。

甕は65・66の２点がある。前者は反り気味に外反する口縁部を持ち口唇部はやや内弯する。調整は荒いハケを多用する。煤の付着が顕著である。後者は低い脚台付の甕で器壁は厚い。

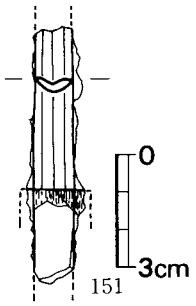
67は小型の鉢で丁寧なつくりである。内面は横ナデ，外面は横磨きで仕上げる。

高坏は68～70がある。68・69は同タイプの坏部を有すが，69が薄手づくりで良質である。深めの坏部を持ち坏部の屈折は明瞭である。脚部はスマートで裾部は鋭く開き，３ケ所に径1.1cm前後の孔を外側から穿つ。調整は風化し不明瞭であるが，ナデと磨き仕上げであろう。胎土は頗る緻密で赤色粒子を多く含む。焼成も非常に堅固で淡い赤褐色を呈す。70は小型で深い坏部をなし，屈折部は緩い曲線を描く。

71は器台形土器で器体上部で大きく開く。弥生時代の系譜を引く器台である。

鉄　　器（第43図）

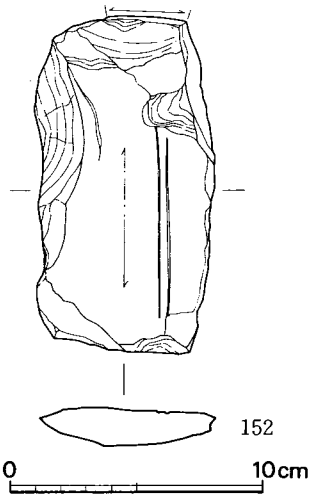
151は断面三日月状をした鏃で中央に稜線を持つ。刃部の切先と茎の基部を欠失する。現存長6.8cm，幅1.0cmを測る。茎部には僅かではあるが木質が残る。



第43図
23号竪穴住居跡
出土鉄器実測図
(1/2)

石　　器（図版15，第44図）

152の砥石が１点ある。細砂岩質粘板岩製で砥ぎ面が２面あり，鋭い刃物を砥いだのであろうか，１面には２本の鋭い沈線が走る。



第44図　23号竪穴住居跡出土石器実測図（1/3）

24号・25号竪穴住居跡（第５図）

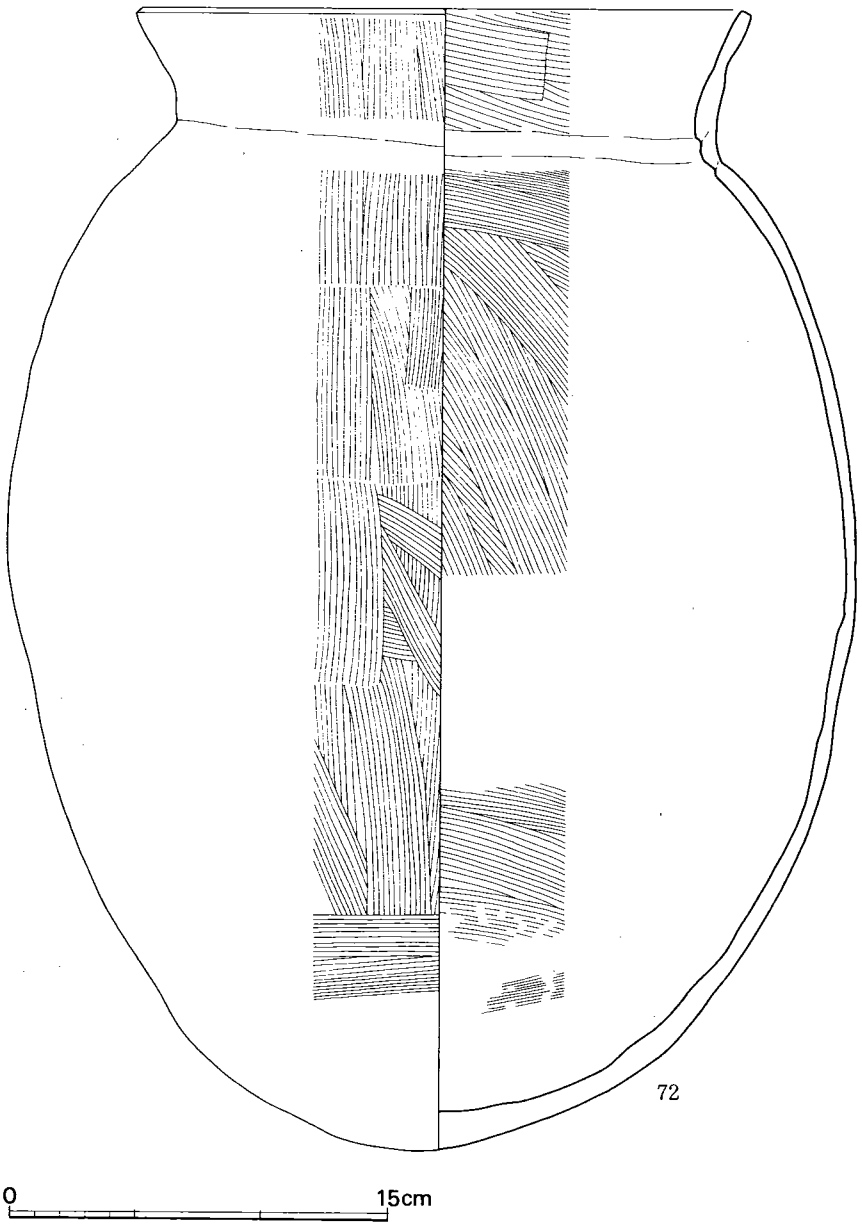
24号住居跡は１号住居と重複関係にあり，新旧関係は明らかではないが，５号土壙からは切られている。１号住居同様3/4を削平され全容はつかめない。南壁側には深さ45cmの柱穴があり，主柱は２本であることが推測できる。現存での壁高は５cm前後で遺存状態は良くない。

出土遺物は皆無である。

25号竪穴住居跡は24号住居の南側に隣接して掘られているが，大半が路線外のため完掘に至

っていない。壁高は24号同様５cm前後を測る。主柱は柱穴の配置から４本の可能性がある。出土遺物はなく，時期も明らかでない。

26号竪穴住居跡（図版３－(1)，第35図）



第45図　26号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

当該住居跡も廻りの住居同様重複が激しく，不明な点が多い。しかも住居の殆んどが路線外のため全容は全くと云ってよい程判明していない。現存での壁高は深く23cmを測る。

出土遺物は甕・高坏・手捏ね土器・埦等がある。出土土器から住居の時期は古墳時代初頭頃である。

出土遺物

土　器（図版12，第45・46図）

甕には在地系の大型の72・73，外来系の74がある。72の口縁部は鈍く外反し，やや肩の張った長胴で底部は尖り気味である。最大径が胴部上半にある。調整は内外面とも荒いハケを多用し，底部付近はハケをナデ消す。底部外面は磨耗する。胎土は大型にしては砂粒が少なく，焼成は頗る堅固で赤褐色を呈する。73は反り気味に外反する口縁部を持ち肩の張りは大きい。底部は尻すぼみ状に尖って終る。最大径は胴部上半にある。調整は外面が荒いハケ，内面はハケをナデ消す。底部外面は磨耗し，内面は布留併行期に通常みられる指頭圧痕を残す。器壁は厚手で胴下部には二次加熱を受ける。74は破片であるが出土した甕類で外来系の細かい叩きを有するのは74と28号住の86の２点のみである。叩きは左上りか水平で下部に細い縦ハケを施す。内面は丁寧なヘラ削りで薄く仕上げる。胎土は非常に緻密で焼成も頗る堅固である。色調は淡褐色を呈し，やや灰色っぽい。

75の高坏は丹塗り研磨の良質の土器で３個所に孔を穿つ。

埦は77・78の２種類がある。前者は口径16cm，器高8.7cmを測り，底部付近をヘラで削る。後者は大型で口唇部に沈線を廻らす。口縁部から胴部にかけては粘土紐の接合面が明瞭に残り，内外面ともハケで仕上げる。79は大型坏か高坏であろう。非常につくりの良い土器で器壁も薄い。

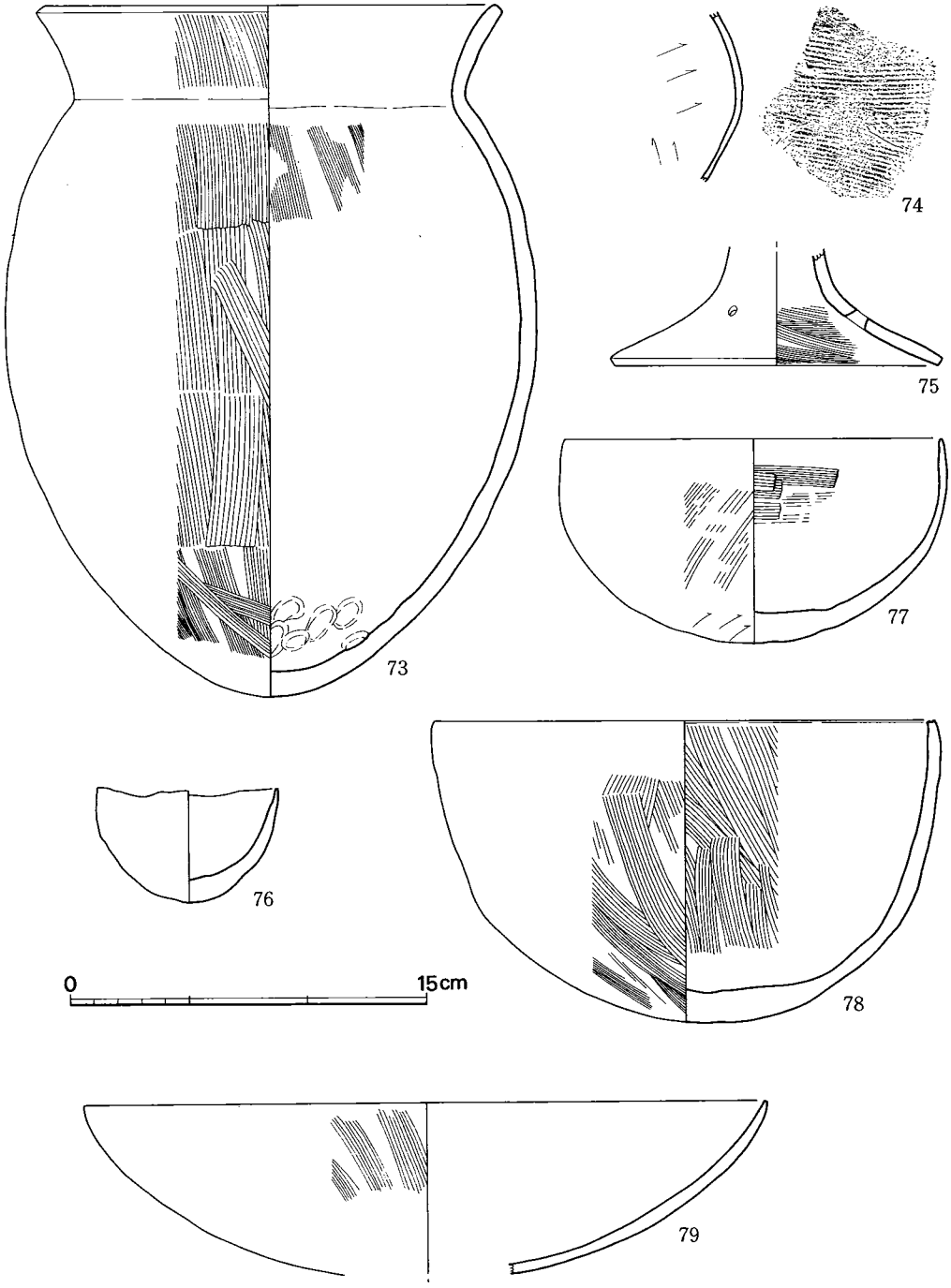
27号竪穴住居跡（図版３－(1)，第36図）

21号と23号に切られ全容は殆んど把握できない。26号住居との切り合いでは出土土器から相前後する非常に近い時期である。平面形態，主柱は現況では判断し兼ねるが，長方形の２本柱の可能性が最も高い。規模は西壁で4.75m，壁高23cmを測る。

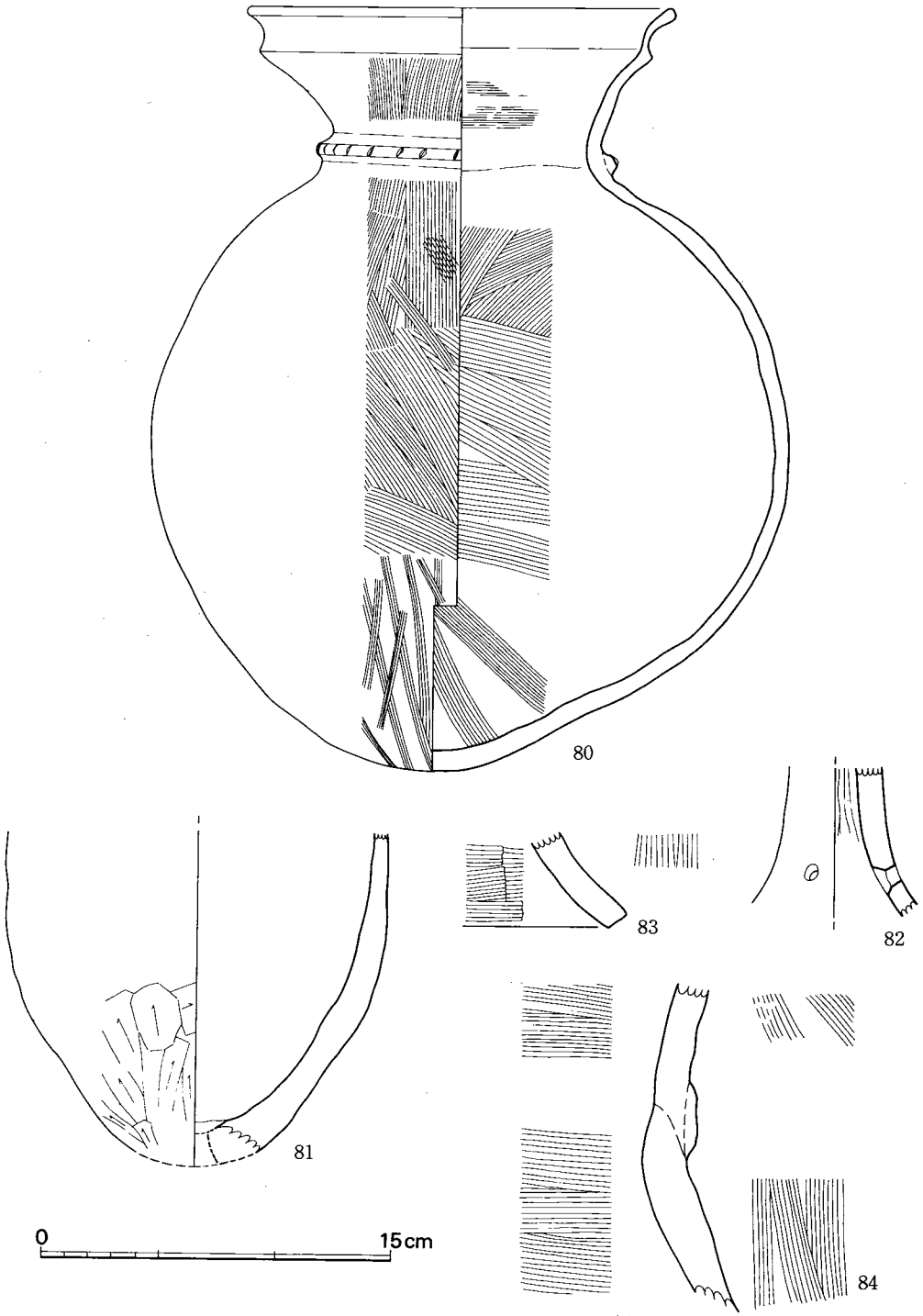
出土遺物は壺・甑・大甕・高坏・器台がある。出土土器から住居は古墳時代初頭頃であろう。

出土遺物

土　器（図版12，第47図）



第46図　26号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



第47図　27号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

80は複合口縁壺の完形品である。覆土中から出土した。擬口縁は緩く外反し，口縁部は短く外反度が強い。口唇部は僅かに肥厚する。頸部には断面が蒲鉾状の凸帯を廻らしヘラによる刻み目を施す。肩から胴部にかけては球形をなし，底部は尖り気味の丸底である。調整は荒いハケが主体で部分的にナデ消す。底部外面は庄内系の甕の底部付近にみられる細い縦ハケで仕上げる。焼成は頗る堅固で赤褐色を呈する。

81は器壁が厚くつくりの雑な甑で，弥生時代後期～古墳時代前期にかけて普遍的にみられる砲弾形の器形をなす。器面はナデ，底部外面は荒くヘラで削っている。内外面とも強い二次加熱を受ける。

高坏は脚部片がある。緩い曲線を描き３孔を穿つ。器外面は縦ヘラ磨きで仕上げる。

84は大型の甕の頸部片である。低い台形状の退化した凸帯を付し，荒いハケで仕上げる。

28号竪穴住居跡（図版３－(1)，第41図）

10号住居を切り23号住居に切られて検出した竪穴住居跡で,北壁側を著しく削平され1/2程度の遺存状態である。西壁沿いの一部にベットの片隣が確認できるが，全容は不明に近い。

出土遺物は甕・坏・手捏ね土器がある。出土土器の中には底部がレンズ状の平底をなすものや畿内第５様式系統の甕があり，また85・87等は丸底で23号住居の混入土器の可能性も考えられるが，一応28号出土として説明する。出土土器から住居の時期は弥生時代終末から古墳時代初頭の年代が与えられる。

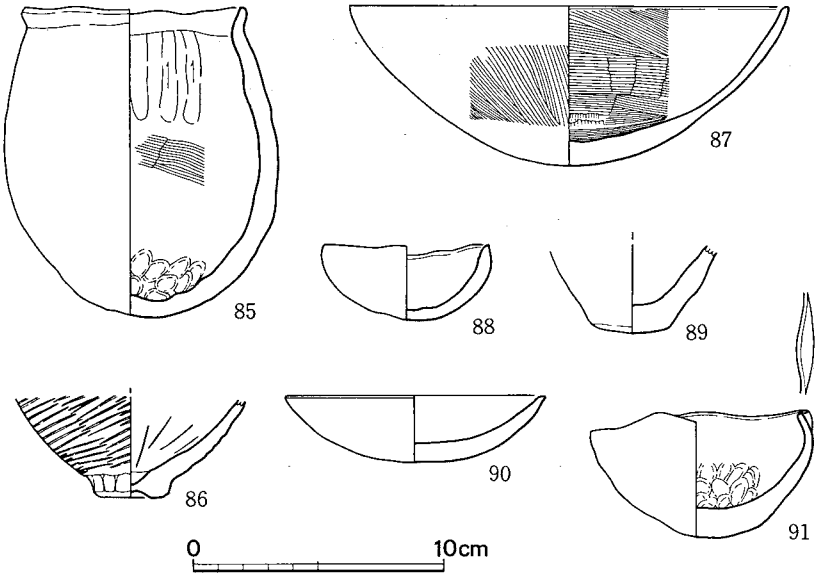
出土遺物

土　器（図版12，第48図）

85は小型の甕である。口縁部の外反度は鈍くしかも短い。最大径は胴部下半にあり，底部は丸底をなす。86の甕は畿内第５様式系統の甕で，鉢の可能性もある。底部の径は３cmで上げ底をなす。器表面は右上りの荒い叩きと指頭圧痕で仕上げ，内面は横ハケをナデ消す。胎土は密で焼成は頗る堅固である。色調は明茶褐色を呈す。

坏は87と小型の90がある。前者は口径17.5cm，器高6.3cmを測る。調整はハケを多用する。底部外面は磨耗している。90は口径10.3cm，器高2.6cmと低い。

88・89・91は手捏ねに近い土器で，89・91はレンズ状の平底をなし，前者は弱い二次加熱を受ける。後者は口縁の一部を内弯させ，器外面に赤色の化粧土を塗布する。



第48図　28号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

29号竪穴住居跡（第35図）

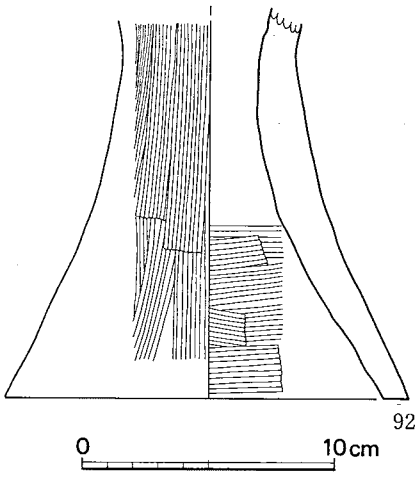
30号住居を切っている以外は廻りの全ての竪穴住居跡に切られた遺構であるが，住居である確証に乏しい。遺存状況も不良で全容は明らかでない。

出土遺物は器台が1点ある。

出土遺物

土　器（図版13，49図）

92は最小径が上部にある器台で口縁部を欠損する。胴部から緩い曲線を描き裾部に至る。調整はハケを多用し，内面はナデとハケで仕上げる。



第49図　29号竪穴住居跡
出土土器実測図（1/3）

30号竪穴住居跡（図版3－(1)，第35図）

南西隅の住居跡群で最も古い竪穴住居跡である。平面形態は方形を呈し，住居の南東隅は路線外の

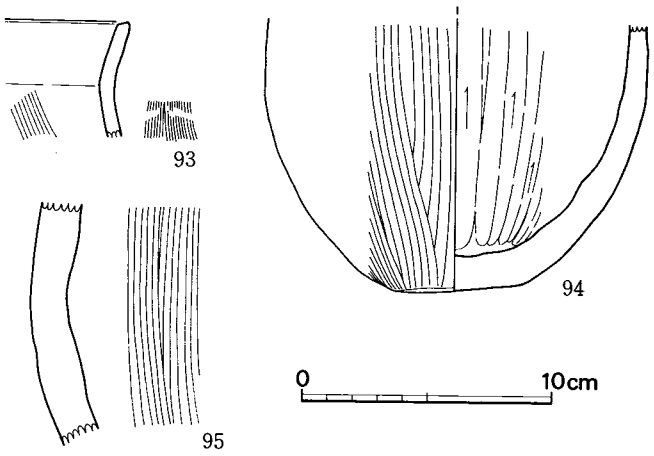
ため一部を掘残している。規模は南北壁4.60・4.10m，東西壁4.50・4.10m，壁高10cm強を測る。床面積は19.2m²である。主柱穴，炉跡等も施設は不明である。

出土遺物は甕・器台があるが，93の甕は混入の可能性がある。94の土器から住居の時期は弥生時代後期後半頃であろう。

出土遺物

土　器（第50図）

甕は93・94がある。93は僅かに外反する口縁部を有し，ハケと横ナデで仕上げる。胎土は非常に緻密で焼成も頗る良好である。94は器壁の厚い甕でつくりも粗い。底部は平底をなす。調整は外面が非常に荒い縦ハケ，内面は指頭ナデで仕上げる。



第50図　30号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

(2)　土　壙

1号土壙（第51図）

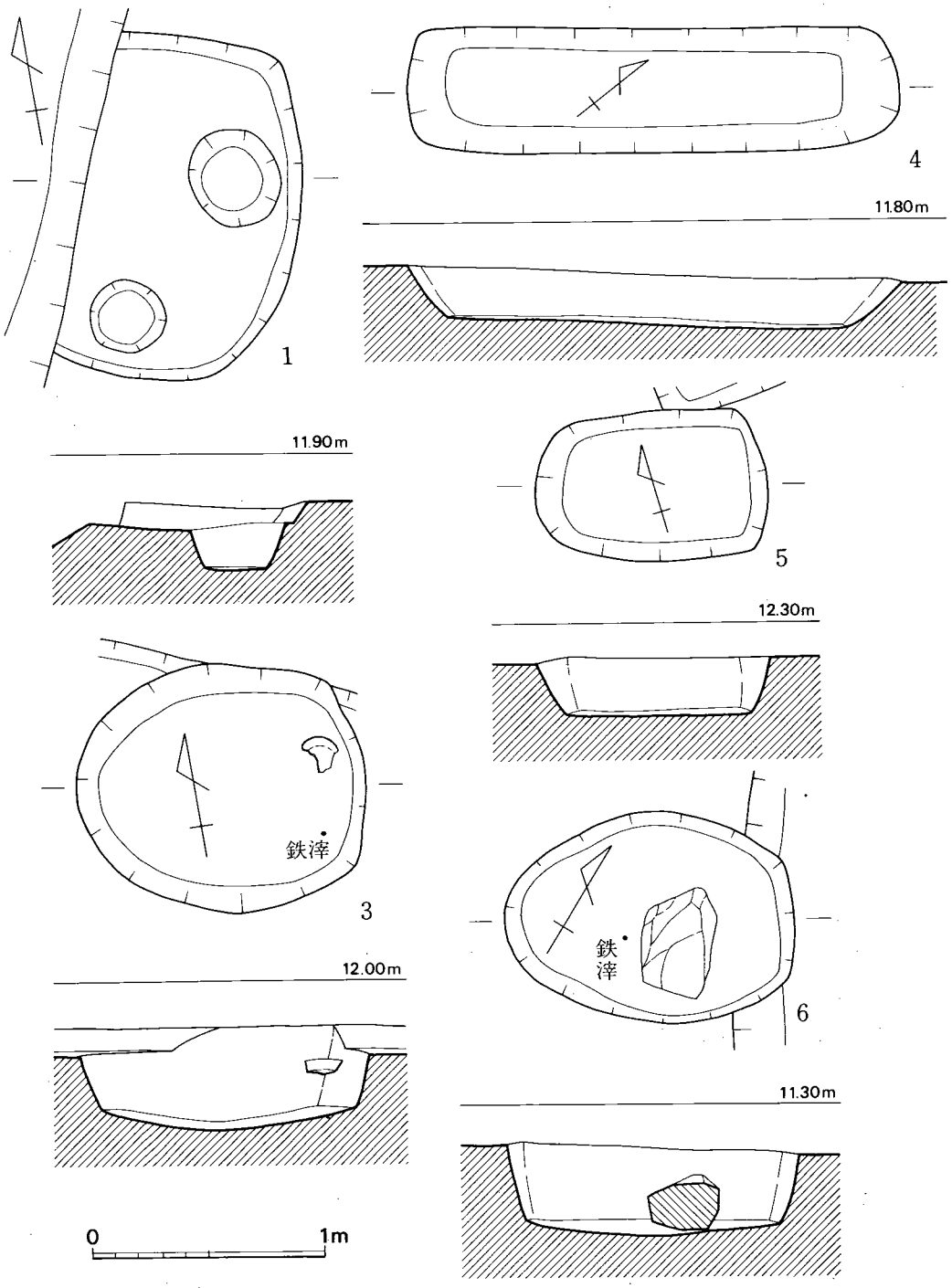
溝1に切られた土壙で平面形態，規模等は不明である。壁高は10cm前後を測る。土壙内には2個のピットがあるが伴うか否かは明らかでない。

出土遺物は皆無で時期も不明である。

2号土壙（図版2－(2)，第4図）

11号住居に隣接して検出した土壙で溝1との切り合いがあるが，出土土器から土壙が新しいことが判明した。検出した部分はコーナー部で小形の住居の可能性も残している。

出土遺物は小型丸底土器が1点出土しており，土壙の時期は古墳時代前期頃の所産である。

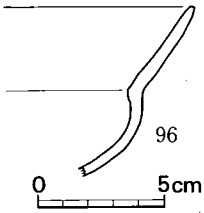


第51図　1号・3号・4号・5号・6号土壙実測図（1/60）

出土遺物

土　器（第52図）

96の小型丸底土器の破片が１点ある。布留併行期に伴う器種で胴部は平扁な球形をなす。調整は風化が著しく不明。胎土は緻密で焼成はかなり堅固である。



第52図　２号土壙出土土器実測図（1/3）

３号土壙（図版７－(2)，第51図）

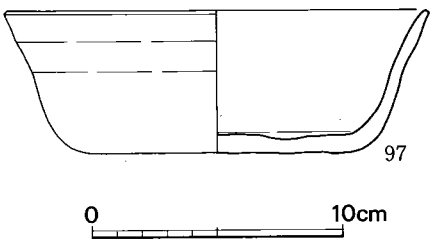
22号竪穴住居跡と完全に重複した土壙で22号住を切っている。平面形態は不整円形で，規模は長径1.25ｍ，短径1.09ｍ，深さ44cmを測る。

出土遺物は床面から20cm上層で土師質の埦と鉄滓が出土している。出土土器から土壙の時期は奈良時代前半頃であろう。

出土遺物

土　器（図版８，第53図）

97の土師器の埦が１点あり，完形品である。口縁部は僅かに外反し平底をなす。底部には巻き上げ痕と板目痕を残す。口径17cm，器高5.7cmを測る。調整は横ナデで仕上げ，胎土には赤色粒子を多く含み淡茶褐色を呈す。



第53図　３号土壙出土土器実測図（1/3）

４号土壙（図版２－(2)，第51図）

12号竪穴住居跡の東側に隣接して掘られた隅円長方形の土壙で，長軸2.05ｍ，短軸54cm，深さ20cmを測る。壁面は緩斜をなし，床面は平坦である。

出土遺物は無く，時期も明らかでない。

５号土壙（第51図）

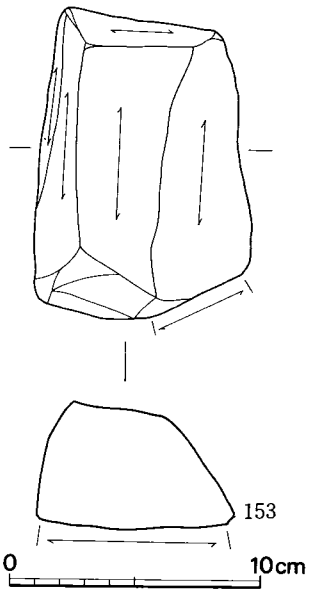
24号竪穴住居跡の隅を切った状態で検出した小形の隅円長方形のプランを有す土壙である。規模は長軸1.02ｍ，短軸65cm，深さ20cm強を測る。

出土遺物は今山産の玄武岩製の砥石が１点ある。

出土遺物

石　器（図版15，第54図）

153の砥石がある。玄武岩製で今山産のものであろう。全面が磨耗して丸みを持ち，砥ぎ面は７面である。全長6.9cm，幅8.7cmを測る。



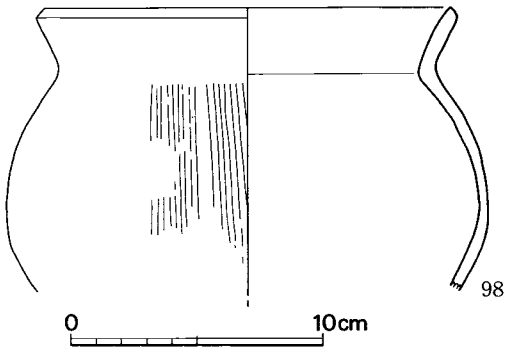
第54図　５号土壙出土石器実測図（1/3）

６号土壙（図版３－(1)，第51図）

溝２に隣接した楕円形の土壙である。規模は長軸1.25m，短軸92cm，深さ30cm前後を測る。床面は平坦で，床面に接した状態で花崗岩の石塊が出土し，その傍で床面より10cm上層で鉄滓が１個出土した。土壙内は砂質土で埋まっていた。

(3)　柱穴群（第４図）

発掘区中央区部と溝２の東側に群をなすが，発掘区中央部の柱穴群は掘立柱建物としての規則性は認められない。しかし，柱穴の中には深いものもあり，２本の主柱を持つ竪穴住居跡が削平を受けたことも考慮される。第４図に示した柱穴No.１からは甕形土器が倒立した状態で出土した。甕の胴下半は欠失しており，削平時点での欠損であろう。また，３号井戸状遺構の西側で検出した柱穴No.２からは今山産の玄武岩製蛤刃石斧が落ち込んだ状態で出土した。



第55図　柱穴No.１出土土器実測図（1/3）

出土遺物

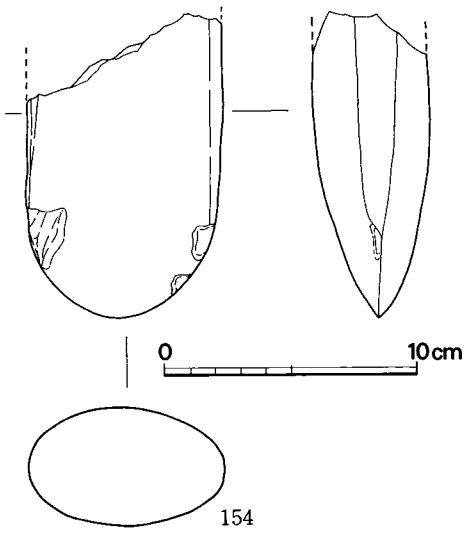
柱穴No.１の土器（第55図）

98の甕がある。「く」字状に外反する口縁部に扁平の張りの鋭い胴部をなす。頸部内面の稜線は明瞭で，調整は器外面が非常

に荒い縦ハケ，内面と口縁部は横ナデで仕上げる。色調は淡黄白色を呈しやや白っぽい。外面の一部には二次加熱を受けている。

柱穴No. 2 の石器（第56図）

154は玄武岩製の蛤刃石斧で約1/2を欠損する。刃部の残りは良く，側面観の曲線は一方がやや細まり，左右対称ではなく，古相の石斧であろう。磨耗が著しく表面がざらつく。現存長12cm，幅7.8cm，厚さ4.7cmを測る。

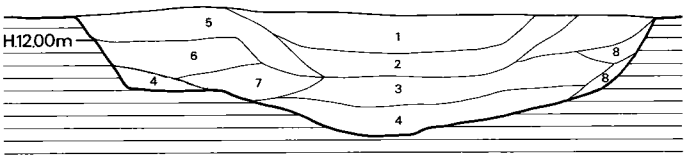


第56図　柱穴No. 2 出土石器実測図（1/3）

(4)　溝状遺構

溝 1　（図版 2 －(1)　第 4 ・57図）

昭和48年度の予備調査時に確認した溝で，本調査で舌状丘陵の東斜面に沿って略南北方向に延び谷部に流れ込む形で掘削していることが判明した。溝は南側が狭く幅2.10m北側が3.00m，検出した全長は29mである。断面は逆台形をなす。溝の中央部には幅50cm前後の浅い溝が走り僅かながら二段掘を呈する。溝の深さは南側で40cm，北側で60cm強で北方向に深く掘られ，堆積土も砂質土で埋まり最下層は砂層が堆積し水流の痕跡が残る。



1.黒褐色砂質土　5.灰褐色砂質土
2.暗灰褐色砂質土　6.黄灰褐色砂質土
3.灰黄褐色砂質土　7.灰褐色砂質土
4.明灰褐色砂質土　8.黄褐色砂質土

第57図　溝１土層断面図（1/30）

予備調査での遺物の出土状況では上層（１・２層）からは土師器が出土し，最下層で弥生時代終末に近い土器が出土している。今回図示した土器の中には明らかに土師器と認定し得るものと弥生時代終末に比定される土器とがあり，予備調査時の出土状態と符号する。

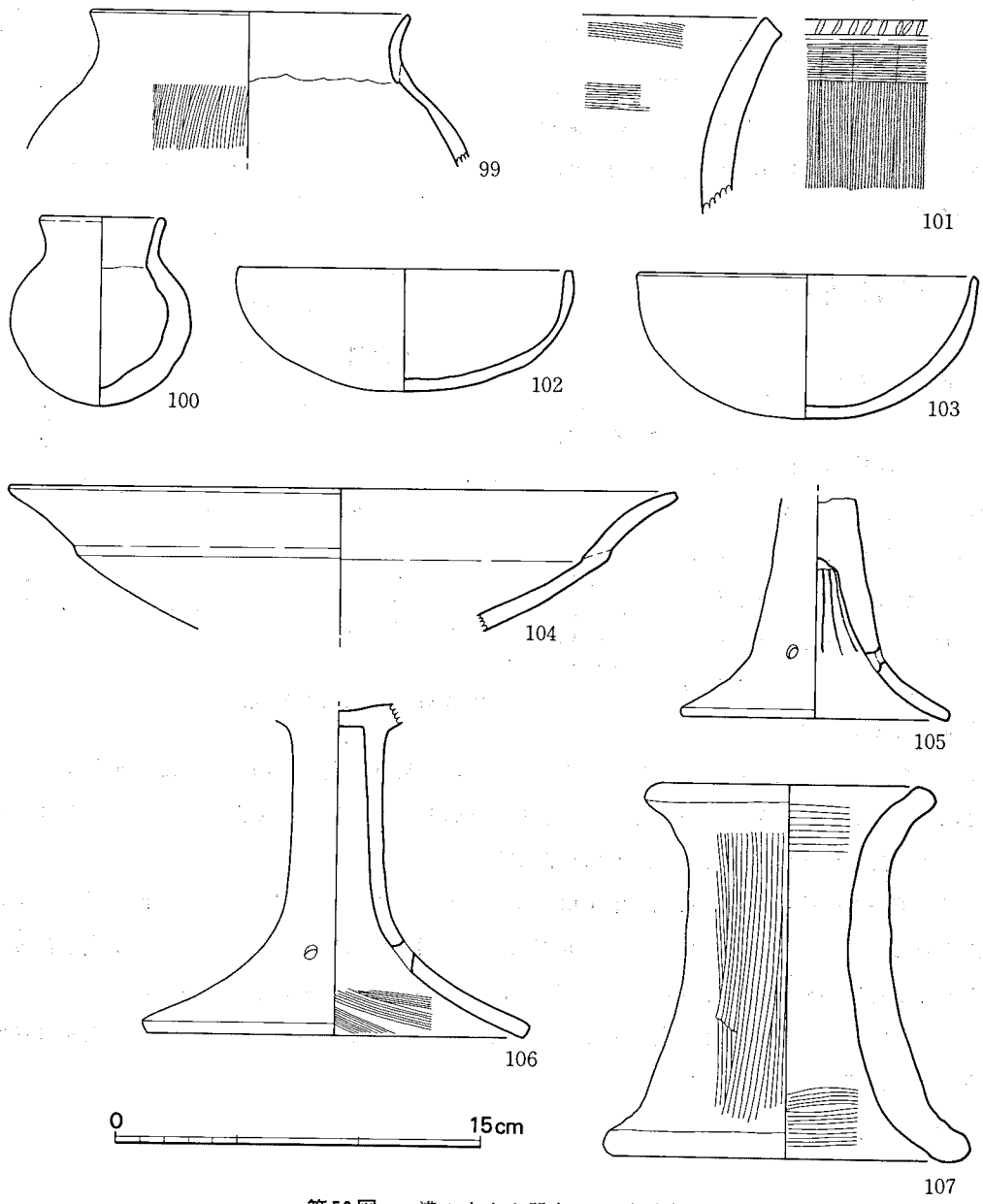
出土遺物は壺・大甕・椀・高坏・器台・支脚がある。出土土器から溝の上限は弥生時代後期後半から終末に近い時期が与えられる。

出土遺物

土　器（図版13，第58・59図）

壺は99・100がある。前者は鈍く外反する口縁部に張りのある肩部を有す。調整はナデとハケで仕上げるが，器壁が薄く内面をヘラ削りしたのちナデ消したことも考えられる。後者は小型の丸底壺で口縁部は直に外反し，球形の胴部に丸底をなす。器壁は厚く指頭ナデで仕上げる。

甕は101の大型品の破片がある。上方に向って鈍く外反する口縁部を持ち，大型壺とも考え



第58図　溝1出土土器実測図（1/3）

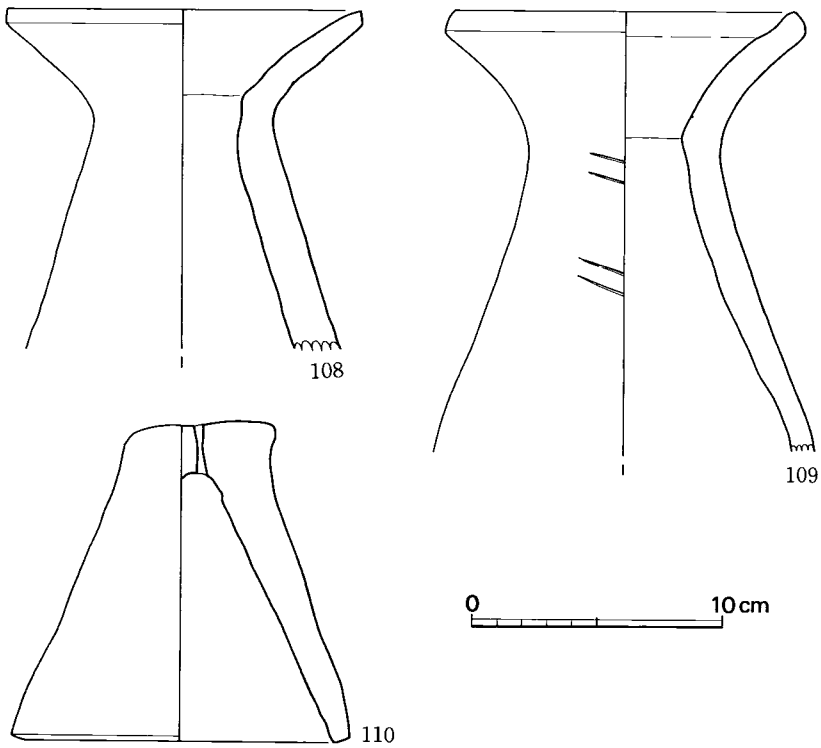
られる。口唇部は僅かに肥厚させ，細い棒状具による刻み目を施す。器表面は非常に細い縦と横方向のハケを施した後，丹を塗布する。

埦には102・103がある。前者は内弯気味の口縁部に丸底を有す。口径13.8cm，器高５cmを測る。後者は口径13.8cm，器高5.9cmと深い。両者とも底部外面はヘラ削りののちナデで仕上げ，つくりの良い土器である。

高坏は104・105・106がある。104は短く外反する口縁部に胴部の屈折は明瞭で坏部は浅い。105は短い脚部を持ち裾部の開きは鈍い。穿孔は３個所あり外方向から穿つ。106はスマートな脚で裾部は大きく開く。裾部には３個所に孔を穿つ。調整は縦方向のヘラ磨きで内面はナデとハケで仕上げる。

器台は107～109がある。107は他に比べて古相の器台で器壁も厚い。器高は15.3cmと低い。荒いハケとナデで仕上げる。108・109は同タイプの器台で器体は上部で細まり口縁部は鋭く外反する。両者とも器壁の磨耗が激しく調整は不明であるが，109には荒い叩きが残り，二次加熱を受けている。

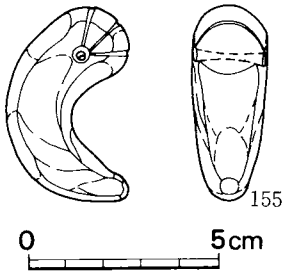
110は支脚で上面平担部には細い孔を穿つ。調整はナデで仕上げ，二次加熱を強く受ける。



第59図　溝１出土土器実測図（1/3）

土製品（図版16，第60図）

大型の土製勾玉155がある。溝１の底面直上から出土した。丁字頭をなすが，磨耗して溝は浅い。全長5.1cm，体部の径1.8cmを測る。孔は両面から穿つ。胎土は精製され焼成も堅固であるが，磨耗が著しく表面がざらつく。

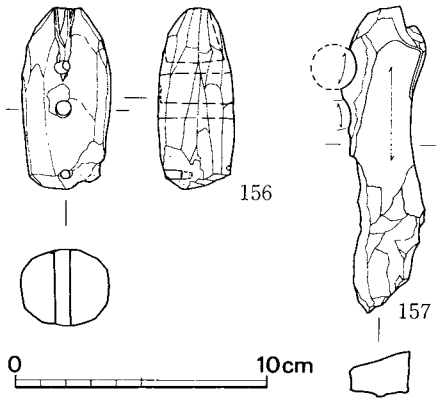


第60図　溝１出土土製品実測図（1/2）

石　器（図版16，第61図）

156は有溝・孔型の石錘で滑石製である。精巧な面どりをし，上下二段に孔を穿っている。上段の孔に接するように表裏に２条と１条の断面「Ｖ」字状の溝を刻み込み緊縛し易く工夫を凝らしている。下部には穿孔途中の孔があり，穿孔時に体部が欠損したものである。全長7.2cm，重さ110ｇである。

157は硬質砂岩製の仕上げ砥石で欠損品である。砥ぎ面は４面あり，この内の３面は円弧状の砥ぎ面をなす。その中の１面を復原すると径が1.9cmを測り，1.9cm以内の棒状のものを砥いだものであろう。



第61図　溝１出土石器実測図（1/3）

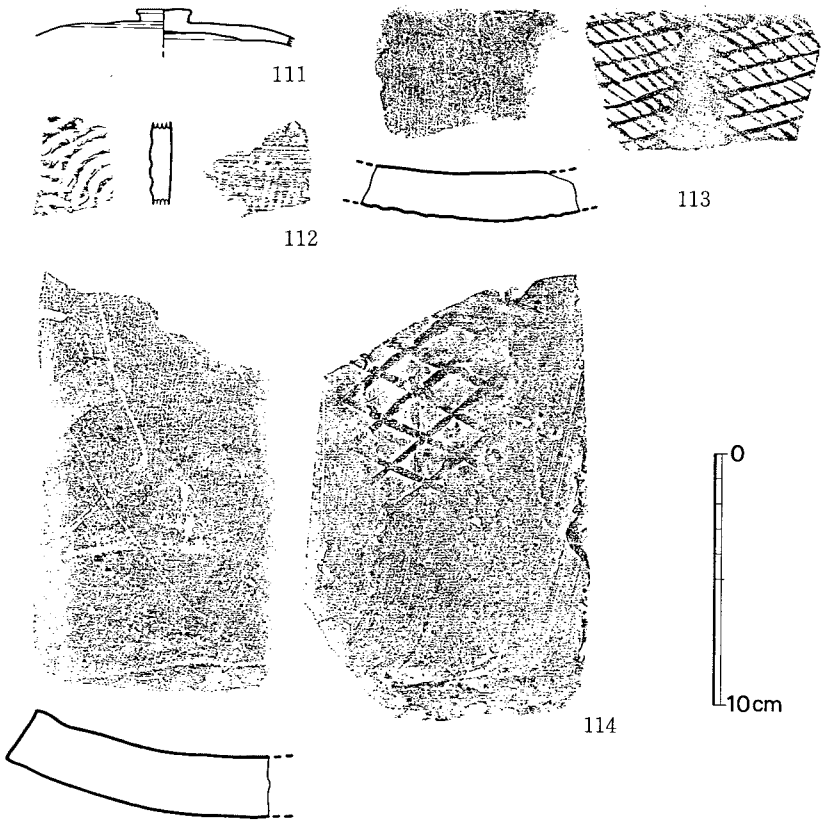
溝２（図版３－(1)，第４図）

発掘区の東端で検出した断面「Ｖ」字状の溝で，丘陵の東裾部を南北方向に延びる。北側は丘陵間を狭り込んだ谷部に続くことから排水機能を持たせていたのであろう。調査時に溝内からの湧水が多く，水位が高いことからも窺える。調査した溝の全長は13.5ｍのみで一部を垣間みたにすぎない。溝の幅は南側で1.5ｍ，北側で2.0ｍ，深さは50～60cmを測り，南から北方向に深くなる。溝内は砂質土が自然堆積していた。

出土遺物は須恵器の坏蓋・甕片，平瓦片，鉄滓44，42kgの他，縄文晩期の扁平局部磨製石斧，砥石，滑石製未製品がある。出土土器と平瓦から溝２の時期は奈良時代後半であろう。

出土遺物

土　器（第62図）



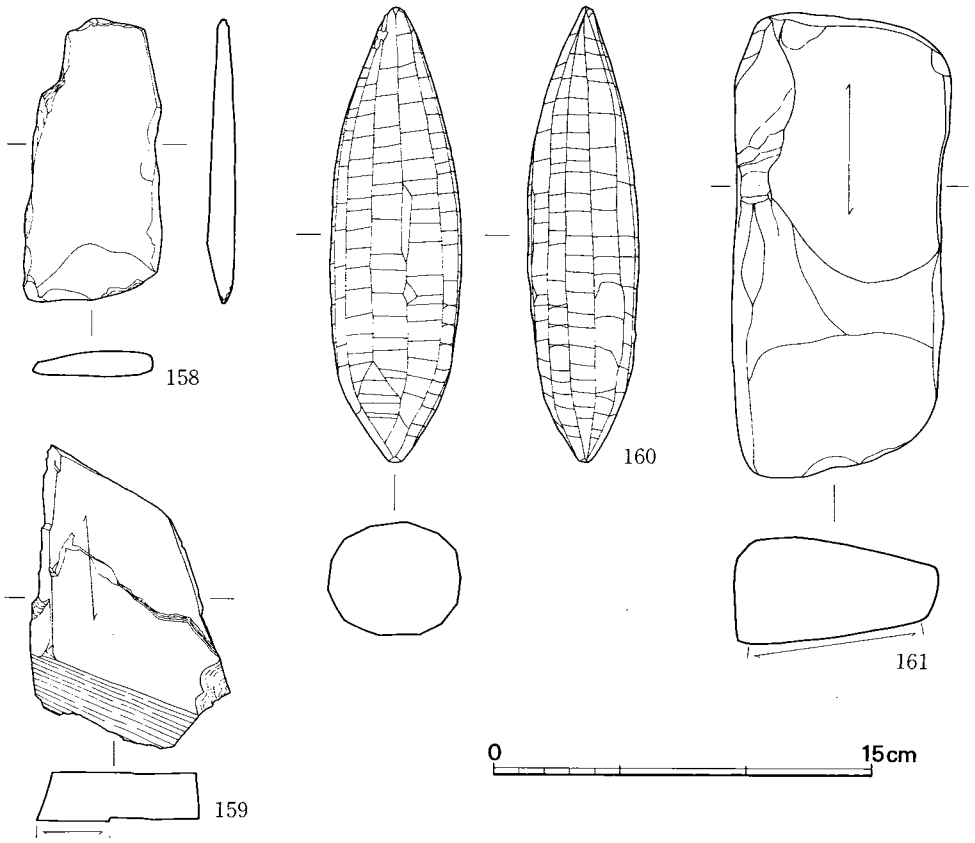
第62図　溝２出土土器・瓦・実測図（1/3）

須恵器の坏蓋111と甕の小片112がある。蓋は平扁な摘みを付すもので，横ナデで仕上げる。後者は内面に同心円の荒い叩き，外面は荒いカキ目と格子目状の叩きを施す。

瓦（図版13，第62図）

平瓦が２点ある。113は凹面が荒い布目痕が残り，凸面は細かい長方形に近い不整いの斜格子叩きを施す。中央部は磨耗している。114の凹面は荒い布目に糸切り痕が僅かに残る。凸面は非常に荒い1.2×1.3cmの斜格子叩きを施し，周囲をナデ消している。小口面はヘラによる面どりを行っている。

石　器（図版16，第63図）



第63図　溝２出土石器実測図（1/3）

158は縄文晩期の扁平局部磨製石斧で玄武岩製である。全体にローリングを受け表面が平滑である。全長11.2cmを測り，刃部は刃こぼれがみられる。

159・161は砥石である。前者は粘板岩製で砥ぎ面は２面である。後者は玄武岩製で砥ぎ面は２面で，全体にローリングを受け丸みを持つ。

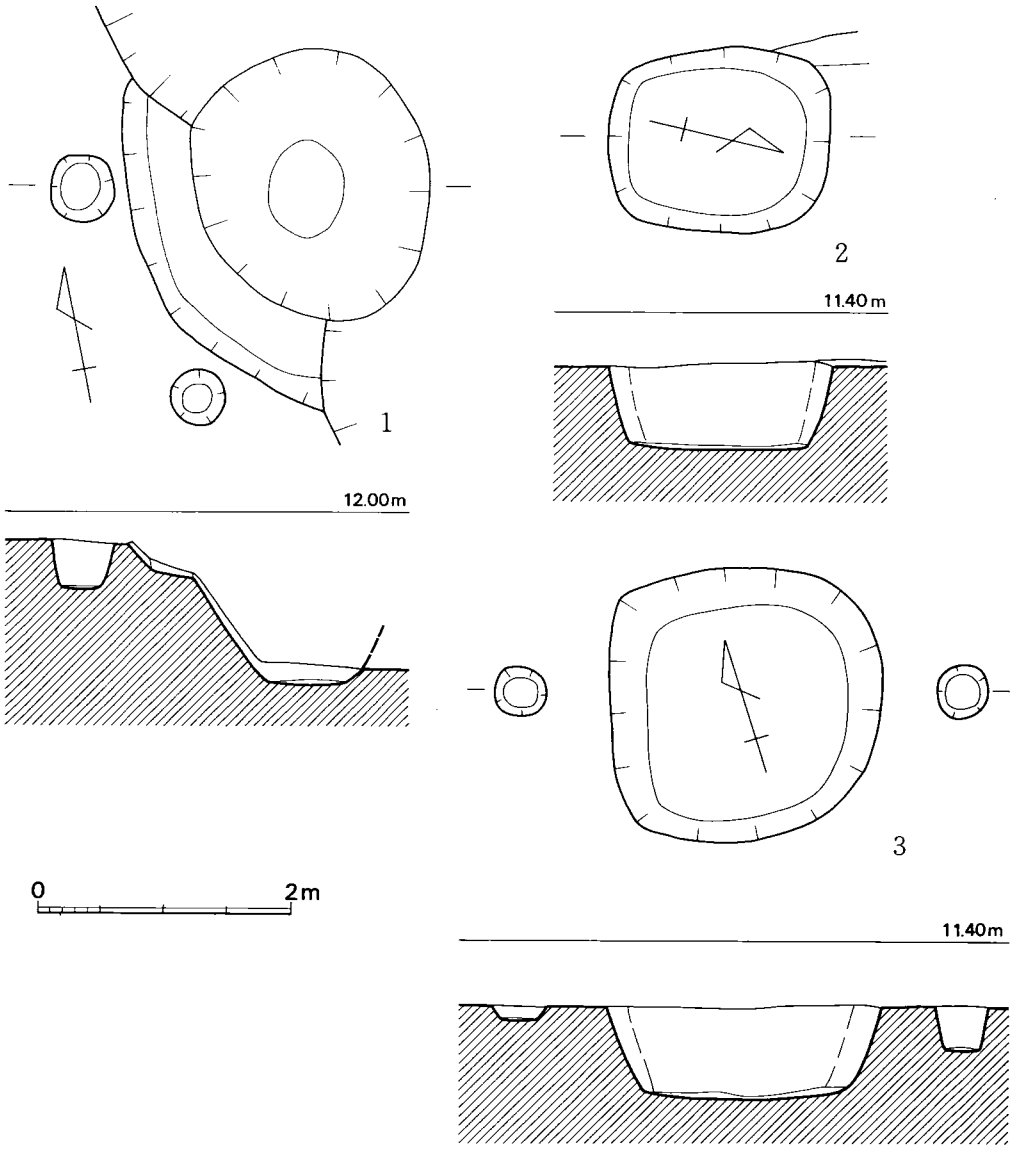
160は滑石製の未製品であり，鰹節状の形をなす。表面には鉄製工具による削痕が著しく残る。全長18.1cmを測る。２号竪穴住居跡出土の紡錘車，溝１の石錘と同質の滑石で明灰白色を呈す。

(5)　井戸状遺構

１号井戸状跡（第64図）

8号竪穴住居跡の北側で検出した井戸跡と考えられる遺構で上面が2/3以上の削平を受け，下部は底面が僅かに遺存する。現存での深さは1.10m強を測り，上部は2段掘りである。断面は逆台形で井戸の縁に沿って2個の柱穴があるが，伴う柱穴か否かは明らかでない。

出土遺物は皆無で時期も明らかではない。



第64図　1号・2号・3号井戸状遺構（1/60）

2号井戸状跡（図版３－(2)，第64図）

溝２沿いに掘られた土壙状の掘り込みで溝２を切っている。井戸にしては浅く機能面では疑問が残るが，湧水が多いことから一応井戸跡として扱う。平面プランは隅円方形で胴張りである。規模は1.45・1.75m，深さ70cmを測る。

出土遺物は皆無である。

3号井戸状跡（図版３－(2)，第64図）

２号井戸跡の北東側で検出した井戸跡で，２号同様湧水が多い。井戸跡を挟むように対峙して２本の柱穴がある。平面形態は不整円形で径2.16m，深さ70cmを測る。

出土遺物は無く時期も明らかではないが，溝２との関連も考えられよう。

(6)　谷部の調査（第４図）

丘陵の東側を抉り込んだように形成された谷で当初重機で表土剝ぎを実施したが，谷が深く重機が埋没する危険が生じたため，重機での掘削を中止し手作業に変更したが，湧水が激しくしかも調査区の壁面が崩壊し始めたことから，一部の土器の採集のみで調査を打ち切った。

出土遺物は土器類が大半で弥生時代から古墳時代にかけての資料が主体を占めている。

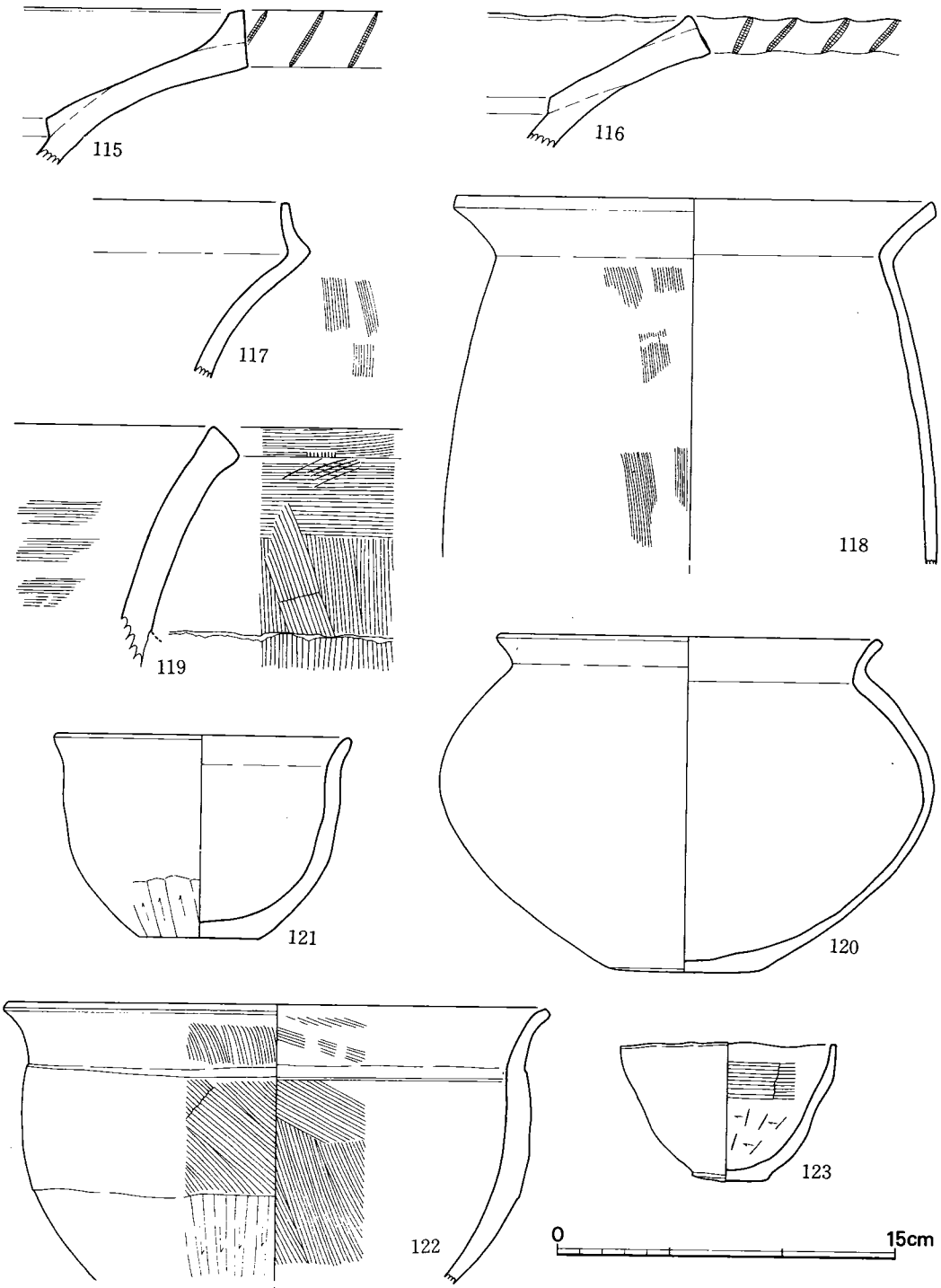
出土遺物

土　器（図版13・14・15，第65～68図）

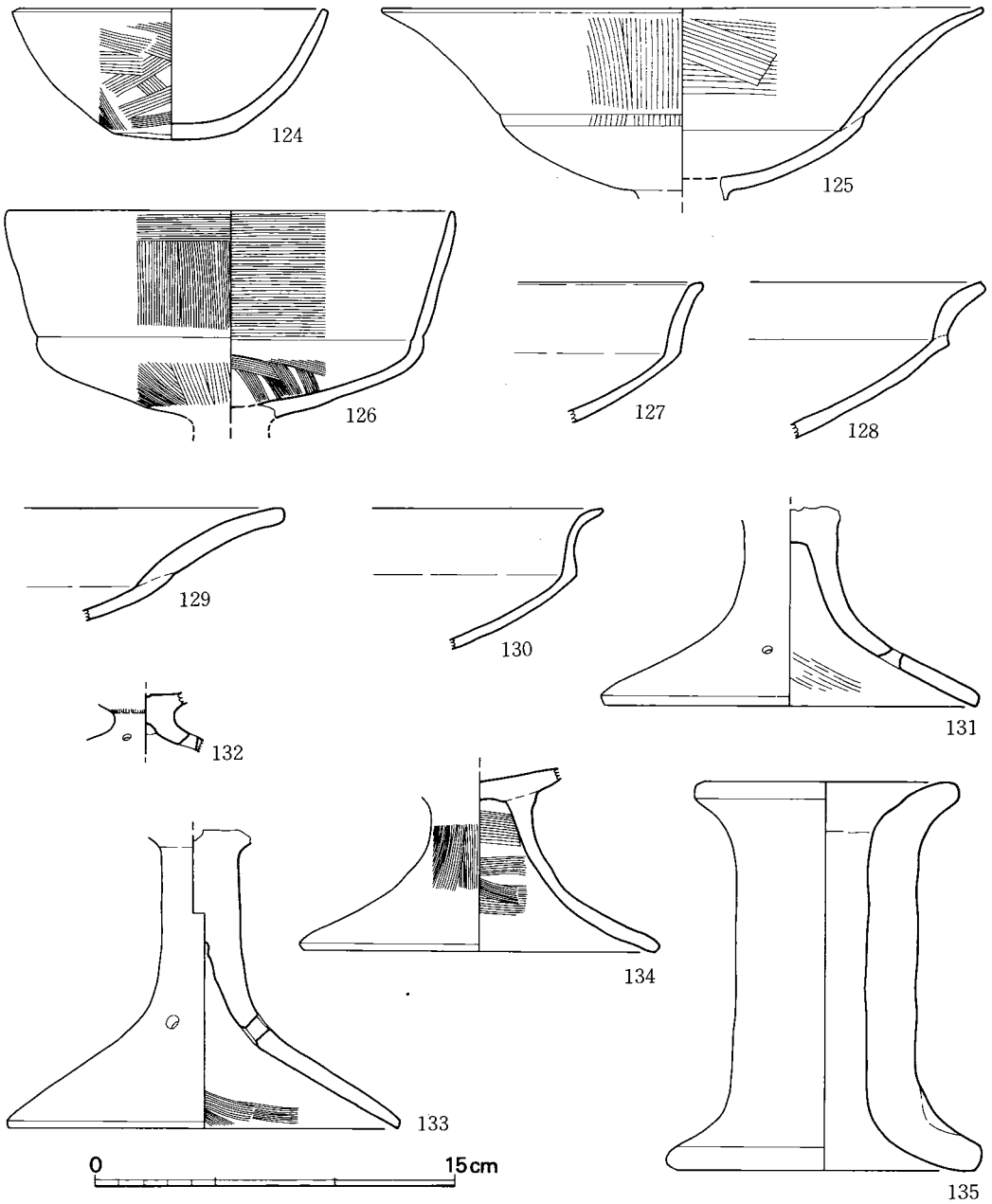
図示した土器は31個体である。器種は大型壺・壺・大型甕・甕・鉢・埦・高坏・器台・支脚がある。

壺には大型の115・116と117がある。115は擬口縁上に粘土紐を廻らし二重口縁を形づくる。口唇部には板の小口による刺突文を配している。口縁部の内側も粘土帯を付し有段をなす。116は口唇部を肥厚させ，115と同様の刻目を施す　117は口縁部が内弯する複合縁壺である。

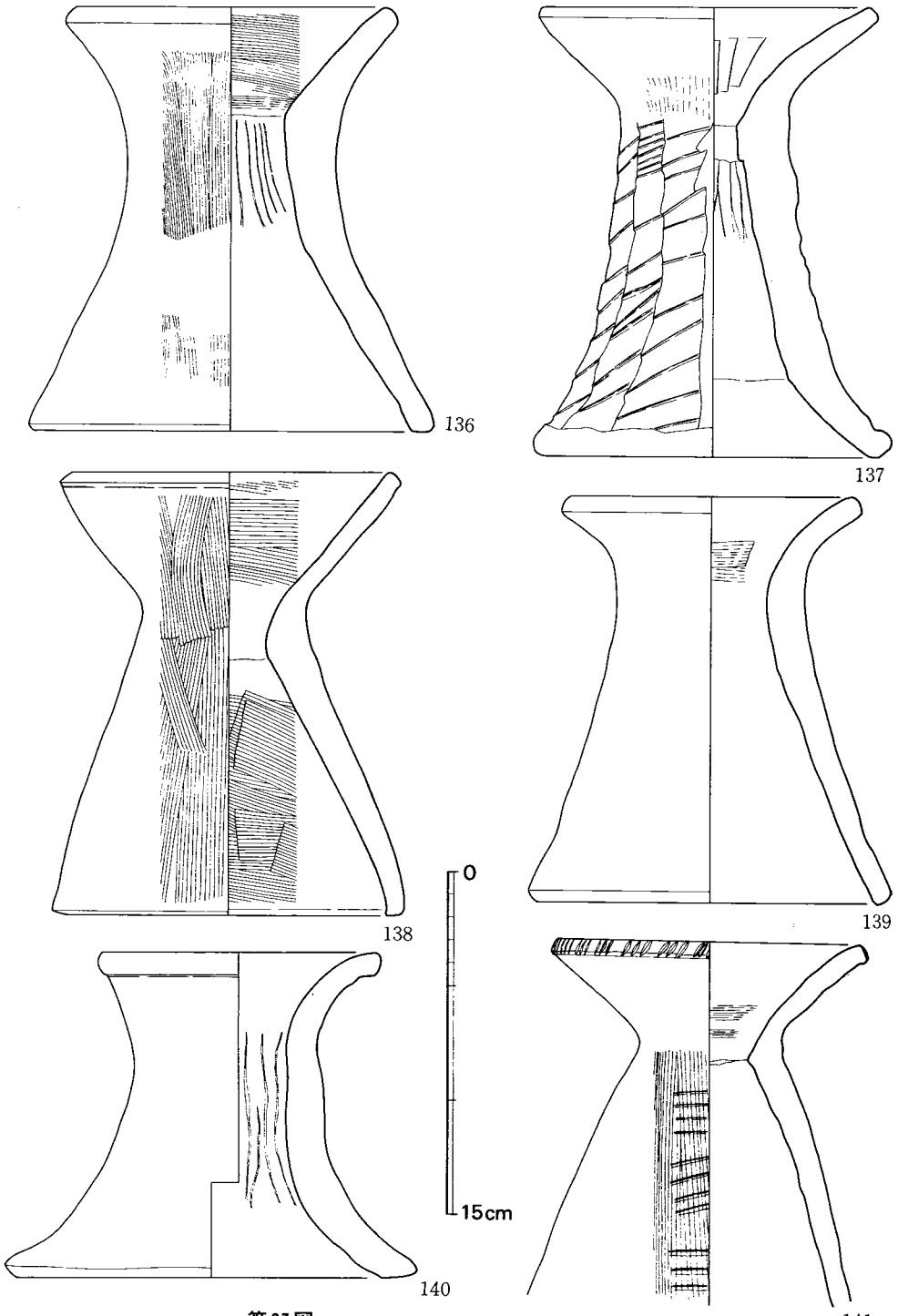
甕は長胴の118，大型片の119，扁平球胴の120がある。119は116の壺同様口唇部を肥厚させ，頸部の凸帯は剝落している。118は「く」字状に外反する口縁部に張りの鈍い長胴をなす。全面に二次加熱を受ける。120は短い口縁部を持ち鋭く「く」字状に外反する。肩から胴部は玉葱状の形をなし，最大径が胴部上半にある。底部は僅かにレンズ状を呈す。調整は横ヘラ磨きが一部に残るが，磨耗し器面がざらつく。



第65図　谷部包含層出土土器実測図（1/8）



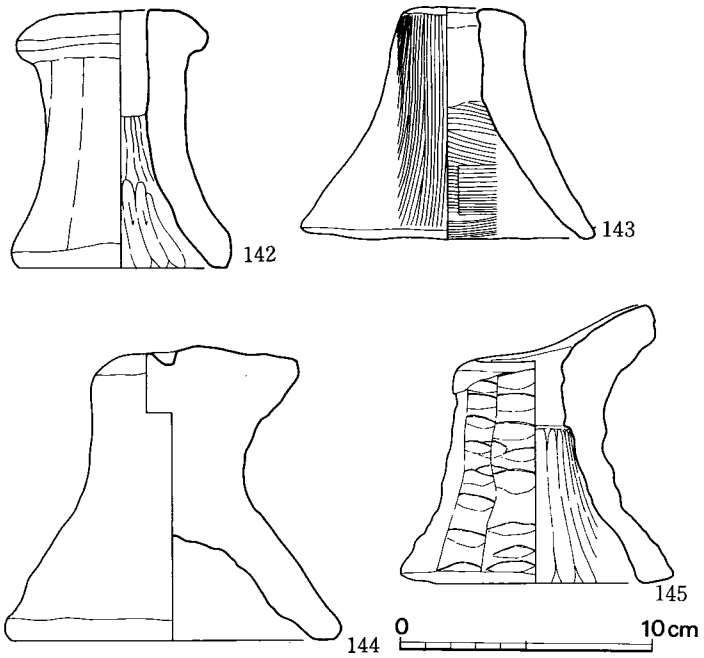
第66図　谷部包含層出土土器実測図（1/3）



第67図　谷部包含層出土土器実測図（1/3）

鉢は3種類ある。121は外反気味の口縁部に底部は平底をなす。底部外面は下から上方向のヘラ削りで仕上げる。122は鈍く外反する口縁部に器壁の厚い胴部を有す。胴下半は板の小口部で削り器壁を薄くする。調整は荒いハケを多用する。123はつくりの粗い小型の鉢で，レンズ状の底部を持つ。

埦は124がある。口径12.8cm，器高5.5cmを測り底部は丸底に近い形状をなす。二次加熱を受ける。



第68図 谷部包含層出土土器実測図（1/3）

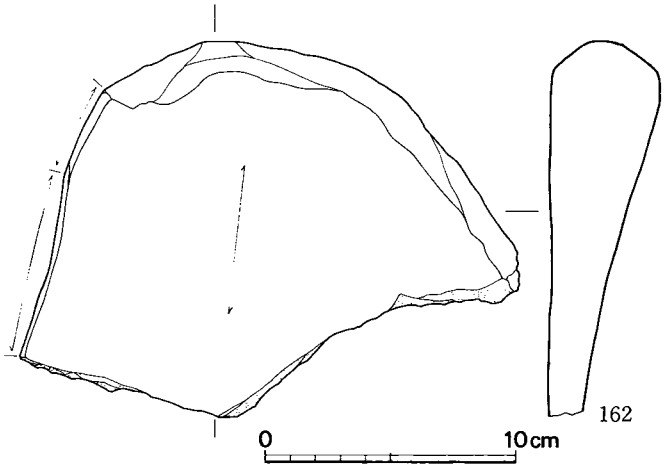
高坏は125～134がある。形態的には時期幅があり弥生時代後期後半から古墳時代に至るものまである。125・126・132は古式土師器の範疇の土器で，125・126は頗るつくりが良質である。126の調整は非常に丁寧な細いハケで仕上げる。脚は裾部に孔を穿つものとそうでないものとがあり，131・133は縦ヘラ磨きで仕上げる。

器台は135～141がある。135は胴部が直線的で口縁部と裾部が同様な外反度を有す。器壁が非常に厚い。136以下は最小径が上半にあり，136・140を除くと弥生時代終末から古墳時代前期頃まで残る器種である。137は器表面に非常に荒い叩きを残し，単位も明瞭に観察できる。粘土紐の接合部も残る。138は口縁部・裾部とも内弯気味である。141は口唇部にヘラによる刺突文を3個1対で配しており，胴部は叩きののちハケで仕上げる。全部の器台の裾部には二次加熱の痕跡を残す。

支脚は142～145があり，型状で4種類がみられる。142は口縁部に粘土紐を付し鍔状をなす。器表面は叩きをナデ消すが，叩きの稜が残る。143は上端を内側に肥厚させ，緩い曲線を描き裾部に至る。荒いハケを多用する。144は柱状部を充塡させ裾部は大きく開く。上部平坦面には凹状円円孔を穿った有角支脚である。145は沓形支脚で外面は非常に荒い棒状叩き，内面は指頭ナデで仕上げる。4個とも強い二次加熱を全面に受ける。

石　器（図版16，第69図）

大型の荒砥石162がある。砂岩製で砥ぎ面は２面で使用痕が顕著である。



第69図　谷部包含層出土石器実測図（1/3）

III 今宿高田遺跡出土鉄滓の調査

大澤正己

昭和59年2月5日

1 概　要

高田遺跡は福岡市西区今宿高田に所在し，舌状丘陵の裾に立地する奈良時代後半の遺跡である。この遺跡の20号住居跡（後世の削平を受けているが鉄滓14kgを出土）及び溝2（V字溝で幅2m・深さ1m・長さ20m弱で鉄滓を47kg採取）から出土した鉄滓の調査依頼を福岡県文化課より受けたので，鉱物組成と化学組成の調査を行い，若干の考察を試みた。調査結果は次の通りである。

(1) 20号住居跡出土鉄滓は砂鉄製錬滓である。鉱物組成は未還元砂鉄粒子をとどめたものと，ヴスタイト（Wüstite:FeO)と小量のマグネタイト(Magnetite:Fe_3O_4)，それにフェアライト(Fayalite:$2FeO\cdot SiO_2$）を晶出した2種類がある。

化学組成は，低チタン含有砂鉄を原料としているため，鉄滓中の二酸化チタン（TiO_2）は1%台と低く，特に未還元砂鉄粒子含有鉄滓は，成分偏折のためか0.13%を示し，バナジウム（V）は0.20～0.23%であった。鉱物組成及び化学組成からみて製錬滓の組成構成である。

(2) 溝2から出土した鉄滓も20号住居跡出土鉄滓同様に，砂鉄製錬滓である。鉱物組成は，ヴスタイト＋マグネタイト＋フェアライトであり，低チタン含有砂鉄の製錬滓組織を示している。

以上の結果より舌状丘陵上もしくは斜面に製錬炉が存在した可能性が強く，また，20号住居跡で，精錬鍛冶用素材の選別を行ったことも考えられるが，後世の削平がひどく，明確な結論を得るまでにいたっていない。なお製錬炉は還元帯のあまり長くない低炉タイプが想定される。

2 試料及び調査方法

Table 1に供試鉄滓の履歴と調査項目を示す。

Table 1　供試材の履歴及び調査項目

符　号	試　料	出土位置	鉄滓外観及び大きさ			調査項目	
			外　観	大きさ(㎜)	重量(g)	顕微鏡組織	化学分析
N-831.	鉄　滓	20号住居跡	炉内滓	55×80×50	610	○	○
N-832	〃	〃	流出滓	60×70×35	320	○	○
N-833	〃	溝　2	炉内滓	55×60×25	110	○	

3　調査結果

Photo 1に鉱物組成，Table 2 に化学組成を示す。

(1)　20号住居跡出土鉄滓（N-831）

肉眼観察

表皮は淡茶褐色で半流動的な小波状の肌をもつ炉内残留滓である。なお，表面にわずかな気泡を露出し，一部にガラス質高溶融部分を有している。裏面は黄褐色で気泡を多発し，最突起局部に高熱で青灰色に変色した炉材粘土を微量付着している。破面は茶褐色から黄褐色を呈し，局部的に気泡を発するところもあるが，全体に緻密でずっしりと重量を感じさせる鉄滓である。なお，表皮側の茶褐色部は磁気が強く，鉄分が多いことが予測される。鉄滓の側面三方は，人為的打欠き破面を呈していて，鉄塊素材の選別対象品となった可能性をもっている。

顕微鏡組織

Photo 1の最上段に示す。鉱物組成は未還元砂鉄粒子の端部から白色粒状のヴスタイト（Wüstite：FeO）へと還元されていく過程の組織を示しており，これに灰色盤状結晶のフェアライト(Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$)と暗黒色ガラス質のスラグから構成されている。未還元砂鉄粒子には格子結晶が認められないところから，低チタン含有砂鉄を原料としたことが推定される。鉄滓は鉱物組成の構成からみて製錬滓に分類される。

化学組織

Table 2に示す。全鉄分（Total Fe)は，製錬滓にしては特別高く57.5%でり，このうち酸化第1鉄（FeO）が47.2%，酸化第2鉄（Fe_2O_3）が29.8%含有されている。この鉄分ら

Table 2 鉄滓及び砂鉄の化学分析結果

符号	遺跡名	遺構名	鉄滓分類	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe_2O_3)	二酸化けい素 (SiO_2)	酸化アルミニウム (Al_2O_3)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO_2)	酸化クロム (Cr_2O_3)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P_2O_5)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	遺滓成分	遺滓成分 Total Fe	TiO_2 Total Fe	注
N-831	高田	20号住居跡	砂鉄製錬滓	奈良時代後半	57.5	−	47.2	29.8	16.62	3.73	0.43	1.16	0.15	0.13	0.21	0.016	0.10	0.03	0.20	0.003	21.94	1.304	0.226	①
N-832	〃	〃	〃	〃	44.6	−	49.3	8.99	27.64	6.98	0.92	1.26	0.26	1.03	0.17	0.031	0.096	0.02	0.23	0.003	35.89	0.805	0.023	〃
参考値 M-831	大塚II	SX 03-1 上層	〃	5~16世紀	55.0	−	50.3	22.71	14.94	6.33	0.13	0.70	0.28	3.57	0.37	0.014	0.11	0.04	0.27	0.003	22.10	0.402	0.065	③
参考値 27	十郎川	SMトレンチB-9	〃	9~10世紀	43.75	0.14	44.74	12.63	22.60	4.92	2.27	1.53	0.26	1.20	0.178	0.00	0.400	0.062	0.477	0.005	31.32	0.716	0.027	③
参考値		砂鉄	砂鉄	現代	63.04	−	25.66	61.61	5.20	3.06	1.40	0.60	0.16	1.03	0.196	0.012	0.096	−	0.742	0.004	−	−	−	④

註

(1) 大澤正己「今宿高田遺跡出土鉄滓の調査」『今宿高田遺跡』（福岡県埋蔵文化財調査報告書第10集）福岡県教育委員会 1984

(2) 福岡市教育委員会 調査遺跡出土鉄滓 発掘担当者 柳澤一男氏 S. 58. 3. 26 現地にて鉄滓入手

(3)イ大澤正己「十郎川遺跡出土鉱滓の調査」『十郎川一』（福岡市早良平野 石丸・古川遺跡）住宅・都市整備公団 1982

ロ大澤正己「福岡平野を中心とした鉱滓の分折」『広石古墳群』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第41集）福岡市教育委員会 1977

(4) 大澤正己前掲書(3)－ロ

は鉱物組成で未還元砂鉄粒子が検出された様に酸化第２鉄(Fe_2O_3)が多くて29.8%ある。これは金属鉄の酸化物ではなくて，未還元砂鉄粒子を示すものであろう。

随伴微量元素らは全体的に低目である。特に二酸化チタン(TiO_2)が製錬滓としては特別低く0.13%であった。製錬滓で低チタン砂鉄を装入したにしても0.13%は特異であり，検討を要する数字である。同じく砂鉄のみに含有されるバナジウム（V）は，0.20%で通常的数値であり，他は酸化マンガン(MnO) 0.15%，酸化クロム(Cr_2O_3) 0.21%，五酸化燐(P_2O_5)0.10%銅（Cu）0.003%であった。

この様な鉱物組成及び化学組成からみて，該材を精錬鍛冶（大鍛冶）原料にして鉄分を抽出しようとしても，当時の技術では無理であったろう。鉄塊素材として住居跡に搬入されたにしても，打欠き破面から体験的に使用不可として廃棄された塊と解釈すべきであろう。

(2) 20号住居跡出土鉄滓（N-832）

肉眼観察

表皮は黒色飴状表面に小じわをもった粘稠質流出滓である。裏面も黒色で凹凸を有し，局部的に青灰色炉材粘土を付着している。破面は黄褐色で気泡少なく緻密である。磁性はほとんど帯びていない。

顕微鏡組織

Photo 1の２段目に示す。鉱物組成は白色粒状小結晶のヴスタイトと淡灰色多角形状のマグネタイト（小結晶），それに灰色長柱状のフェアライト及び基地の暗黒色ガラス質スラグから構成されている。各結晶は未成長の状態で晶出しており，冷却速度が早かったことを物語っている。これも砂鉄製錬滓組織である。

化学組織

Table 2に示す。全鉄分(Total Fe)は44.6%と，N-831鉄滓に比べると低目であるが，粘稠質鉄滓で，鉄分と滓の分離が悪い鉄滓である。酸化第１鉄(FeO)は49.3%，酸化第２鉄(Fe_2O_3)は8.99%であった。次に二酸化チタン(TiO_2)が1.03%，バナジウム（V）0.23%であり，やはり極低チタン含有砂鉄を使った製錬滓である。他の随伴微量元素は，N-831鉄滓に近似した値を示している。造滓成分($SiO_2+Al_2O_3+MgO+CaO$)は，35.89%であった。

(3) 溝２出土鉄滓（N-833）

肉眼観察

表裏共に黄褐色につつまれ，気泡を局部的に発した炉内残留滓である。軟質で破面も表裏と同色を呈し，多孔質であった。

顕微鏡組織

Photo 1 の最下段に示す。鉱物組織は白色粒状のヴスタイトに灰色多角形状のマグネタイト，これに灰色盤状結晶で大きく成長したフェアライトを晶出し，これらの間隙を基地の暗黒色ガラス質が埋めている。これも低チタン含有砂鉄を原料とする製錬滓である。

4 考 察

高田遺跡の所在する今宿地区は，30ヶ所以上の鉄滓出土地を抱えた地域であり，[①]特に地質的にみても糸島花崗閃緑岩系で，[②]大原海岸の砂鉄成分でみられる様に，高品位の極低チタン砂鉄（Table 2 の砂鉄成分参照）を賦存し，良質炉材粘土を産して製錬に適した所である。これを裏付ける様に低丘陵地周辺から製鉄遺構が幾つか検出されている。古くは徳永西遺跡，[③]続いて十郎川遺跡，[④]最近では大塚II遺跡，[⑤]が調査され，いずれも製錬炉の痕跡と鉄滓らが多く出土している。高田遺跡は，後世の破壊がひどく製錬炉の検出まではいたっていないが，出土鉄滓から製錬炉存在の予測がたてられる。

Table 2には，大塚II遺跡及び十郎川遺跡出土製錬滓の分析値を示している。大塚II遺跡の二酸化チタン（TiO_2）が3.57%と，やや高目であるが他は，高田遺跡出土製錬滓に近似したものである。いずれも，大原海岸採取砂鉄に近い成分系のものを原料としたのであろう。

高田遺跡の製錬滓中には，未還元砂鉄粒子を残留するものが検出された。こういった鉱物組成を示すものが幾つか他遺跡で検出されている。同じ今宿地区では十郎川遺跡出土鉄滓（I-8区台地溝内出土鉱滓：8T-814，化学分析は行っていない）[⑥]であり，他は埼玉県大里郡岡部町の西浦北遺跡のK 9 遺構出土の鉄滓[⑦]や群馬県渋川市八木の有馬条里遺跡出土鉄滓[⑧]がある。この西浦北遺跡及び有馬条里遺跡の製錬炉は，11世紀以降に比定され，円筒状炉体で地上に直立する型式であり炉前に排滓溝が設置されている。炉床直径は50cm前後で炉高はあまり高くないと考えられる。

製錬炉の還元帯のあまり長くない炉出土の鉄滓に未還砂鉄を多く残留した傾向があり，これらから推定して高田遺跡近傍に存在したであろうと考えられる製錬炉は低炉タイプに想定される。

ただし，千葉県流山市の中ノ坪II遺跡の製錬炉は，関東地方で多くみられる竪炉の典型的なもので，円筒状炉体を斜面に掘り込んで構築し，三方の土手を炉体の補強に利用して還元帯を

充分にとったもので，これからも未還元砂鉄粒子鉄滓が検出されている。[9] 未還元砂鉄粒子は製錬操業末期に装入した砂鉄が鉄滓に付着して残る場合もありうるので，これらをふくめて，未還元砂鉄粒子と低炉・竪炉の関係を追求しなければならないと考える。

20号住居跡より14kgの鉄滓が出土している。これが単なる混入か搬入品か問題となる。今回調査した鉄滓のN－831は，人工による破砕加工の痕跡を残し，鉄分の高い所から，製錬塊採用取用に搬入した可能性を示している。しかし，N－832鉄滓は流出滓で外観からみても鉄分のとれる塊ではない。このことから20号住居跡出土鉄滓が，どの様な意味のものか今後の研究課題として残る問題である。なお，住居址内で選別鉄滓を出土したと想定される遺跡は次の類例が挙げられる。

(1) 千葉県流山市 中ノ坪Ⅰ遺跡[10]
(2) 〃 千葉市 東寺山・戸張作遺跡[11]
(3) 〃 松戸市 金楠台遺跡3号住居跡[12]
(4) 〃 柏市 鴻ノ巣遺跡[13]
(5) 〃 成田市 御幸畑遺物[14]
(6) 〃 我孫子市 日秀西遺跡[15]
(7) 〃 成田市 公津原遺跡[16]
(8) 富山県射水部 東山Ⅱ遺跡[17]
(9) 岡山県英田部 上相遺跡1号住居址[18]

これらは6世紀後半から9世紀に比定される遺跡である。住居跡出土鉄滓は製錬滓の場合，含鉄鉄滓ともいうべく金属鉄を含有するもので，精錬鍛冶（大鍛冶）用素材となり，残りはその選別滓である筈である。住居跡出土鉄滓は，この様に深い意味あいがあるので取扱いは十分なる注意が必要と考えられる。

注

① 柳澤一男「福岡平野を中心とした古代製鉄遺跡」『広石古墳群』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第41集）福岡市教育委員会 1977
② 松本達郎・野田光雄・宮久三千年『日本地方地質誌九州地方』 朝倉書店 1962
③ 奴国研究会 1975年調査 柳澤一男前掲書①
④ 吉岡完祐他『十郎川一』（福岡市早良平野 石丸・古川遺跡） 住宅・郡市整備公団 1982
⑤ 福岡市教育委員会柳澤一男氏担当調査，1983年度，報告書準備中
⑥ 大澤正己「西浦北遺跡出土の鉄滓・鉄塊の調査」『西浦北遺跡』（埼玉県大里郡岡部町埋蔵文化財発掘調査報告 第 集） 岡部町教育委員会 1984
⑧ 大澤正己「有馬条里遺跡出土鉄塊・鉱滓（製錬滓）・精錬鍛冶椀形滓の調査」『有馬条里 遺

跡』（渋川市発掘調査報告書　第７集）渋川市教育委員会　1983

⑨㋑　川根正教「東深井中ノ坪の現場から～中ノ坪第Ⅰ・第Ⅱ遺跡の調査～」『流山市郷土資料館年報』№5　1983

㋺　穴澤義功「中の坪遺跡は何を語るか」上掲書と同じ

㋩　中ノ坪第Ⅱ遺跡調査会「中の坪第Ⅱ遺跡」（奈良時代後期の製鉄工場）現地説明会資料　1981　9　30

㋥　穴澤義功「古代製鉄炉の第１次製品について」（千葉・中ノ坪遺跡の結果から）『たたら研究会昭和57年度大会資料』　1982　10　26

㋭　穴澤義功「千葉市流山市中ノ坪Ⅰ・Ⅱ製鉄遺跡」『たたら研究会昭和56年度大会資料』　1981　11　21

㋬　大澤へ鉄滓の調査依頼がきていて本報告（1984．８）へ掲載予定

⑩　穴澤義功前掲書⑨－㋺

⑪　大澤正己「千葉県下遺跡出土の製鉄関係遺物の分折調査」『千葉県文化財センター研究紀要』７　財団法人千葉県文化財センター　1982

⑫　穴澤義功前掲書⑨－㋺　大澤調査の鉄滓は精錬鍛冶滓であった。⑪　他鉄滓の調査で確認が心要である。

⑬　穴澤義功前掲書⑨－㋺　大澤調査で精錬鍛冶滓であった。⑪

⑭　大澤正己前掲書⑪

⑮　大澤正己前掲書⑪

⑯　大澤正己前掲書⑪

⑰　大澤正己「太閤山ランド建設に伴う遺跡調査の製鉄関連遺物の分折調査」『県民公園太閤山ランド内遺跡群調査報告（２）』富山県教育委員会　1983

⑱㋑　松本和男「上相遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（３）』所収　岡山県教育委員会　1973

㋺　大澤正己「岡山県下の古代製鉄」『稼山遺跡群』久米開発事業に伴う文化財調査委員会　1980

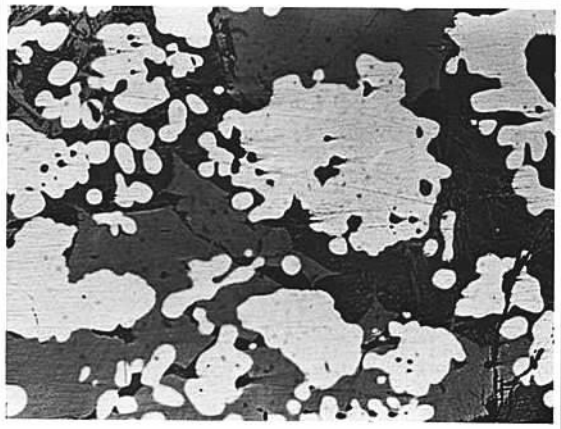
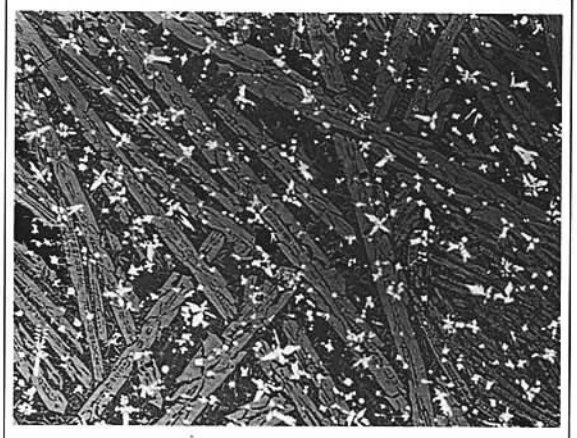
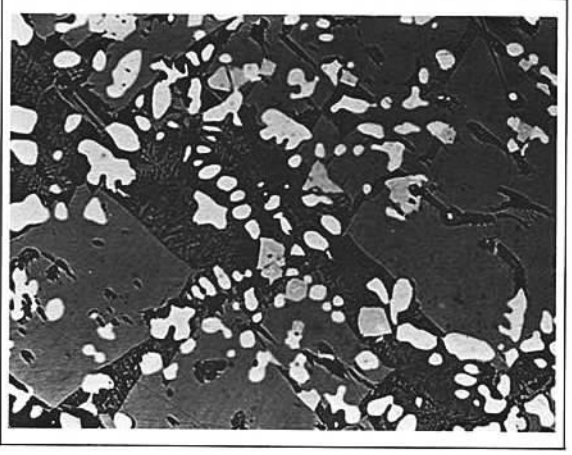
N—831 今宿高田遺跡 (20号住居跡出土) 製　錬　滓 ×100 外観写真 1/2.5		
N—832 今宿高田遺跡 (20号住居跡出土) 製　錬　滓 ×100 外観写真 1/2.5		
N—833 今宿高田遺跡 (溝2出土) 製　錬　滓 ×100 外観写真 1/2.5		

Photo 1　鉄滓の顕微鏡組織

Ⅳ　結　語

今宿高田遺跡は弥生時代後期後半から古墳時代前期，古墳時代後期，奈良時代等の竪穴住居跡と溝状遺構その他を検出し，当該地が古墳時代前期から間欠的に生活の場として利用されていたが，遺構自体の遺存状態が悪く全容の把握が困難な竪穴住居跡が多い。それにもまして重複関係が著しく新旧関係にも不明瞭な点が多々あり，遺跡総体としての理解を深めるには無理な点があった。その中にあって，良好な古式土師器を伴った21号・23号・26号・27号竪穴住居跡の検出をみ，さらに当地が古くからカナクソ田の俗名が残っており，田畑の耕作と共に鉄滓の出土が目立って多く，周辺地域を含めて奈良時代頃から鉄生産の条件を備えた適所であったことが判明している（註１）。調査した遺跡内でも奈良時代の竪穴住居跡，同期の溝状遺構及び包含層から総重量62.16kgの鉄滓を出土したことからも上記の証といえる。しかし，調査区内での鍛治遺構は検証しておらず，20号竪穴住居跡もその痕跡を窺い知ることは不可能で，溝２との関連する調査区外に鍛治遺跡の存在が想定される。

出土した古式土師器については，塚堂遺跡Ｅ地区の報文中で記述しておいたのでここでは簡略に概要を述べるに留める。

庄内式併行期にある住居跡は23号・26号・27号である。出土した土器群でみると時期差の少ない住居であるが，新旧関係では27号が最も古いことになる。一括資料に器種の欠落があり，明確な言及は避けるが，27号住居は三雲遺跡のサキゾノ１号住居(註２)の庄内型甕と併行関係にあり，23号・26号住居は同時併存と考えられ纒向遺跡で甕Ｃ（註３）とした時期の所産であろう。

21号住居は23号・26号住居より後出する土器群で，布留(古)式併行期とすることができよう。この時期の甕は直線的に上方に伸びる古相の口縁に内弯口縁が混在する一群で，調整に横ハケと縦ハケを基調とし，肩部に１条～５条の沈線を廻らしている。北部九州から出土するこの時期の甕には波状あるいは直線的な沈線を廻らす例が多く，甕Ｃとする時期には通例１本が多いが，布留(古)式になると装飾性が強調され本数が増加するようだ。この沈線は山陰系の土器に多用されており，当地方からの導入が考慮される。

鉄生産については，大澤正己氏の分析と考察が随所に発表されており（註４），博多湾周辺の北崎から津屋崎にかけての海岸砂丘からは頗る良質の砂鉄が採集されることから，古くからこの砂鉄を利用しての鉄生産が活発であったといわれている。この中でも特に北崎海岸の砂鉄が著名で，「全鉄分が67～68%含まれ，製錬時に鉄と鉱滓の分離を阻害する二酸化チタンが１%以下で製錬に適している」とされる（註５）。

古くは弥生時代にこの砂鉄をめぐって北部九州の有力首長層間での覇権争いが想定され（註６），古墳時代にも古墳に供献された鉄滓の出土が目立つ（註７）。奈良時代以降では二丈町

から早良平野にかけて鉄滓の出土例の増加とともに製鉄炉，炭窯，鍛冶炉等の発見例がある(註８)。

さらに，「延喜式」巻24の主計寮上で，筑前国の貢品物に鍬・鉄の記載があることから，当周辺の砂鉄を利用したとの指摘があり（註９），良質の砂鉄利用が一段と高揚したことを物語ている。

註

註１．長谷川熊彦「砂鉄」―1963―技術書院。

大滓正己「前原町波多江遺跡出土鉄滓の分折調査」(今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第６集上巻）―1982―福岡県教育委員会

註２．福岡県教育委員会「三雲遺跡Ⅲ」(福岡県文化財調査報告第63集）―1982―

註３．橿原考古学研究所編「纒向」―1976―

註４．註１の大滓氏の考察，大滓正己「二丈町深江・塚田遺跡出土鉄滓の分折調査」(今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第７集）―1982―福岡県教育委員会，「八熊遺跡出土鉱滓・砂鉄の分折調査と考察」(八熊製鉄遺跡・大牟田遺跡―志摩町文化財調査報告第２集）―1982― 志摩町教育委員会等がある。

註５．註１の大滓氏の考察

註６．奥野正男「邪馬台国発掘」(ＰＨＰ研究所）―1983―

註７．金武古墳群吉武Ｌ群４～６号，広石古墳群等がある。

註８．註４の八熊製鉄遺跡からの発見例がある。

註９．坂田武彦・岡崎敬「有田遺跡発見の球状酸化鉄の冶金学的分折」(有田遺跡－福岡市有田古代集落遺跡第二次調査報告）―1968―福岡市教育委員会

図　　版

(1) 高田遺跡航空写真

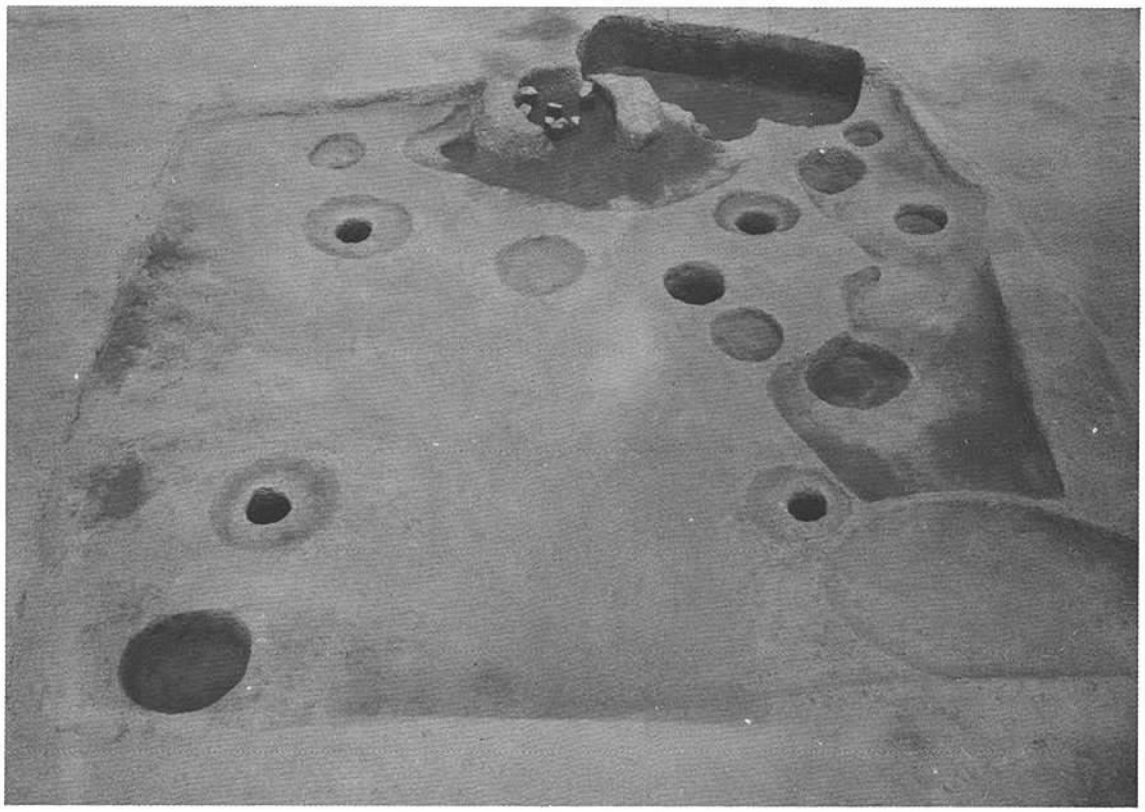
(2) 高田遺跡航空写真

(1) 溝1と北西側竪穴住居跡群（東から）

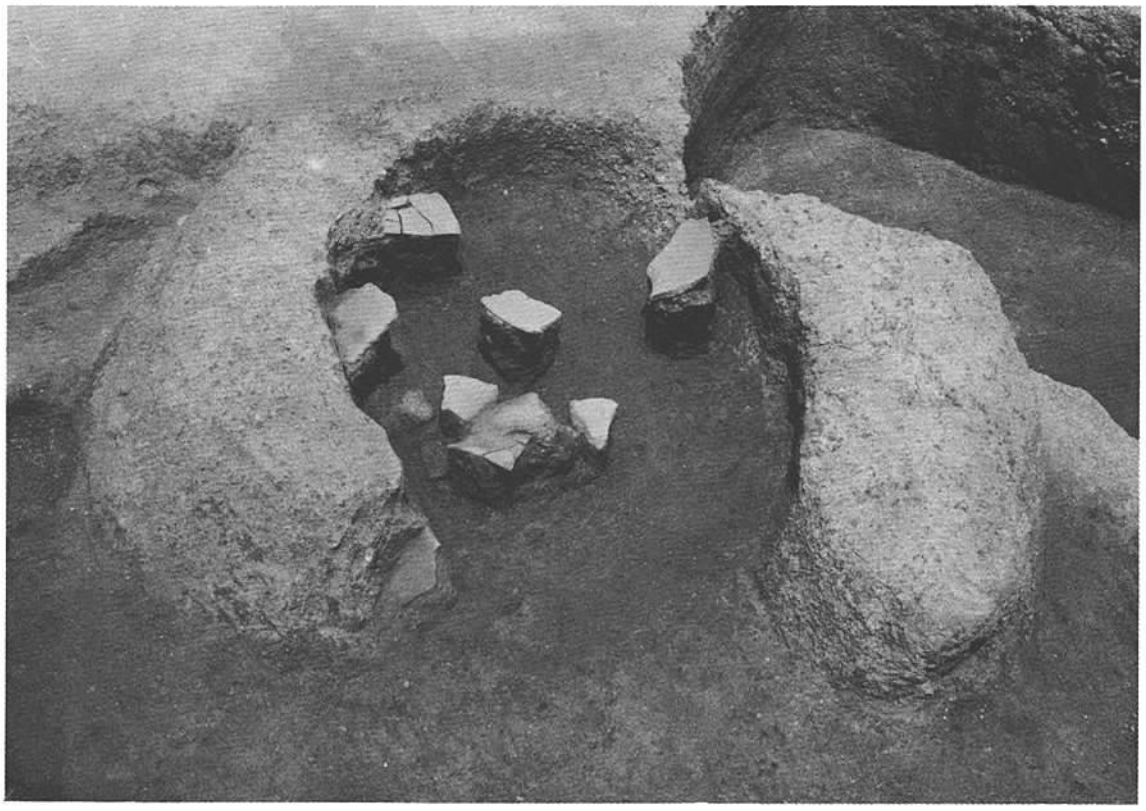
(2) 溝1と西側竪穴住居跡群（東から）

(1) 溝 2 と南側竪穴住居跡群（東から）

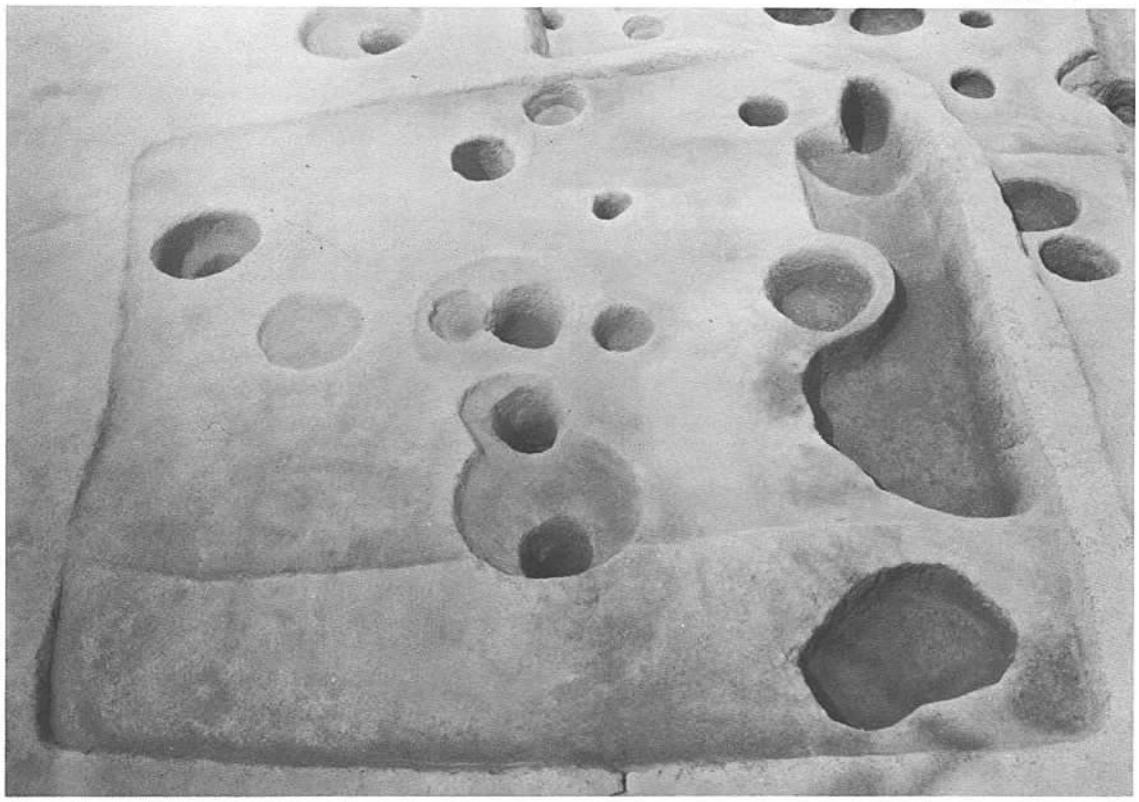
(2) 溝 2 と井戸状跡，竪穴住居跡群（東から）



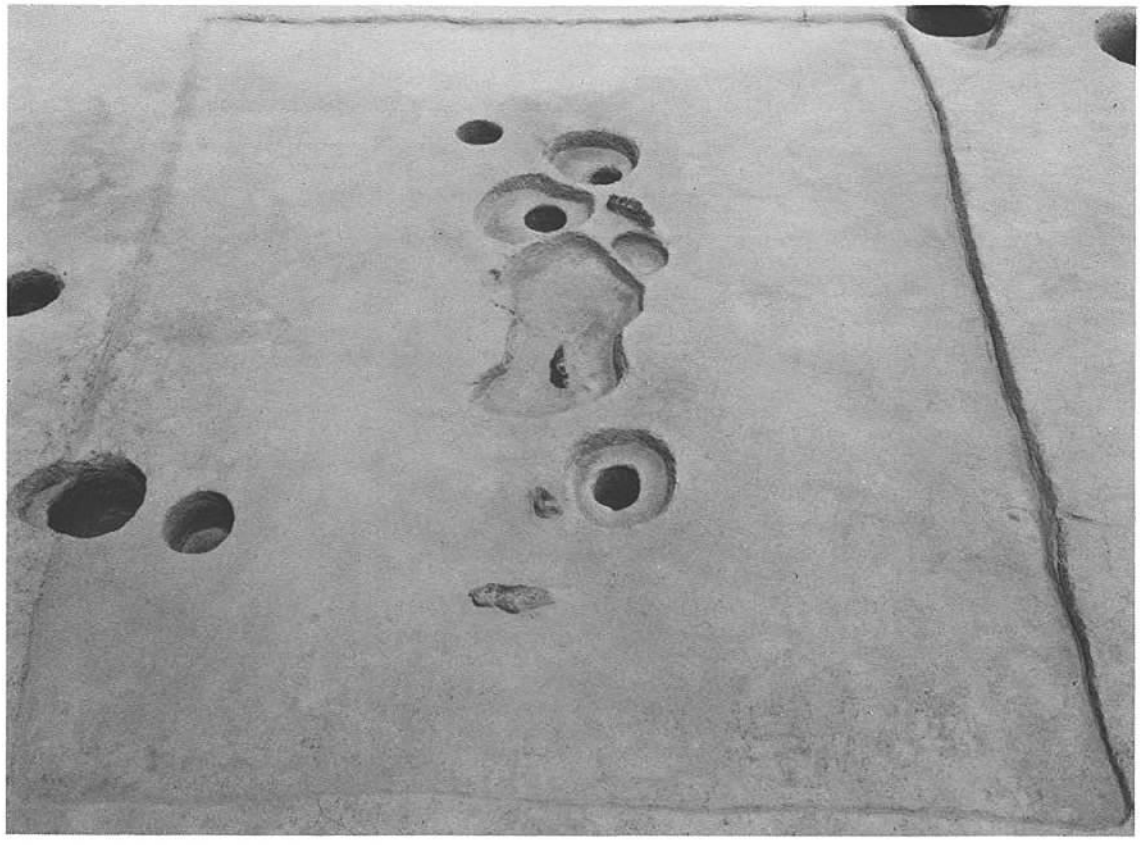
(1) 2号竪穴住居跡（南から）



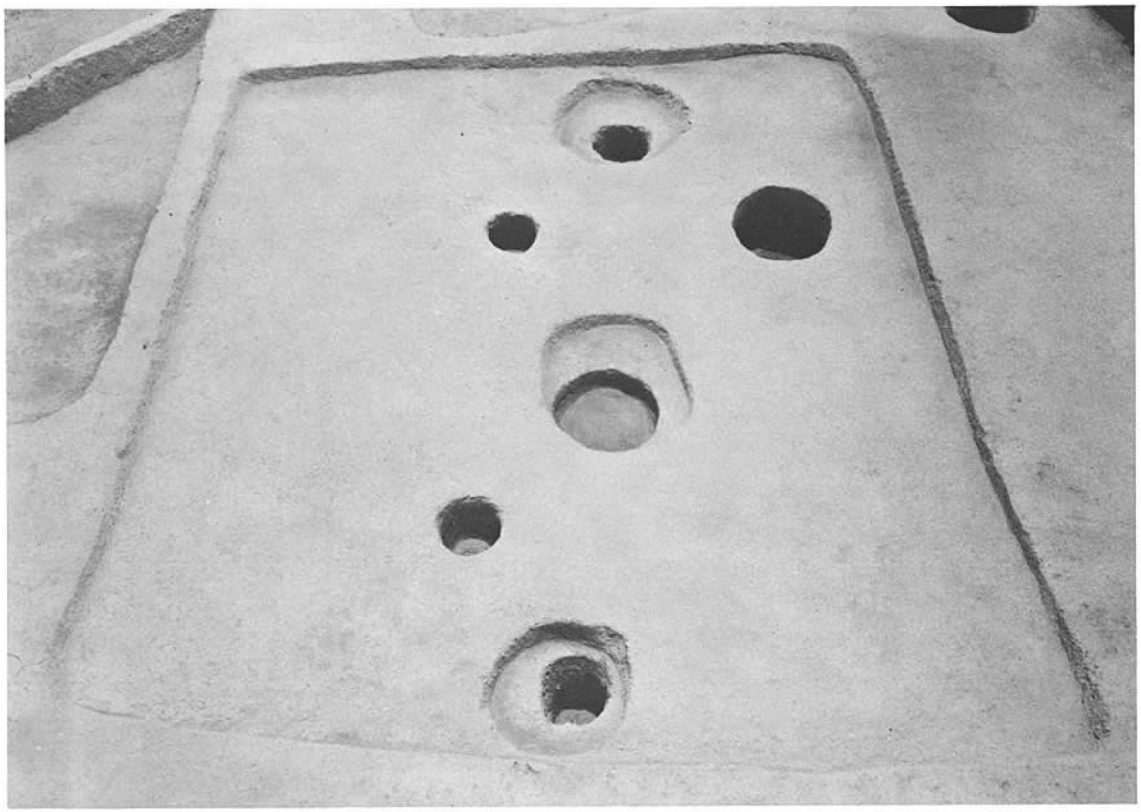
(2) 2号竪穴住居跡竈出土状態



(1) 6号竪穴住居跡（南から）



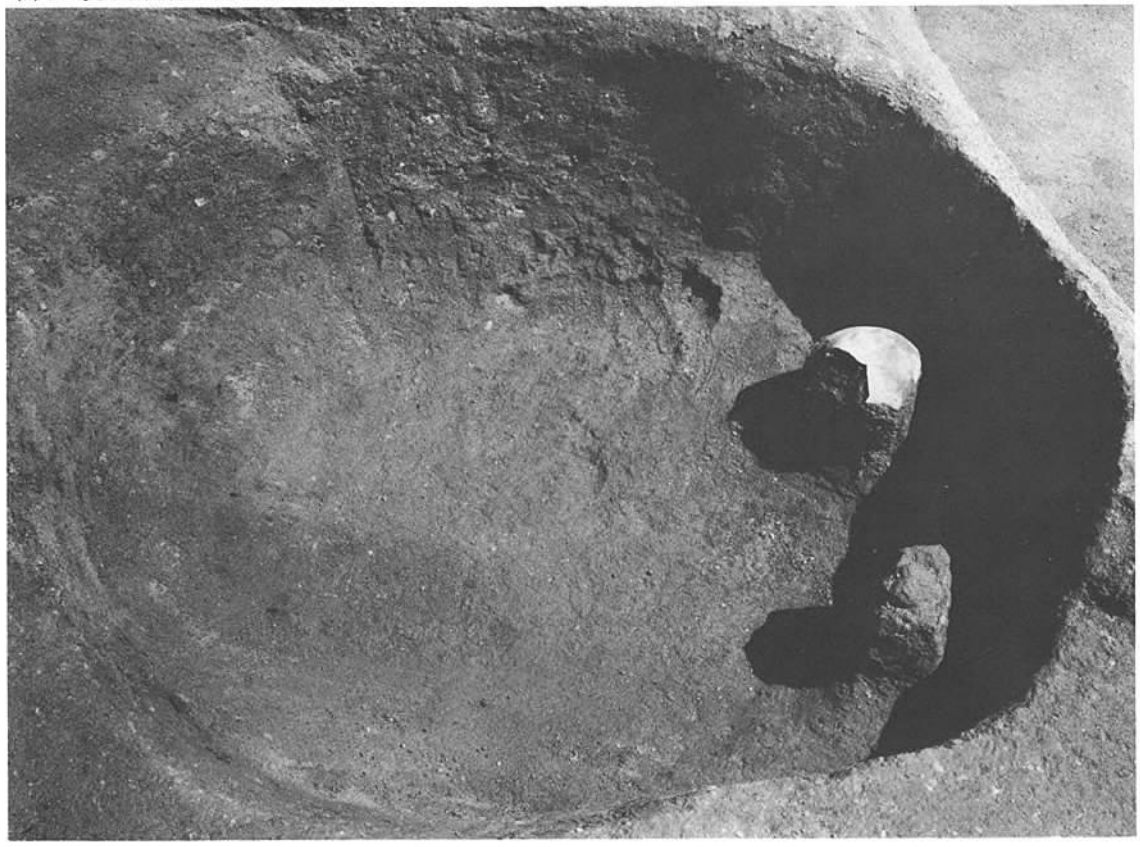
(2) 8号竪穴住居跡（南から）



(1) 9号竪穴住居跡（西から）

(2) 21号竪穴住居跡と遺物出土状態（南から）

(1) 21号竪穴住居跡遺物出土状態



(2) 3号土壙（南から）

5

23

6

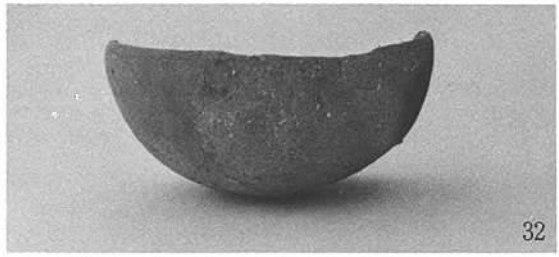
29

18

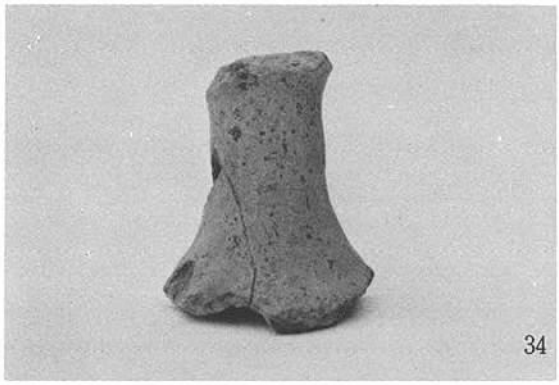
30

20

3号(5・6), 5号(18), 6号(20), 8号(23), 12号(29・30)竪穴住居跡出土遺物


32

33


34

36

43

44

45

46

47

13号(32～34)，17号(36)，21号(43～47) 竪穴住居跡出土遺物

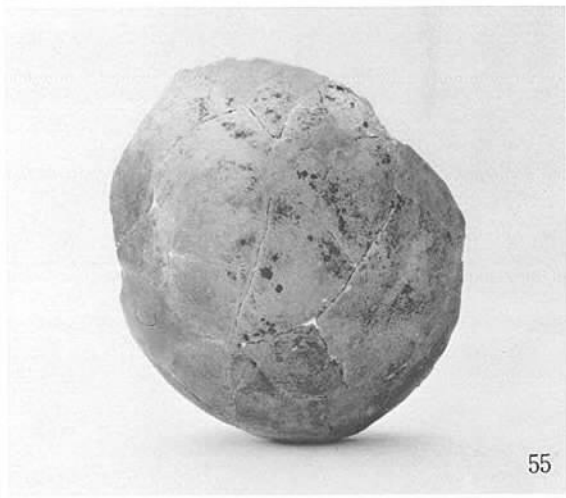
49

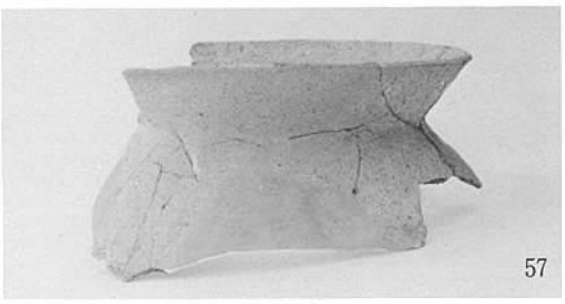
50

52

53

54


55


57

21号竪穴住居跡出土遺物

58

60

62

63

64

69

72

73

21号(58・60～63)，22号(63)，23号(64・69)，26号(72・73) 竪穴住居跡出土遺物

75

77

78

79

80

85

86

87

90

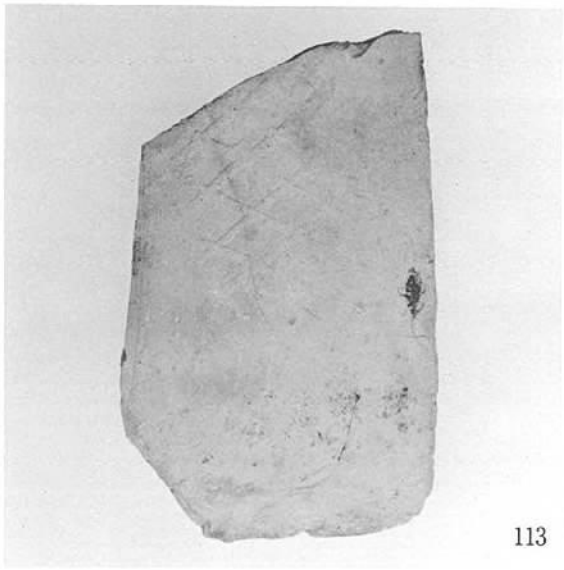
91

26号(75・77～79)，27号(80)，28号(85～87・90・91) 竪穴住居跡出土遺物

92

97

104


113

118

121

124

131

133

29号(92) 竪穴住居跡, 3号(97) 土壙, 溝1(104), 溝2(113), 谷部包含層(118・121・124・131・133)出土遺物

135

138

136

139

137

140

谷部包含層出土遺物

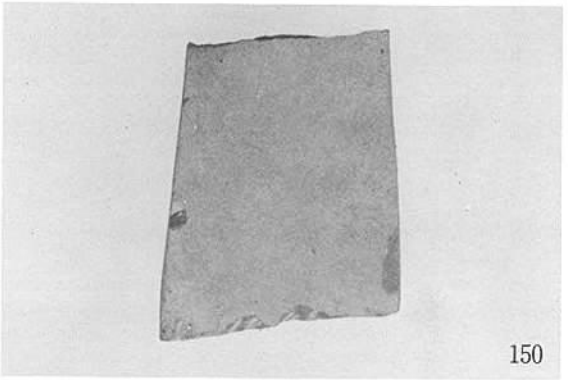
141

142

143

145

149

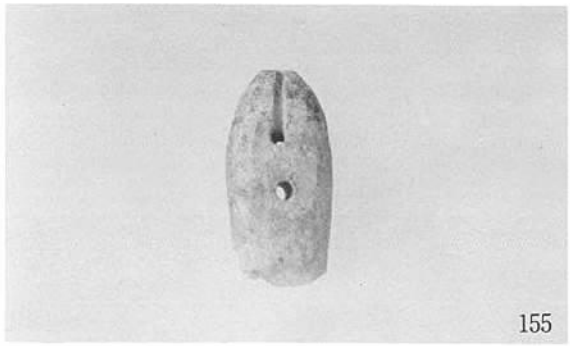


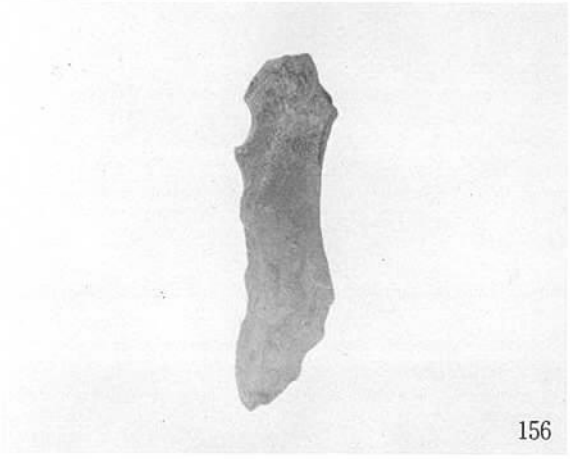
150

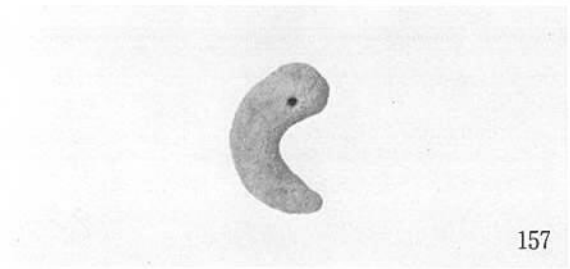
152

153

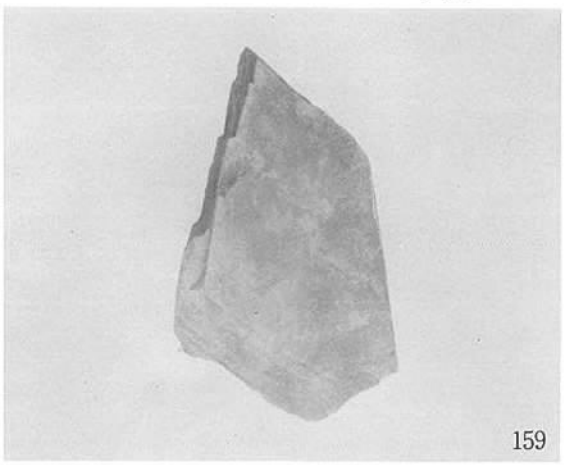
谷部包含層(141～143・145)，5号(149・150)，23号(152) 竪穴住居跡，5号土壙(153) 出土遺物


155

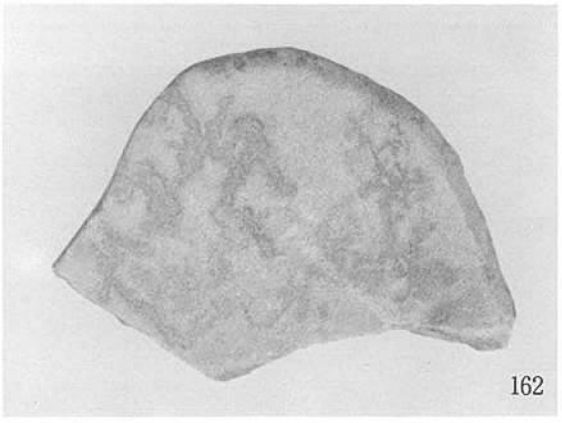

156


157

158


159

161


162

溝1(155～157)，溝2(158・159・161)，谷部包含層(162) 出土遺物

今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第10集

今宿 高田遺跡

昭和59年 3 月31日

発 行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印 刷 赤坂印刷株式会社
福岡市中央区大手門1丁目8番34号